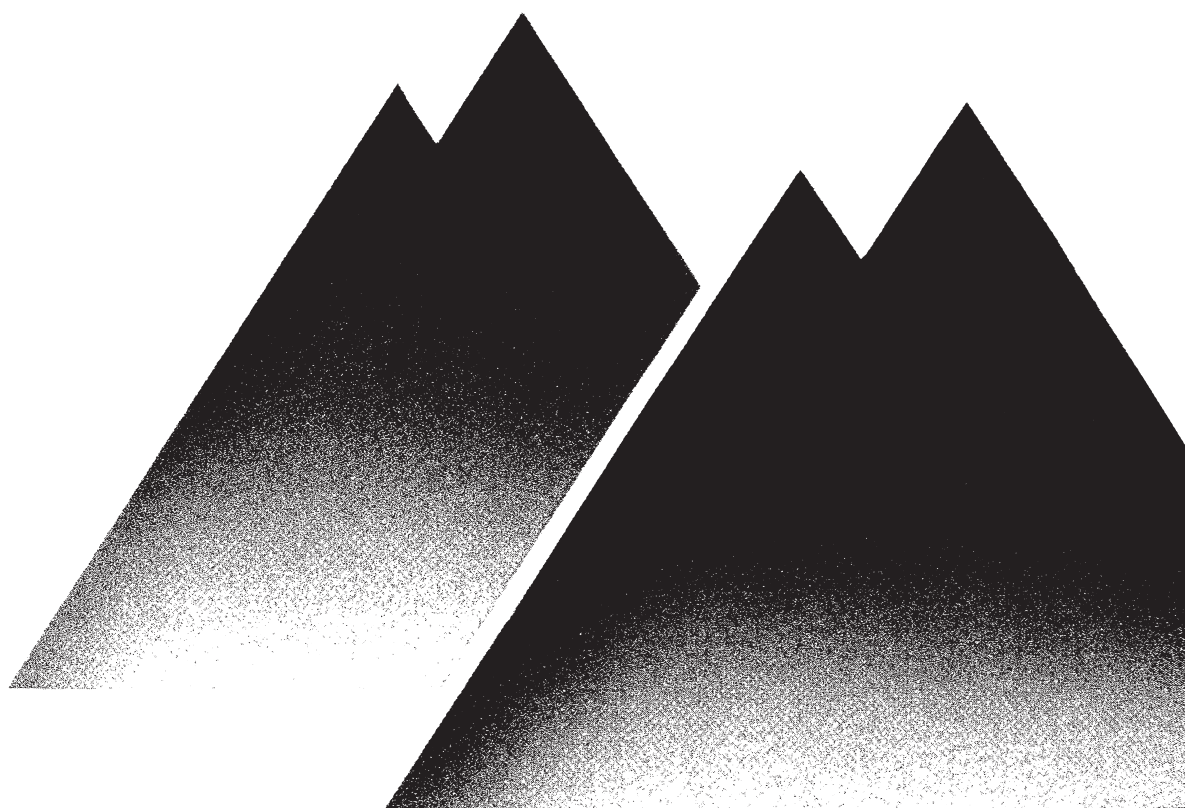


研究紀要

2025 Vol.32 Bulletin



富山県[立山博物館]

Tateyama Museum of Toyama

富山県[立山博物館]

研究紀要

第32号

2025年

目次

立山黒部の開発と観光の諸相 —大正期から立山黒部アルペンルート全線開通において—	森山義和	3
近世の紀行文・道中記に書かれた立山禅定登山の実情についての一考察 —三河の国学者 渡辺政香の紀行文『北游藁』の記述を中心に—	吉野俊哉	23
〈研究余録〉 『日本旅行案内』2版から4版における“TATEYAMA”の変化について	河野史明	53
[資料紹介] 芦峯寺一相坊の『印鑑帳』について —芦峯寺宝泉坊旧蔵の資料群から—	細木ひとみ	67

立山黒部の開発と観光の諸相 一大正期から立山黒部アルペンルート全線開通において一

森山 義和

はじめに

立山黒部アルペンルートは今日、富山県を代表する観光地として国内外の旅行者を引きつけている。しかし、そのイメージは、雄大な自然や爽快な乗り物体験といった現代の印象が中心であり、そこに至る歴史的経緯に注意を払う人はどのくらいいるだろうか。多くは、立山黒部に特別な関心を持たず、「山とダムがある場所」という程度の認識にとどまっているのではないだろうか。しかし、史料を読み解くと、立山黒部の観光地としての成立には、大正期から昭和期にかけての政治・経済・自然保護・観光理念が複雑に絡み合い、そこに人々の夢や葛藤が折り重なった「物語」が存在していることが見えてくる。

本稿では、「立山」と「黒部」という別個の地域がいかにして「立山黒部」という一体的観光地として認識されるに至ったのか、その歴史的過程を多角的な視点で再構成したい。地域開発、行政判断、土木建築などのダイナミクスが、どのように一つの観光地像を作り上げていったのかを探りたい。

1. 立山黒部という風景の誕生

大正15年（1926）5月5日、富山県庁において「立山保勝会」の発起人会が開かれ、正式に組織が発足した。この保勝会は立山連峰と黒部峡谷の景観を保護し、観光の利便性を高めることを目的とする組織であった。発起人には県内各郡の代表者24名が名を連ね⁽¹⁾、県主導のもとで立山と黒部をまとめて観光開発の対象とする新たな構想が動き出したのである。ただし、この時点では人々の間に「立山黒部」という一体的な認識はなかった。立山はあくまで宗教的登拝の山として、黒部峡谷は水力発電開発や秘境探勝の場として、それぞれ別個のイメージを持っていた。しかし保勝会は、これらを結びつける枠組みを初めて行政的に提示した点で、のちの「立山黒部」を考えるうえで極めて重要な役割を果たした。

立山保勝会の事業計画は、発足当初から壮大であった。前年の大正14年（1925）に発表された雑誌『庭園』⁽²⁾の記事には、弥陀ヶ原を中心とする一大観光地化構想が掲載されていた。例えば、別館を持つホテルの建設、地獄谷からの引湯による温泉経営、称名峡から弥陀ヶ原への索道鉄道（ケーブルカー）の建設、藤橋から称名瀑間の自動車道路新設、さらには千垣－藤橋間の鉄道延伸までが含まれていた。現代の観光開発と比較しても大掛かりであり、当時の富山県がどれほど観光開発に熱意を抱いていたかがうかがえる。

しかし、この野心的な計画は、実現可能性の面で課題が多かった。索道鉄道や鉄道延伸といった大規模インフラの整備には莫大な時間と費用を要し、自然景観を損なう恐れも大きい。そこで最終的な事業案では、宿舎の建設、登山道の改修、危険箇所への対策といった基礎的整備が優先されることとなった。

この現実的な方向転換の裏には、吉澤庄作の存在があった。魚津中学校の博物教師であり、黒部峡谷の調査・紹介に尽力してきた吉澤は、保勝会の計画に意見を求められ、黒部方面も含む実務的な整備案の作成に協力したとされる。吉澤はすでに大正11年（1922）に「黒部保勝会」を設立しており、黒部峡谷の登山案内や地図作成に取り組んでいた。この活動経験が立山保勝会の計画にも反映され、立山と黒部を結ぶ観光理念は徐々に形を整えていった。⁽³⁾

立山保勝会の総則第一条には、「立山連峰及黒部峡谷ノ勝景ヲ保存シ」と明記されている。これは、行政文書において両者が一体として扱われた最初期の例である。岡正雄知事の挨拶文でも、立山と黒部が「霊峰

と秘峡」という対のイメージで語られており、両者を結び付ける意識が強調されていた。⁽⁴⁾

それまで、立山と黒部は地理的にも観光的にも別個に扱われていた。黒部保勝会も黒部峡谷だけを対象としていた。しかし、立山保勝会の登場によって、両者を総合的に扱う枠組みが初めて明確化される。かつて吉澤庄作が「立山及び黒部峡谷」という表現を用いたことはあったものの、それが一般的に広まっていたわけではない。大正15年の保勝会設立は、「立山黒部」という語が県内外に浸透していく契機となった可能性が高い。事業内容には、名勝記念物の保護、道路整備、宿舎建設、調査研究、広報などが掲げられ、現代の観光行政にも通じる理念が確認できる。特に、名勝記念物の保護を第一に挙げている点は、後の国立公園化を強く意識したものであった。⁽⁵⁾

立山保勝会の設立は、大正時代に高まった国立公園制定の動きと密接に関連している。大正5年(1916)以降、内務省衛生局と史蹟名勝天然記念物保存協会の2つの流派が、自然保護と観光開発の在り方をめぐって競い合いながら、国立公園候補地の調査を進めていた。しかし大正10年(1921)、造園学者・田村剛が個人的見解として国立公園候補地を発表した際、上高地や白馬は挙げられたものの、立山と黒部は含まれていなかった。これが新聞で大きく報じられたことで、富山県内には危機感が広がった。さらに同年夏、衛生局による日本アルプス調査でも立山と黒部は対象外とされ、県の焦りは増していった。⁽⁶⁾

状況を変えたのは、朝香宮鳩彦王が剣岳・立山登山後に、五色ヶ原や黒部の猿飛付近を「国立公園に値する」と賞賛したことである。⁽⁷⁾この発言は富山県にとって追い風となり、県議会は立山連峰の国立公園化を求める建議を提出した。

一方黒部峡谷では、民間企業による水力発電開発が急速に進められ、土砂投棄や景観破壊が社会問題となっていた。これを受けて岡知事は大正13年(1924)に黒部峡谷を国立公園として指定するよう国に申請し、翌年には県議会も同趣旨の建議を提出した。こうした経緯は、黒部峡谷の国立公園化が観光促進とともに、自然保護の観点からも緊急性が高い問題と認識されていたことを示している。

大正14年、国立公園に関する国の議論は一時停滞したが、その中で立山保勝会は独自に活動を進めた。それは、単なる観光整備にとどまらず、富山県全体が官民連携で立山黒部の価値を全国レベルへ訴えるための政治的基盤を作る役割を担った。

保勝会の事業計画には、11カ所の宿舎建設、山岳道路の改修、危険箇所改善などが含まれており、今日の観光ルートの前身ともいえるインフラ整備が構想されていた。また「山岳館」と呼ばれる博物館の建設計画も盛り込まれており、自然標本や文集・絵画の展示など、立山黒部の文化的価値を伝える場が計画されていた。⁽⁸⁾

昭和2年(1927)の国立公園協会設立により、国立公園制定運動はさらに活発化した。富山県では、称名川第二発電所の建設、自動車道路の改修、八郎坂の整備、休憩所の設置など、立山黒部全域を見渡した整備が進められた。昭和6年(1931)には日本アルプス国立公園富山県期成同盟会が設立され、弥陀ヶ原中央ホテルの建設やインクライン敷設など、より具体的な開発計画が立案された。これらは立山保勝会の事業計画を引き継ぐ形で構築されたものであり、保勝会が昭和初期の観光開発の基盤となったことが理解できる。

昭和9年(1934)12月4日、ついに立山と黒部峡谷は上高地・白馬とともに「中部山岳国立公園」として指定される。長年の行政努力と地域の働きかけが結実した瞬間であった。

戦後、昭和25年(1950)、毎日新聞社が「日本観光地百選」を実施した際、富山県は立山と黒部峡谷を一体として推薦した。この事実は、大正期から続く「立山と黒部を一つの観光地として捉える」という県の方針が、戦後も継承されていたことを示す。

結果として、黒部峡谷が溪谷部門第9位、立山が山岳部門第17位を獲得した。⁽⁹⁾

ここに至って、「立山黒部」という名称は完全に市民権を獲得し、のちに立山黒部アルペンルートという具体的な観光ルートの構想につながっていく。

2. トロッコ列車の始まりと黒部川鉄道軸の形成

北陸線が富山に、信越線が直江津に到達した明治末期、両都市の間に横たわる新川地域は、地図の上でぼっかりと空白を残していた。

明治35年（1902）、政府は関東・関西を結び、日本海沿岸を貫く幹線整備の必要性を認識し、富直線建設に向けた調査を開始した。工事は明治40年（1907）に富山方から、翌41年（1908）には直江津方から着手された。

明治41年11月、富山―魚津間が開通し、続いて明治43年（1910）、魚津―泊間が結ばれた。三日市駅（現JR黒部駅）と生地駅の開業は、新川地域にとって長年の夢の成就であった。

大正2年（1913）4月、富直線は全線開通し、名称も北陸本線と改められた。信越線経由で東京まで約16時間であった。⁽¹⁰⁾

黒部鉄道とは、現在の富山地方鉄道本線の宇奈月温泉―電鉄黒部間と、昭和44年（1969）まで営業されていた富山地方鉄道黒部支線（電鉄黒部・JR黒部間）を合わせた全長17.1kmの鉄道であった。

黒部鉄道は、大正時代末期、高岡市出身の高峰讓吉を代表とする東洋アルミニウム(株)がアルミニウム精錬のために黒部川の電源開発を目的とし、発電所建設資材の運搬路線として計画されたのが始まりである。その後、沿線住民の強い要望や宇奈月温泉や黒部峡谷など観光開発をするために旅客・貨物兼用鉄道として敷設された。その起点は黒部川左岸に位置する省線三日市駅とされた。⁽¹¹⁾（この当時は、鉄道省が鉄道事業を直接実施していたため、省線と呼称していた。）

大正10年（1921）12月、東洋アルミニウムの子会社として黒部鉄道株式会社が設立後、大正11年（1922）8月、三日市と下立の間10.1kmの鉄道建設工事が開始され、約3ヶ月という短期間で竣工し、同年11月1日に開通した。軌間1067mm（狭軌）、直流600Vによる、当時の先端技術を駆使した新川地域初の電気鉄道であった。⁽¹²⁾

また黒部鉄道は、この頃三日市―石田港間、泊―愛本間、泊―小川温泉間などの路線について、鉄道建設計画を立案するようになった。これは、温泉や海水浴場を中心とした鉄道沿線の観光開発をすることで乗客を増やそうと考えていたためで、この時期に宇奈月の温泉リゾート開発が本格的に開始された。

大正12年（1923）1月、黒部鉄道は、大阪にあった日本電力株式会社の子会社となったが、その後も工事が進められ、同年11月21日、下立―桃原間の第2期工事が完成し、三日市駅から桃原駅に至る全長17.1kmの黒部鉄道全線が開通した。

大正13年（1924）3月、桃原を宇奈月に改称後、黒部鉄道は、黒雉などの温泉開発、宇奈月台地における旅館・別荘地の分譲、テニスコート・プール・スキー場などの宇奈月のリゾート開発、更には石田港線の敷設による石田浜海水浴場の整備を進めた。

翌年、路線は宇奈月（旧桃原）まで延伸され、黒部峡谷の入口と平野部が結ばれた。軍隊による橋梁・軌道敷設、弥太蔵発電所の完成など、鉄道・電力・観光が一体となった開発が進む。旅館や別荘、テニスコートやスキー場と、宇奈月は近代的リゾートとして姿を整えた。⁽¹³⁾

富直線と黒部鉄道は、単なる交通施設ではなかった。それは、人びとの移動を変え、産業を興し、風景と時間を塗り替えた存在であった。

黒部峡谷鉄道の起源は、観光ではなく、電力であった。その前身である黒部専用鉄道は、黒部川の水力を電力へと変えるため、日本電力株式会社によって建設された工事用鉄道である。人を運ぶためではなく、資材を、そして労働を、峡谷の奥深くへ送り届けるための鉄路であった。

大正12年、柳河原発電所建設のため、宇奈月―猫又間で黒部専用鉄道の敷設が始まった。黒部峡谷は、急峻な地形と激しい自然に支配された土地である。線路は谷に寄り添うように敷かれ、通常の狭軌（1067mm）よりさらに狭い762mmのナローゲージが採用された。小さな車両は、まるで峡谷に身を低く

して進むかのようにであった。資材は省線三日市駅に集められ、黒部鉄道で宇奈月へ、さらに専用鉄道に積み替えられて現場へ送られた。洪水や雪崩に阻まれながらも工事は進み、大正14年（1925）6月、宇奈月―佛石間で列車の運転が始まった。昭和2年、柳河原発電所は発電を開始し、黒部の水は電気となって都市へ流れ始めた。

電源開発はさらに上流へと及び、猫又、樺平へと発電所建設が進められた。それに伴い、鉄道もまた一歩ずつ峡谷を遡る。昭和5年（1930）に小屋平、昭和12年（1937）には樺平まで延伸され、宇奈月―樺平間20.1kmが完成した。この時点で、黒部専用鉄道と黒部鉄道を合わせた約37kmの「黒部川鉄道軸」が形成される。石田港の浜辺から三日市、宇奈月温泉街を経て、峡谷最奥の樺平へ、省線三日市駅を結節点とする一貫した輸送体系が、ここに完成したのである。⁽¹⁴⁾

昭和初期、恐慌の影響で鉄道経営は厳しさを増した。こうした中、佐伯宗義は「一県一市街化」という理念のもと、富山電気鉄道を設立し、県内私鉄の系統化を構想した。北陸本線と並行する路線であったが、「競争ではなく循環交通である」と説き、滑川―西三日市間の免許を得る。昭和11年（1936）、西三日市（現・電鉄黒部）への乗り入れが実現した。しかし、富山電気鉄道と黒部鉄道の接続は円滑とは言えず、宇奈月への旅客増加は限定的であった。⁽¹⁵⁾

日中戦争、そして太平洋戦争へと向かう時代の中、昭和18年（1943）、県内鉄道は統合され、富山地方鉄道が誕生する。電圧やホーム高の違いという技術的障壁を越え、同年11月、ついに電鉄富山―宇奈月間の直通運転が実現した。富山、立山、宇奈月が一本の線で結ばれた瞬間であった。

第二次世界大戦後、アメリカの日本占領政策のもと、戦時統合により設立された日本発送電株式会社が分割され、黒部川上流域にあった発電所や黒部専用鉄道は関西電力株式会社が管理することになった。

この鉄道は、電力会社の工事用鉄道として敷設され、発電所建設用の資材や作業員輸送に重点がおかれていたので、昭和20年代後半は、黒部峡谷の探勝を希望する一般の観光客には便乗者證を交付して乗車を許可されていた。また、工事用鉄道という性格上、観光客が手にする便乗者證の裏には「安全については一切保証しません」などと印刷してあった。

こうした中、その景観を一目見たいという人々の思いは年々強まり、工事用鉄道に乗車を希望する観光客が増加したこと、そして地元の人々からの強い要望もあり、昭和28年（1953）11月、観光客に安全で快適な輸送サービスを提供するために、国の地方鉄道としての認可を受け関西電力黒部鉄道が発足した。そして観光客のためのトロッコ電車の運行が始まり、現在に至っている。昭和46年（1971）には、黒部峡谷鉄道株式会社として独立し、令和8年（2026）に55周年を迎える。

黒部峡谷鉄道の歴史は、鉄道が何のために敷かれ、いかに意味を変えていくかを示す典型例である。資材輸送の道は、やがて人の憧れを運び、工事用トロッコは、峡谷の時間をゆっくりと語る存在となった。

黒部の鉄路は、単に峡谷を貫いたのではない。それは、人と自然、産業と観光を、一本の線で結び続けてきたのである。こうして、電源開発のために敷かれた鉄路は、自然と人とを結ぶ鉄道へと生まれ変わったのである。

3. 黒部川の電源開発

北アルプス鷲羽岳に源を発する黒部川は、全長約85kmという短い流路の中で、一気に日本海へと流れ下る日本有数の急流河川である。この川の真の姿は上流にあった。切り立った断崖と深い谷が連なる黒部峡谷は、まさに秘境であった。

大正時代に入り、冠松次郎らによる探検と記録によって、黒部峡谷は初めて科学的・地理的な調査の対象となる。踏み跡すらない原始の谷を進んだ探検記は、この地に眠る膨大な水力エネルギーの存在を世に伝えた。近代日本が産業化を進める中で、急峻な地形と豊富な水量をもつ黒部川は、次第に「未踏の秘境」から

「活用すべき自然資源」へと認識を変えていく。

黒部川の電源開発を最初に構想したのは、東洋アルミニウム株式会社で、その代表取締役は、消化薬「タカジアスターゼ」の発明や止血剤「アドレナリン」の発見により、科学者として世界的に著名な高峰讓吉博士であった。大正8年（1919）、東京の日本橋に設立された同社は、アルミニウム精錬に不可欠な大電力を、水力発電によって賄おうとし、水力部長の山田絆によって黒部川の電源開発調査が進められた。当時、日本の産業界は、第一次世界大戦の影響を受けて好景気であったが、アルミニウムについては需要が大きいにもかかわらず全て輸入に頼る戦略物資であり、その国産化は国家的課題でもあった。博士は、米国アルコア社の技術と、日本の安価な水力電気を組み合わせるという日米共同の企業を運営しようと計画したのである。⁽¹⁶⁾しかし、戦後不況と博士の死により、この事業は実現を見ないまま終わった。それでも、黒部川の実地調査、鉄道計画、宇奈月温泉の開発といった準備は、その後の本格的電源開発への重要な布石となった。

黒部川の電源開発を引き継いだのが、日本電力株式会社である。同社は「電源ありてこそ産業あり」という理念のもと、黒部川の発電所建設を進めた。

昭和2年には柳河原発電所が完成、実質的な黒部川第一発電所である。昭和11年、黒部川第二発電所と小屋平ダムが建設された。直線で構成された端正な姿の発電所は建築家山口文象のデザインであった。黒部峡谷鉄道の猫又駅の近くから対岸に白い黒部川第二発電所と赤い目黒橋が見える。

しかし、黒部川の発電所建設は、単なる土木工事ではなかった。最大の課題は、発電所そのものより、そこへ至る道をどうつくるかであった。

建設にあたって直面した最大の問題は、建設用ルートの開削とそのための資材の運搬方法であった。樺平から上流は峻険さが一層厳しく絶壁が立ちはだかり、調査測量のために開いたわずかな歩道（現水平歩道）が断崖に取り付けてある程度で、河川もさらに急勾配となり、流れも急になっていた。つまり樺平から上流は、断崖が連続し、軌道を延ばすことすら不可能な地形であった。そこで技術者たちは、当時日本最大級となる高さ約200mの豎坑エレベーターと、山腹を貫く仙人谷までの軌道隧道を組み合わせた立体輸送システムを考案する。これは、「黒部ルート」（樺平～仙人谷～黒部ダム）と呼ばれるものであった。

「黒部ルート」は、日本電力（株）が黒部川第三発電所の取水予定地（仙人谷ダム）へ資材輸送を行うために建設した樺平から仙人谷までの軌道隧道（上部専用軌道）と、後に関西電力が黒部川第四発電所、黒部ダムの資材輸送用として建設した黒部ダムから仙人谷までのルートを総称したものである。

「黒部ルート」建設はいずれも社運を賭けた難工事であったことから、人員と資機材運搬に必要な最小限の設備（例えば上部専用軌道の列車幅は乗用車並みの約1.6m）として設計され、現在もお発電所やダムなどの電力供給関連設備を支える不可欠な工事用輸送ルートとして機能している。

黒部川第三発電所（仙人谷ダム）建設にあたり、まず樺平に当時日本一の高さを誇る200mの豎坑エレベーターと仙人谷までの軌道隧道を設けることになった。建設工事は、昭和11年9月から3つの工区（豎坑部分、豎坑－阿曾原、阿曾原－仙人谷）で一斉に開始された。この建設工事では、技術者と作業員は想像を超える自然条件に直面した。

翌12年の「阿曾原－仙人谷」工区では、隧道掘削が進むにつれ岩盤温度が小刻みに上昇を続け、発破が終わって岩盤の温度を測ると、阿曾原横坑の岩盤温度は約65℃にも達していた。予想以上の高熱で、ついには100℃以上に達する高熱地帯に遭遇した。

しかし、時代は昭和13年（1938）4月に国家総動員法が公布され、日本全体が戦争遂行に突き進むことになった激動期であり、軍需資材生産の原動力として電力資源の開発は至上命令であった。黒部川第三発電所建設に従事する作業員にもその影は落ちており、人海戦術で突破するより手がなかった。

阿曾原横坑口を広げ、黒部川の冷えた風を隧道内に入れ、幾分熱気をやわらげて工事を開始したが、横坑の掘削が進むにつれ岩盤温度のあまりの高熱のため人夫にホースで冷水をかけ、また岩盤にも水をかけて掘り進んだ。その熱気は作業員にとって耐え難いほどで、体力の消耗も著しく、また、岩盤からの熱湯噴出で

火傷を負う者も続出した。このトンネルを掘り進めていた労働者の多くが、当時日本に働きに来ていた朝鮮の人々であった。高熱隧道では2時間で5円、1日に10円は稼いでいた。⁽¹⁷⁾(昭和10年、東京における土木労働者および人夫一世帯あたり月平均収入は20円78銭であった。)

7月に入ると温度計は100℃を越すようになり、ついに8月28日、ダイナマイトの装填作業中、突然ダイナマイトが爆発し6人の作業員が死亡、6人が重傷を負う悲惨な事故が発生した。⁽¹⁸⁾

この事故により工事の中止命令が出されたが、日本電力株式会社では、いま工事を中止することは、会社の存亡にかかわるとして、対策と検討を重ねた。ダイナマイトと岩盤の間にエボナイト管や割竹などの断熱材をはさんで自然爆発を防ぐ対策など、当時最先端の技術と工法が用いられ、工事は再開された。

隧道工事は、困難を極めたものの「隧道の貫通なくして工事の完成はありえない」と、昼夜兼行で進められた。しかし、さらに追い打ちをかけたのが、爆風を伴う「泡雪崩」である。宿舍を吹き飛ばし、多数の命を奪った雪崩災害は、自然の脅威を改めて突きつけた。

昭和13年(1938)12月中旬、隧道工事関係者は二度目の越冬作業に入った。12月27日午前3時半、志合谷に泡雪崩が襲来、4階建ての宿舍が1階部分を残して吹き飛ばされ、死者84名を出す大惨事が発生した。

昭和15年(1940)1月にも発生し、周辺に100年を超えるブナの大木が林立した土地に設営した阿曾原宿舍に直撃、阿曾原宿舍は倒壊し、死者28名を出した。⁽¹⁹⁾

戦時色が濃くなってきた折、自然の猛威による大惨事を被りながらも、軍部からの強い要請も受け、工事は「苦しみを乗り越えて前進するのみ」と続行された。

幾多の困難と犠牲を乗り越え、昭和14年(1939)8月、軌道隧道の高熱地帯を貫通した。導水路の最終難関であった阿曾原～仙人谷間も翌15年6月に貫通に至った。多数の犠牲者を出しながらも軌道トンネルを貫通させ、まれにみる難工事は完成した。

それは、自然を完全に克服した勝利ではない。自然の力を畏れ、制御し、共存しようとした技術と人間の努力の結晶であった。

昭和15年11月、黒部川第三発電所は発電を開始した。最大出力8万kWは当時日本最大であった。

黒部川の水力発電史は、日本の近代技術史そのものである。同時に、それは自然の厳しさと向き合いながら、エネルギーを社会へとつなごうとした無数の無名の人々の記録でもある。

最後に、山田胖(1886～1964)の残した業績について触れたい。黒部鉄道の敷設とその運営に尽力し、地域の振興発展に大きく貢献したことである。黒部開発の拠点として宇奈月の開発の重要性に着目し、近い将来黒部峡谷観光の基地になることを想定し、黒部川での電源開発に不可欠な輸送路として鉄道敷設を主導した。工事専用線ではなく、将来の地域発展を見据えた「貨客両用の地方鉄道」とする判断は、彼の先見性を象徴しており、その献身的な努力とともに高く評価されている。⁽²⁰⁾

4. 「くろよん」の建設

北アルプスの深奥を刻みながら流れる黒部川は、古くから人の立ち入りを拒む厳しい自然として知られてきた。しかし同時に、その急峻な地形と豊富な水量は、水力発電という近代技術にとって比類なき可能性を秘めていた。大正期以降、黒部川水系では日本電力を中心に水力発電事業が進められ、戦前には樺平から御前沢に至る調査・測量用の歩道も開削された。この「旧日電歩道」は、現在も関西電力の管理のもと、下ノ廊下へ至る唯一の登山道として静かに往時を伝えている。

しかし、戦中から戦後直後にかけて、日本の電源開発は長く停滞を余儀なくされた。戦後の急速な経済復興は、皮肉にも深刻な電力不足を生み、昭和20年代後半には関西地方で長期にわたる電力使用制限が実施されるという社会問題に発展した。

昭和26年(1951)、電力事業再編によって発足した関西電力にとって、この電力不足の克服は最重要課

題であった。火力発電の大型化が進む一方で、当時の火力発電所は需要変動への即応性に乏しく、調整力に優れた大規模水力発電が強く求められていた。

こうした社会的要請のもと、関西電力は黒部ダムと黒部川第四発電所、いわゆる「くろよん」建設という未曾有の巨大プロジェクトを決断する。この計画自体は、大正期から構想されていたものであり、黒部川最奥部に巨大ダムを築くという発想は決して突発的なものではなかった。しかし、それを戦後日本の技術力と組織力で実現することは、文字どおり社運を賭した挑戦であった。

昭和31年（1956）7月、長野県大町市に建設事務所が設置され、黒四建設は本格的に動き出す。

黒部峡谷の奥地に短期間で大量の資材を運び込むには、従来の富山県側の黒部ルートだけでは不十分であった。そこで新たに計画されたのが、立山を越えず、長野県側から直接ダム地点へ至る「大町ルート」である。その核心をなすのが、赤沢岳・鳴沢岳間の北アルプス山腹に扇沢からダム地点へと掘り進められる5.4kmの、資材輸送の新たなバイパスを設けた大町トンネル（現・関電トンネル）であった。もちろん、立山の室堂を経由する立山ルートによる人力輸送とヘリコプター空輸で徐々に建築資材を運んで、ダム本体の基礎工事と大町トンネルの迎え掘りを進めることも同時に行われた。

同年10月に始まったトンネル掘削は、厳冬期にも休むことなく続けられ、当初は順調に進行していた。だが、昭和32年（1957）5月1日、大町坑口から1,691m地点で事態は一変する。⁽²¹⁾

地盤が盛り上がり鉄製の支保工が支保工は押し曲げられ、トンネルは崩壊寸前の危険な状態に陥った。同時に切羽が崩れ落ち、100m³の岩片と土砂を押し出し、上部からは毎秒660リットルもの地下水が噴出した。これが破碎帯と呼ばれる、岩盤の中で岩が細かく割れて地下水を溜め込んだ軟弱な地層であった。猛烈な勢いで噴き出す水と土砂、もろく壊れて崩れ続ける壁面によって、工事は困難を極め、7月16日には大量の湧水と土砂崩壊が起こり、これ以上掘削作業を進めることが不可能になってしまった。⁽²²⁾山が、人の侵入を拒むかのような瞬間であった。

工事は一時中断を余儀なくされるが、ここで日本の地質学・土木工学の知見が総動員される。学会や技術者、現場作業員が一体となり、注入工法や排水対策など、あらゆる可能性が検討された。「黒四に手を貸そう」という合言葉は、社内外に支援の輪を広げていった。⁽²³⁾

こうした支援と国内の地質学や土木工学の知識と経験を結集して対策を講じた結果、掘削は再開された。そして同年12月、7ヵ月に及ぶ格闘の末、ついに約80mの破碎帯を突破した。昭和33年（1958）2月、大町トンネルは貫通を果たす。この難工事は後に『黒部の太陽』として記録文学・映画に描かれ、日本社会に強い印象を残すこととなった。

トンネル開通後、資材輸送は飛躍的に効率化され、工事は驚異的な速度で進展する。破碎帯による遅れを取り戻すかのように、黒部峡谷では昼夜を分かたぬ作業が続いた。

昭和38年（1963）8月、高さ186m、堤頂長492mの黒部ダムが完成。総工事費513億円、延べ約1,000万人の労働力、殉職者171名という、数字の背後に多くの犠牲と努力を刻みながら、くろよん建設は結実した。黒部川第四発電所は最大出力25万18,000kW（1969年時点）を誇り、関西地方の電力不足解消に大きく貢献するとともに、日本の高度経済成長を支える基盤となった。

昭和46年、立山黒部アルペンルートが全線開通し、かつては技術者と労働者しか足を踏み入れなかったこの地は、多くの人々が訪れる「見せる土木遺産」となった。つまり、黒部ダムは、単なる発電施設ではない。そこには、戦後日本が自然と向き合い、技術を信じ、人の力を結集して未来を切り拓こうとした物語が刻まれており、展示された1枚の写真、1つの工具、一断面の岩石が、その壮大な歴史の語り部となっている。

5. 戦後の立山開発の進展

昭和27年（1952）3月30日、富山県総合開発計画が県知事に答申された。ここから立山の本格的な開発

は始まる。これは、戦後日本が国土の再建と産業復興を国家的課題として掲げた時代の産物であり、昭和25年施行の国土総合開発法に基づく制度的枠組みの中で策定されたものであった。

『富山県史』には「昭和二十六年（一九五一）、富山県総合開発計画の一端を担うものとして、立山山岳地帯総合開発計画の構想とその実施計画案が策定された。」⁽²⁴⁾とある。具体的に示すと、昭和26年11月に「立山山岳地帯総合開発第一期目論見調書」が作成された。12月1日、立山開発懇談会が富山県庁にて高辻知事以下25人の出席で開催され、立山開発会社設立委員会が設置された。同月13日に、同設立委員会が県庁にて高辻知事以下13人の出席で開催され、発起人選定の小委員会が設置された。18日、同小委員会が富山県庁で開催され発起人15人を選定。24日に、発起人会が開催され、社名（立山開発鉄道株式会社）、設立時の発行株式数、発起人総代（佐伯宗義）、定款が決定された。

立山開発鉄道株式会社は、昭和27年4月1日に設立されるが、その準備は総合計画の審議と並行して進められたのである。「立山登山道路計画圖」を見ると、室堂から一ノ越を越えて御山谷を黒部川河畔まで下り、計画段階の黒部ダムの上堤とトンネルを通るルートが書かれている。このように、計画当初は富山県と長野県とを道路で結ぶ構想であった。

立山一帯は、この計画において、山岳観光地としてのみならず、水力発電、治山治水、林産・鉱産資源の供給地として重視され、とりわけ黒部川水系は、将来の大規模電源開発の中核に位置づけられていた。黒部川第四発電所、いわゆる黒四の建設構想は、こうした総合開発思想の中で具体性を帯びていく。巨大ダム建設は、単独の発電事業ではなく、地域構造そのものを組み替える事業であった。

黒四ダム建設において最大の課題は、険しい黒部峡谷の奥地へ、いかにして人と資材を送り込むかという問題であった。既存の黒部川筋の輸送路だけでは工事は成り立たず、新たなルートの確保が不可欠であった。しかし富山県側では、信州側からの新交通路整備によって、黒部川の水資源が県外へ流出する可能性が強く警戒されていた。このため、黒部川の開発は、立山側からの輸送路整備と不可分のものとして構想される。ここに、ダム建設と山岳交通整備が一体となった立山総合開発という思想が形成される。黒四ダムは、立山を越える「道」を必要とし、その道はまた、ダム建設を現実のものとする条件でもあった。

この構想を具体化した中心人物の一人が、立山開発鉄道株式会社初代社長・佐伯宗義である。佐伯は『自叙伝』で、「昭和四十六年、四十年來の念願であった立山連峰貫（貫）通は、紆余曲折を経てついに成就し、長野県大町と富山市は直結するに至ったのである。」と記し、富山と信州を山越えて結ぶ立山連峰貫通が四十年來の念願であったと述べている。

佐伯は、観光を単なる景観消費としてではなく、「文化の生命力を心で見る行為」と捉え、交通整備こそが文化と産業の基盤であると考えた。この思想は、後に立山黒部貫光株式会社へと受け継がれ、黒四ダム完成後の地域像を方向づける理念となった。

昭和26年5月1日、国策会社日本発送電は9電力会社に分割され、富山県内では関西電力・北陸電力の2社が事業を展開する事となった。

関西電力は、日本発送電から引き継いだ電源開発計画の内、黒四（富山）、万波、下小鳥、御母衣（以上岐阜）の水力発電計画を「大規模四大火力代用開発計画地点」と位置づけ、具体的な建設計画を検討していた。

一方、旧県営鉄道を引き継いだ富山地方鉄道は、立山観光開発の検討に入っており、また富山県も山岳観光だけでなく、治山治水、電力、林産、地下資源などの開発を目的とした「立山山岳総合開発」計画を検討していた。

そして、電力資源開発、治山治水、林産資源開発、山岳観光資源紹介等立山一帯の総合開発を図るため、同年12月より県や各自治体、経済界、富山地方鉄道及び電力会社を交えて立山開発事業の促進方法についての協議が行われた。その結果、まず交通輸送施設の整備を図るため、昭和27年4月、富山地方鉄道、関西電力、北陸電力などの出資により立山開発鉄道株式会社が設立された。同社の目的は、（1）地方鉄道（鋼索鉄道）及自動車に依る一般運輸事業、（2）観光ホテル事業・温泉の経営・土地建物の経営・スキー場・

遊園地・其他観光施設の経営鉱業及林業の経営、(3) 特殊需要者に対する電力の供給事業、(4) 其他目的事業達成上必要なる事業の経営又は投資、であった。⁽²⁵⁾

立山開発鉄道は、昭和27年8月に千丈ヶ原(→千寿ヶ原)ー美女平間の鋼索鉄道敷設免許を取得して12月に工事に着手し、交通整備が進められた。翌28年には美女平ー弘法間の自動車道路が着工され、同30年(1955)にこの区間でのバス営業が開始された。昭和29年(1954)4月1日には富山地方鉄道より小見ー粟巣野間の鉄道及び粟巣野ー千丈ヶ原間の鉄道敷設免許を譲受け、同年8月には粟巣野ー立山仮駅間の鉄道と美女平までの鋼索鉄道が営業を開始した。この鋼索鉄道には、貨物輸送の要請に応えられるよう、連結・解放可能な附随貨車を設けられ、今も使用されている。⁽²⁶⁾

昭和30年7月には立山仮駅ー立山間及び美女平ー弘法間のバス営業が開始された。立山駅から美女平駅まで自動車道路は整備されていなかったため、バスは鋼索鉄道の客車に連結された貨車に積載して美女平へ運ばれた。なお、立山駅の駅名は立山→千寿ヶ原(31年)→立山(45年)と変更されている。

当初弘法までだったバス路線は自動車道路の延伸に伴い、昭和33年9月には弥陀ヶ原、39年6月には室堂まで開通した。この間31年10月には弥陀ヶ原ホテルも営業を始めており、立山開発鉄道は所期の目的を達成した。

この交通網は観光客のためだけのものではなく、黒部ダム建設を背後で支える実務的インフラでもあった。鋼索鉄道には貨物輸送を想定した附随貨車が設けられ、道路未整備区間では、バスそのものを貨車に載せて輸送するという工夫も行われた。これらの試みは、黒部ダムという巨大土木事業が、立山地域を一種の実験場として発展させていったことを物語っている。

一方、昭和31年に本格化した黒四ダム建設の進展を受け、同35年(1960)には立山黒部有峰開発株式会社(TKA)が設立され、ダム完成後を見据えた広域観光・交通構想が検討された。技術的・管理的制約から成果は限定的であったが、その構想は後に立山黒部貫光株式会社へと引き継がれていった。

黒部ダム完成後も、立山側から黒部湖へ至る交通整備は段階的に進められ、昭和46年(1971)、立山駅から長野県扇沢を結ぶ立山黒部アルペンルートが全線開通した。この山岳ルートは、日本有数の観光地として知られる一方で、黒部ダム建設という国家的事業の記憶を内包する「生きた土木史」でもある。なお、使命を果たした立山黒部有峰開発株式会社は昭和29年10月に、立山開発鉄道株式会社は平成17年(2005)にそれぞれ立山黒部貫光株式会社に合併された。

黒部ダムは、戦後日本の電力不足を克服するために築かれた巨大構造物であると同時に、立山一帯の交通、観光、産業構造を根底から変えた存在であった。立山総合開発と立山黒部アルペンルートの成立は、ダム建設を中心に、人・技術・構想が幾層にも積み重なって形成された歴史の地層ともいえる。

6. 立山開発から立山黒部アルペンルートへ

黒部ダムは、戦後日本の電源開発と土木技術の到達点として知られる。しかし、その完成は終点ではなかった。巨大ダムを築いたものの、そこへ至る道は依然として険しく、限られた関係者しか近づけない存在であり続けていた。立山黒部運輸事業とは、黒部ダム建設によって切り拓かれた山岳開発の成果を、社会に開かれたものとするための「次の一手」であり、いわばダム建設史の後編に位置づけられる事業であった。

昭和40年(1965)1月中旬、佐伯宗義社長は立山黒部貫光株式会社設立の挨拶に各方面を回る一方、会社機構の整備と主要人事の決定を急いだ。並行して進められたのが、官庁許認可の取得である。運輸事業の認可、国立公園事業の執行認可、国有林野の貸付申請、これらは地表に現れない作業であったが、黒部ダム建設においても同様に、長期にわたる行政折衝が工事の前提条件であったことを想起させる。

同時に、立山黒部有峰開発から人員を引き継ぎ、さらに関西電力、北陸電力、立山開発鉄道から出向社員を受け入れることで、黒部ダム工事を経験した技術者たちが再び集結した。ここに、ダム建設で培われた知

識と現場感覚が、運輸施設建設へと引き継がれる体制が整えられたのである。

3月以降、関係省庁や自然公園審議会への計画説明が重ねられるとともに、黒部川流域で電源開発を進めてきた関西電力との協議が本格化した。とりわけ、黒部第四発電所建設を熟知する野瀬取締役（技術顧問）との技術的会談は、ダム工事で得られた経験を新事業にどう生かすかという、実践的な議論の場であった。4月には旅客自動車運送事業および索道事業の免許が交付され、立山トンネルの詳細設計を中心とする技術・経済両面の検討が急がれた。トンネル掘削は、黒部ダム建設でも最大の難関であり、その慎重な検討姿勢には、過去の苦闘が色濃く反映されていた。

この時期、事業の行方を左右する最大の課題は、3施設（立山トンネル、ロープウェイ、ケーブルカー）を同時に着工するか否かであった。

関西電力は、ダム建設で得た「確実性重視」の立場から、地下ケーブルカー→ロープウェイ→トンネルという段階的建設を提案した。これは経済的にも安全な方法であった。

佐伯社長率いる事業側は、3施設が一体となって初めて黒部ダムへの通路として機能すると主張する。部分的な完成では利用価値が生まれず、事業全体が成立しないという判断であった。この対立は、黒部ダム建設時にも繰り返された「慎重さと挑戦」の葛藤と重なる。

最終的に、昭和40年8月12日の東京会談において同時着工方針が決定される。⁽²⁷⁾ここに、黒部ダム建設で示された「全体を貫く決断力」が、再び発揮されたのである。

同時着工の合意を受け、準備工事は一気に進展する。黒部ダム右岸から大観峰へと架設される工事用重索道は、かつてダム建設資材を空輸した索道の記憶を呼び起こす存在であった。10月から11月にかけて、安全祈願祭、起工式、披露パーティーが相次ぎ、事業は公式に「始動」したことを社会に示した。

施工業者の選定では、黒部第四発電所工事に携わった間組や前田建設工業が選ばれた。これは、技術力だけでなく、黒部という過酷な現場を知る企業でなければ、この工事を任せられないという判断の表れだろう。最終的には事業費増額という決断を経て、12月18日に契約が成立し、計画は不可逆的な建設段階へと移行した。12月22日、4億円の増資により資本金は8億円となり、会社は創立1年目を終える。

この一年間に完成したのは、トンネルでも索道でもない。しかし、黒部ダム建設史の観点から見れば、この時期こそが、次なる山岳大事業の基盤が固められた決定的な段階であった。

黒部ダムが「電力を生む構造物」であったとすれば、立山黒部運輸事業は、その成果を社会へとつなぐ「動脈」である。この創成期の歩みは、ダム建設の歴史が終わらず、形を変えて続いていくことを静かに物語っているのである。

6-1. 昭和41年（1966）について

昭和41年、立山黒部アルペンルートの建設は、冬季の積雪期を終えた早春から本格的に始動した。1月より関係者は現地に入り、積雪調査、除雪対策、建設事業所の組織体制の検討など、諸般の準備を進めた。特に積雪調査隊の派遣は、アルペンルート建設における除雪計画の精緻化に不可欠であり、雪害による工期遅延を未然に防ぐための科学的基盤となった。

3月に入ると、工事は具体的な形を帯び始めた。25日、住友電工によって黒部側の工事用配電線への通電が開始され、翌26日には間組が黒部ケーブルカー下部駅舎付近よりトンネル導坑の掘削に着手した。一方、室堂側では前田建設工業が立山登山道の除雪を既存組織と協力して実施するとともに、雑穀谷から刈安平（現・桂台道路）間における資材輸送用索道の架設工事を開始した。これにより、資材輸送と現場準備が同時進行的に進められ、立山トンネル室堂側本工事への布石が整えられた。

4月下旬には黒部建設事務所がタンボ平に設置され、成瀬大治所長（関西電力出向）が運営に当たった。これに続き、5月上旬には室堂建設事務所が室堂平に開設され、鴻野稔所長心得（北陸電力出向）が指揮を執った。両拠点間には電話回線も開通し、施工管理体制の遠隔連絡網が確立された。さらに、5月19日に

は黒部ダム右岸から新丸山（黒部平）への工事用貨物軽索道が完成し、室堂側への資材輸送が飛躍的に効率化された。しかし、黒部ダムから二の沢（大観峰）への重索道工事の遅延により、立山トンネル黒部側の本格掘削開始は延期を余儀なくされ、関係者の間には懸念が生じた。

室堂側については、雑穀谷一刈安平間の資材輸送用索道が7月上旬に完成し、室堂への資材輸送に実質的な力を発揮した。これにより、工事は年度初期の準備段階から実施工段階へと移行しつつあった。9月末の時点で、立山トンネル全長3511m中160m、黒部ケーブルカートンネル全長828m中231mの掘進が記録され、年度末までに冬季を迎えるにあたり、進捗状況が把握された。⁽²⁸⁾

10月以降、厳冬期に入る前に、工事の遅延挽回策が協議され、11月15日の第9回取締役会では、日本開発銀行に対する正式融資申し込みが決議された。同会において工事進捗について説明された内容は以下の通りである。

「融雪期は例年より1か月以上遅れたが、室堂側では11月の好天に恵まれ、工程の遅れは概ね回復した。黒部側では地下ケーブルカーのトンネル掘削が順調に進行する一方、二の沢からの立山トンネル工事は輸送索道の架設遅延により着手が遅れた。しかし、11月中の索道架設作業に全力を注ぎ、翌春の早期着手に備えた資材集結体制を整えた。」⁽²⁹⁾

この時期、会社組織も整備され、11月下旬には富山市桜町に新設された富山地鉄ビルに本社を移転した。黒部ケーブルカーのトンネル工事は厳冬の中で12月25日まで継続されたが、立山トンネル黒部方の本格工事は準備段階にとどまった。同時に、建設資金の確保も進められ、株主割当による第2回増資が実施され、12月22日には登記が完了し、払込資本金は12億円に達した。⁽³⁰⁾

このように、昭和41年の工事開始期における立山黒部アルペンルート建設は、現場の物理的準備と事務・資金体制の整備が並行して進められた年度であった。特に、積雪対策、資材輸送索道の整備、事務所設置、融資交渉と増資実施という多面的な作業が同時進行的に行われたことが、後の本格施工の基盤を築いたことが特徴である。

6-2. 昭和42年（1967）について

昭和42年、立山黒部アルペンルート建設は、工事遅延の挽回と本格施工への移行を軸として進められた年度である。黒部側における立山トンネルの掘削は、昭和41年に重索道建設の大幅な遅延により横坑のみの進捗に留まり、本坑の施工には手を付けることができなかった。これに伴い、ヘリコプターや人力による資材輸送、索道工事の応援作業、作業員の手待ちなどが発生し、年度末には工事遅延による損害補償が行われた。

遅延挽回策として、作業員の増員、掘削用ジャンボ機の導入、ズリ出し用ダンプカーの強化が実施され、加えて二の沢（大観峰）および新丸山（黒部平）のロープウェイ駅舎建築工事の基本設計決定による早期施工体制が整えられた。このため、施工主体である間組と当社との間で緊密な協議が繰り返され、工程管理と技術的調整が密接に行われた。

黒部ケーブルカートンネルについては、冬期にも掘削が継続され、3月末時点で全長828m中449mの掘進が達成された。ロープウェイ工事の基本設計は、昭和41年11月の索道規則改正を踏まえ、設計委託先である大岡山設計事務所および安全索道株式会社と当社との間で精緻な協議が重ねられ、運輸省との許認可手続きまで進められた。

当年の工事目標は、立山トンネル室堂側1848m掘削、黒部ケーブルカートンネル9月掘削完了・巻立て継続、ロープウェイの基本設計承認後5月着工、立山トンネル黒部方の遅延挽回策実施による円滑施工であった。5月末には黒部・室堂両側で本坑掘削に着手したが、6月17日には室堂側で破碎帯に遭遇し、掘削は難航した。これに対して、各界の専門家を交えた調査団が派遣され、迂回坑による突破が図られ、8月初めから本格掘削が開始された。⁽³¹⁾

黒部ケーブルカー下部駅舎は、関西電力の既存施設と密接な関係があることから同社による建設となり、当社はこれを借り受ける形で運用することとなった。ロープウェイ駅舎建設は、安全索道による見積もりで進められ、二の沢・新丸山の駅舎建築は間組が担当、予算総額6億5289万円以内で契約が締結された。

資金面では、日本開発銀行の融資決定に向けた現地調査が実施され、6月22日に融資内定が理事会で了承された。続いて、日本興業銀行、日本長期信用銀行、日本不動産銀行、北陸銀行および市中銀行に対し協調融資の折衝が行われ、工事計画の説明と現地視察が尽くされた。11月には融資内定を受け、一部資金が交付され、12月22日には3回目の増資として4億円を払い込み、資本金は16億円となった。

工事進捗の総括として、黒部側立山トンネルは2つの断層破碎帯を突破し、3番目の破碎帯に一部突入、進捗は814m(51.5%)に達した。室堂側は軟弱層を迂回坑で突破し1293m(66.8%)を掘進、両者を合わせ2107m(60.3%)の掘削が完了した。室堂トンネル(室堂～浄土沢間)は10月27日に貫通を果たし、工期延長と工費増加を伴う軟弱層突破に対して、取締役会により迂回路を本ルートに変更する承認が得られた。⁽³²⁾

昭和42年の立山黒部アルペンルート建設は、工事遅延への対応と本格施工の着手が年度を通じて両輪となった時期である。黒部・室堂両側でのトンネル掘削、ロープウェイ・ケーブルカー駅舎建設、資材輸送索道の整備、資金調達と融資交渉が密接に絡み合い、多面的な調整と科学的・技術的工夫によって工程が進められたことが特徴である。特に、破碎帯・軟弱層の克服、冬季施工継続、資材輸送の柔軟な対応は、後の本格施工と工事完成への礎を築いたといえる。

6-3. 昭和43年(1968)について

昭和43年は、立山黒部アルペンルート建設において、立山トンネル本格掘削の進展と破碎帯・軟弱層への対応、ロープウェイ・ケーブルカーの建築・機械工事の整備が年度の中心課題であった。前年から続く地質的困難と厳冬期施工の影響を受けつつも、各工区で計画的な施工管理と専門的技術の導入が行われた。

(1) 立山トンネル工事(室堂～二の沢間：全長3557m)

室堂側では、前年に設けた迂回坑を切り広げる作業を4月中旬から開始し、6月1日より本坑掘削に着手した。全長908mの室堂トンネル本体は10月に掘削とコンクリート巻立てをほぼ完了したが、主トンネル(延長1071m)では、起点から約500m地点で第2破碎帯に遭遇し、517m地点で湧水を伴う軟弱部に直面した。軟弱層は推定幅15mに及び、導坑掘削を進めながらも、12月3日に57m地点で掘削を中止し、ボーリング調査(40.8m)を実施した。調査結果からは、花岡片麻岩が亀裂帯と風化帯を形成しつつ漸次良質化していることが判明した。湧水量は1分間に1500リットル、水圧は6kg/cm²程度で、水温は2.5度であった。⁽³³⁾これにより、残長367mの掘削が残されることとなった。

黒部側では、例年のない積雪と軟地質の影響で作業員宿舍の大半が損壊し、臨時宿舍の建設などが急務となった。6月1日から本坑掘削を開始し、中沢トンネル(延長571m)は同月中に掘削を完了し、巻立て作業に移行した。主トンネル(延長1007m)は第3破碎帯まで無事通過したものの、9月30日に第4破碎帯に突入し、842m地点で湧水を伴う砂質ローム層に遭遇した。残長165mについては、本坑で3本のボーリングを実施するとともに、左側に沿った作業坑で排水ボーリングも兼ねた地質調査を行った。

これらの作業に並行して、地質・水質に関する専門家調査が行われ、「破碎帯突破対策協議会」において慎重な検討が重ねられた。最終的に、半花崗岩層と滞留水を伴う砂質ローム層の存在が確認され、ボーリング調査により湧水量は最大で1分間当たり1600リットル、水圧は最大12kg/cm²から5.1kg/cm²まで低下していた。年末時点での立山トンネル全体の掘削進捗は3027m、残長530m、掘進率約85%、コンクリート巻立ては1370mで進捗率56%、総合進捗率は約70%に達したが、当初計画の年度内完成は達成できなかった。⁽³⁴⁾

(2) 立山ロープウェイ工事 (二の沢～黒部御前間：全長1702m)

昭和42年末までに両端駅舎の掘削はほぼ完了し、一部基礎コンクリートを打設していた。昭和43年は6月下旬から基礎コンクリート打設を開始し、年末までに二の沢駅は地下1階・地上2階、黒部御前駅（新丸山駅を改称、現黒部平駅）はプラットフォーム部を除き本体部打設を完了した。建築進捗率は二の沢駅66%、黒部御前駅82%に達した。⁽³⁵⁾

立山ロープウェイは当時の日本における初の1500mを超える長大スパンであり、法定限度1000mを超える部分については特別認可を取得する必要がある。10月19日付で施工認可が下り、昭和44年6月にはロープ延線および機械装置据え付けに着手する予定であった。

(3) 黒部ケーブルカー工事 (黒部御前～黒部ダム間：全長828m)

ケーブルカートンネルは昭和42年9月15日に貫通しており、冬期間も作業を継続した結果、昭和43年6月までに全断面掘削を完了した。コンクリート巻立ては510m（進捗率61.6%）、レール敷設は185m（進捗率22.3%）に達し、年末には未敷設箇所はわずか30mとなった。⁽³⁶⁾ 建築工事では、黒部湖駅（旧黒部ダム駅）はほぼ完成、黒部平駅（旧黒部御前駅）の本体工事も8月中旬までに終了し、巻上機器の据え付けもほぼ完了した。

昭和43年の立山黒部アルペンルート建設は、本格掘削の進展と地質的困難への科学的対応、長大スパン索道建設の法的調整、ケーブルカー施工の最終仕上げが年度の中心となった。立山トンネルでは破碎帯・軟弱層・湧水という極めて複雑な地質条件に対して、迂回坑掘削やボーリング調査を組み合わせた科学的・技術的工夫が適用され、総合進捗率約70%を達成した。ロープウェイ工事では、1500m超スパンという画期的構造の施工認可を得ることで日本における長大索道建設の先例を作り、ケーブルカー工事は掘削・巻立・建築・機械据え付けの全過程が完成間近となった。

本年度の経験は、立山黒部アルペンルート建設の技術的成熟期の到来と、地質・法規制・施工条件の総合調整による山岳観光インフラ整備の先駆的事例として、我が国の建設史に重要な位置を占める。

6-4. 昭和44年(1969)について

立山黒部アルペンルートは、日本有数の豪雪地帯である立山黒部地域において、観光と交通を両立させる巨大大業として構想された。昭和40年代後半、黒部ダムの完成を契機に、その周辺で進められた交通インフラ整備は、単なる山岳施設の建設ではなく、山と人とを安全かつ恒常的に結びつける近代土木の試みであった。昭和43～44年にかけては、立山トンネル、ロープウェイ、ケーブルカー、ターミナルビルといった主要施設の建設が集中し、アルペンルート全体の運営基盤が確立される重要な時期であった。

昭和43年6月19日、黒部ケーブルカーの運賃料金設定が運輸省に認可され、同年7月20日には営業を開始した。この開業は、アルペンルートが「人々に開かれた山岳交通」として機能する第一歩であり、黒部ダム完成後の山岳開発史における象徴的出来事であった。

開業に先立つ準備は、冬季を含む周到な計画の下で実施された。電車線の架設や巻上機器・電気設備の完成、ロープや客車の工場製作、延線・据え付け、そして試運転・調整運転といった一連の工程が順次実施され、7月の営業開始に至った。また、資本増強や営業年度の変更など経営的な基盤整備も並行して行われ、アルペンルート運営の持続可能性が確保された。

(1) 立山ロープウェイ工事

立山ロープウェイの建設は、黒部ダムを核とする山岳観光網の拡張に直結する重要事業であった。黒部平駅、大観峰駅の建設は、豪雪期の除雪作業から始まり、コンクリート打設、内装工事、機械据え付けといっ

た工程を経て進行した。特筆すべきは、直径 5.4cm、長さ 1710 m、重量 28 トンのメインロープの搬入である。富山側からの搬入が不可能であったため、大町トンネルを経由して黒部ダム上を通過させる必要があった。ダム管理側の慎重な安全確認を経て、特別補強を施したうえで搬入が許可され、山岳交通の難題を技術力と計画力で克服したことを示す。⁽³⁷⁾ロープウェイは年内に試運転を行い、翌春に調整運転を経て翌夏に開業予定となった。この過程で、富山地方鉄道から運転要員の出向を受け入れ、技術継承と運転訓練を並行して実施したことも特筆される。

(2) 立山トンネル工事

立山トンネルはアルペンルートの核心的構造物であり、昭和44年当時もお室堂方・黒部方の双方で断層破砕帯や大量湧水に阻まれて難工事が続いていた。冬季の湧水量調査では、前年12月時点の1,500リットル/分が150リットル/分まで減少するなど、⁽³⁸⁾自然条件の変化を見極めながら工事計画を調整することが不可欠であった。

掘削は導坑工法により先進ボーリングで地質と湧水状況を確認しつつ進められ、室堂方では12月15日に貫通を果たした。黒部方では、地盤内水圧の低下を目的とした排水ボーリングと、断層破砕帯45メートルに対する薬液注入工法を実施。これは低温微粒子地盤下での国内初の試みであり、所期の効果を発揮して掘削突破に成功した。これにより、アルペンルートの核心である立山トンネルは、計画から4年の歳月を経て完成を迎えた。

さらに、集中豪雨や道路遮断といった自然災害に直面しつつも、ケーブルカーや索道、ヘリコプターを活用した資材輸送によって工事を継続し、翌年以降の運行に必要な工事用資材の備蓄も可能にした。

(3) 室堂ターミナルビル工事

室堂ターミナルビルは、立山トンネルバス停留場・発着場を含む交通施設と、ホテル・宿泊施設を併せ持つ拠点である。4月中旬から除雪、6月下旬よりコンクリート打設を行い、運輸施設部分の整備を優先した。しかし、集中豪雨による資材輸送路の寸断により、建設計画の一部は中断せざるを得なかった。運行バス発着場は10月5日までに屋根までの工事を完了し、ターミナル部分は1階床までの躯体工事を終えるなど、自然条件を考慮した柔軟な進行管理が行われた。

昭和43～44年の立山黒部アルペンルート工事史は、完成と未完成が交錯する時期であった。黒部ケーブルカーの開業やロープウェイの架設によって観光交通は形を成す一方、立山トンネルやターミナルビル工事は自然条件に翻弄されつつも着実に進められた。

この時期の工事史は、単なる建設の記録ではなく、山岳自然に対する技術的挑戦、人材と資材の巧みな管理、持続可能な運営体制の構築という多層的努力の結晶を示している。アルペンルートの完成は、黒部ダム建設史の延長上に位置し、自然条件との対話と技術的創意の積み重ねによって成し遂げられたものである。

6-5. 昭和45年(1970)、46年(1971)について

昭和45年、立山黒部アルペンルートの建設は、全線開通に向けた最終段階に差し掛かっていた。立山トンネル、室堂ターミナルビル、立山貫光ターミナルのホテル部、ターミナル前面の駐車場、さらに桂台～美女平間の一般自動車道など、多岐にわたる施設が相互に関連し、工程の遅滞なく進行するための精密な調整が行われた。

事業の推進には資金面の整備も欠かせなかった。2月の取締役会では、株主割当による増資や一般公募増資、日本開発銀行などからの第二次借入計画が諮られ、4月には融資審査が行われた。こうして事業の財政基盤は確立され、山岳地帯での大規模工事の遂行に備えた。⁽³⁹⁾

同時に、これまで日本道路公団が管理していた美女平～追分間の道路は、4月1日付で富山県に無償移管

され、以後は県が管理・整備・除雪を担当することとなった。除雪は4月8日から美女平を起点に奥へ進められ、月末には弥陀ヶ原、5月13日には室堂まで完了。これにより、立山トンネル工事用の大型ブルドーザーによる資材輸送路が確保され、現場は着々と開業準備に入った。

さらに、立山開発鉄道の室堂までのバス運行は6月1日に開始され、日本国有鉄道（現JR）、名古屋鉄道の千寿ヶ原乗り入れも7月15日に実現するなど、山岳交通網の接続も整備された。

（1）立山トンネル工事

立山トンネル工事は、前年12月に室堂方の導坑が貫通したことにより、黒部方からも乗り込みが可能となり、作業は前年より1か月早く2月20日に始まった。室堂側では3月1日、坑内最大の障害である大量湧水に対応するため、大型下水渠の掘削を開始。融雪湧水期前の5月10日までに完了し、導坑断面の切り広げ作業は順調に進み、9月11日に完了。その後の巻き立て作業も9月16日に終了した。8月1日にはアスファルト舗装工事に着手し、一部軟弱路面に苦慮しながらも10月末に完了。照明や通信設備の設置も厳冬期作業を強行して翌昭和46年3月初旬に完了し、4月開業に向けた準備が整った。⁽⁴⁰⁾残工事として坑外の土捨場整理や作業場敷地の復旧が残るのみで、緑化工事は室堂ターミナルビルの完成後まで保留された。

一方、黒部方では3月1日から作業を開始し、室堂方のズリ運搬作業を3月13日に完了。引き続き仮建物敷設や二の沢広場の除雪を行い、5月12日には大観峰駅内仮設宿舎から仮建物宿舎への移転を完了した。破碎帯以奥の断面切り広げ作業は4月22日から再開し、7月8日に終了。巻き立て作業も10月下旬に完了した。並行して行われたコンクリート舗装工事は11月8日に全線完了し、坑内照明・通信設備も翌3月初旬に完成予定となった。⁽⁴¹⁾これにより、開業に直接関わる坑内作業はほぼ完了し、残されたのは坑外の整備のみとなった。

（2）大観峰駅・室堂駅工事

大観峰駅では、黒部平駅との工所用索道撤去後、地中梁と上屋屋根のコンクリート打設が進められ、11月6日に躯体工事が完了。内部足場の撤去や内装・付帯設備の仕上げは翌昭和46年3月末までに完了予定であった。

室堂駅では、前年に躯体工事を終えた発着場に続き、旅客ターミナル部分の躯体工事を10月下旬に完成させた。1階の登山者通路や診療所など、旅客利用に直結する部分も立山貫光ターミナルにより施工され、翌3月末までに完了予定。こうして4月の立山トンネル開通に万全の態勢が整えられた。

11月初め、87人乗り自動開閉式ワンツーマン型バス4両が立山ケーブルカー経由で坑内に搬入され、厳重な試運転と各種保安テストに合格した。昭和46年度には8両に増車される予定であった。

バスは、トンネル内最高速度25km/hに制限されながらも、パワーステアリング、排気制御、チューブレスタイヤ、集中ターボチャージャーなど安全性・走行性能に配慮した装備を有し、旅客サービス向上のためラインライトや背当分割式座席も設けられた。⁽⁴²⁾

立山ロープウェイは昭和44年12月から機器の微調整を行っていたが、昭和45年5月に国内初の救助搬器設備を取り付け、6月末には社内検査と運輸省検査に合格。誘導無線による電話および運転制御装置も国内初の画期的技術として試験研究補助金交付対象事業に指定された。

ロープウェイの開通式は7月24日に黒部平駅で神事とテープカットが行われ、翌25日には営業開始。350名の参会者が山岳交通の新時代の幕開けを祝った。

昭和46年4月16日、官庁による竣工検査が終了し、運賃も認可。4月24日には立山トンネル開通式が神事中心に執り行われ、翌25日、黒部ケーブルカー・立山ロープウェイの営業再開とともに専用旅客バス運行が開始され、立山黒部アルペンルートは全線開通を果たした。

5月28日・30日には地元、株主、名士ら740名を招いた試乗会が開催され、6月1日には政官界、財界、

地域住民など多数を招き、富山市体育館で全線完成式典および全通記念パーティーが盛大に催された。佐伯社長はこの席で、技術的・自然的・経済的困難を乗り越え、地域社会の協力のもとで全線完成に至った経緯を述べ、事業への執念を記した著書『立山連峯貫通と地方自治の独立』を刊行した。⁽⁴³⁾

昭和45～46年の立山黒部アルペンルート建設は、豪雪、湧水、破碎帯、資材運搬など多くの自然的・技術的困難に挑んだ期間であった。立山トンネル、室堂・大観峰・美女平の駅舎、ロープウェイ、トンネル内バスなどの完成は、人間の創意工夫と技術力、計画力、そして地域社会との協働の成果である。

全線開通により、立山黒部アルペンルートは単なる観光路線ではなく、日本の山岳交通史における技術的・社会的偉業として記録され、地域経済と観光振興に貢献する歴史的プロジェクトとして後世に語り継がれるものとなった。

7.アントレプレナーとしての佐伯宗義

黒部川の電源開発と立山黒部アルペンルートの開発に不可欠な役割を果たした人物として、佐伯宗義が挙げられる。佐伯は、まさにアントレプレナーであった。アントレプレナー (entrepreneur) とは各自の収集可能経営資源 (資本、人材、技術等) 以上のものを組織化して、高い経営理念に導かれて収益性をも確保するような事業者をいう。⁽⁴⁴⁾富山県の交通・地域開発に生涯を捧げた佐伯の思想と実践を、「富山県一市街化」構想および立山黒部アルペンルートの実現過程を軸に辿り、彼のアントレプレナーシップについて探してみたい。

佐伯は30歳代という比較的若い時期に、富山県の地勢に着目した「富山県一市街化」構想を打ち出した。立山山麓から日本海へと流れる四大河川に沿って点在する私鉄路線を統合し、県全体を一つの都市のように機能させようとするこの構想は、「教育、文化、勤労の機会が県下のどこからでも均等に与えられねばならない」という佐伯の強い信念に基づいていた。そして、その理想を現実のものとするための前提条件こそが、交通機関の整備であった。⁽⁴⁵⁾

この思想形成には、佐伯自身の原体験が影響している。生まれ故郷の芦峯寺は、富山市中心部から24kmの山間地にあり、交通の不便さは日常の実感であった。⁽⁴⁶⁾また、信達軌道の経営を引き受ける際に母から掛けられた「儲からない仕事でも、社会に必要欠くことのできない仕事をやりなさい」という言葉は、⁽⁴⁷⁾佐伯の事業選択の基準となり、彼を生涯にわたる公益企業経営へと導いた。この言葉に象徴されるように、佐伯にとって事業とは利益追求ではなく、社会に資する具体的手段であった。

「富山県一市街化」の実現に向け、佐伯は既存私鉄の買収や統廃合、新線建設を繰り返しながら構想を進めていく。しかし、彼自身が潤沢な資金や資産を持っていたわけではない。佐伯の最大の経営資源は、人脈と説得力、そして構想を実現しようとする情熱であった。時代の変化や戦後の社会体制の転換に応じて構想は微調整を迫られたが、その都度、新たな実現手段を模索し続けた点に、佐伯の動的なアントレプレナーシップを見ることができる。

昭和18年、佐伯は「富山県一市街化」が一応の達成を見た判断し、次なる目標として立山連峰の貫通構想を掲げる。立山を越えて富山市と長野県大町市を直結し、北陸と信州を結ぶ広域的な公益経済圏を形成するという、この構想は、佐伯が若い頃から心中に描いてきたものであった。その背景には、芦峯寺の神職の家に生まれ、千年に及ぶ立山信仰の只中で育った経験がある。佐伯は『自叙伝』において、立山と自己とを不可分の存在として捉え、いつかは立山を開いた祖先に匹敵する足跡を残し、立山を「21世紀的に」開発する使命を自らに課していたと述べている。⁽⁴⁸⁾

長年にわたる構想と働きかけの結果、昭和35年、富山県議会において立山黒部有峰地帯の開発に対する出資が決定される。これを契機に、富山県、関西電力、北陸電力、立山開発鉄道が結集し、立山黒部有峰開発株式会社 (TKA) が設立され、佐伯は取締役、のちに社長としてその中核を担った。さらに、冬期の道

路遮断を補完するためロープウェイ導入が決まり、立山黒部貫光株式会社（TKK）が設立される。「観光」ではなく「貫光」と名付けられた社名は、自然を消費するのではなく、大自然を貫いて交通路を開くという佐伯の理念を象徴している。

立山黒部貫通事業の最大の難関は、標高2,000mに位置する立山トンネルの掘削であった。昭和41年に始まった工事は、集中豪雨による輸送路の崩壊、長大な破碎帯、毎分63 t に及ぶ湧水など、過酷な自然条件に阻まれた。冷水の中での作業は長時間続けることができず、工期は当初予定より2年遅れ、昭和46年ようやく貫通を果たす。しかしこの困難を乗り越えた結果、富山側からの立山黒部アルペンルートが全線開通し、霊山立山の壮大な景観が一般市民に広く開かれることとなった。

佐伯は、『富山地方鉄道五十年史』理念編において結びの言葉にオーストリアの諺「十分は十分でない」を引き、現状に満足することの危うさを説いている。超長期プロジェクトを一つ終えるごとに、彼はさらに高い目標を掲げ、挑戦を続けた。その構想図には北廻り新幹線の路線まで描かれていたという。佐伯の事業は単なるインフラ整備にとどまらず、地方自治と公益の基盤を築く試みであり、その根底には一貫した社会観と使命感があったことが明らかにされている。⁽⁴⁹⁾昭和56年（1981）、87歳でその生涯を閉じるまで、佐伯は未来を見据え続けた。

以上のように、佐伯は単なる鉄道経営者ではなく、公益性を軸に行動した稀有なアントレプレナーとして位置づけられる。市場での収益最大化ではなく、社会にとって「必要欠くべからざるもの」を実現するために資源を探索し、人を動かし、時代とともに構想を更新し続けた点に、佐伯の思想と業績の核心があるといえる。

おわりに

大正15年の立山保勝会設立を起点とし、立山黒部が一体的観光地として成立していく過程は、行政、観光開発などと複雑に絡み合いながら形成される、単なる地域史を超えた、ダイナミックな社会の変遷であった。

今日、私たちが利用するアルペンルートも、遠い大正期に芽生えた「立山と黒部を共に守り、共に活かす」という理念の延長線上にある。また、ダム湖を見下ろし、ケーブルカーやバスで山を越える体験の背後には、戦後復興期の切実なエネルギー需要と、それに応えようとした人々の構想と労苦が横たわっている。黒部ダムの建設史は、単なる工事の記録ではなく、日本が自然と向き合いながら未来を築こうとした、一つの物語と言えるだろう。

立山黒部の物語は、単なる観光地の歴史ではなく、人々が自然とどのように向き合い、それを未来へどう引き継ごうとしたのかを示している。

【謝 辞】

黒部川の電源開発について、黒部市歴史民俗資料館と関西電力株式会社北陸支社からご教示をいただいた。また、立山黒部アルペンルートの開発工事については、立山黒部貫光株式会社からご教示いただいた。末筆ながら深く感謝の意を表します。

【註】

- (1) 高野 靖彦「立山保勝会の設立について―大正期における立山登山環境整備の一齣」(『研究紀要』第26号所収、富山県[立山博物館]、2020年3月刊) 100頁
- (2) 「時報 立山保勝會の計畫」(『庭園』第七卷第十號所収、1925年刊) 28頁
- (3) 註(1)に同じ、98～99頁

- (4) 註(1)に同じ、99頁
- (5) 註(1)に同じ、98頁
- (6) 註(1)に同じ、97頁
- (7) 富山県[立山博物館]平成29年度後期特別企画展『宮様、山へー大正期登山ブームのなかの皇族登山ー』、展示解説書(富山県[立山博物館]、2017年9月刊)34頁
- (8) 註(1)に同じ、100頁
- (9) 高野 靖彦『立山観光ヒストリア』(北日本新聞社、2025年7月刊)250頁
- (10) 富山地方鉄道株式会社『富山地方鉄道五十年史』(富山地方鉄道株式会社、1983年3月刊)104頁
- (11) 註(10)に同じ、151頁
- (12) 註(10)に同じ、151頁
- (13) 註(10)に同じ、153頁
- (14) 黒部市歴史民俗資料館 第5回特別展『黒部の鉄道史 ～電源開発の軌跡～』、展示解説書(黒部市教育委員会、2010年7月刊)5頁
- (15) 註(10)に同じ、226頁
- (16) 註(14)に同じ、12頁
- (17) 宇奈月町歴史民俗資料館 第11回特別展『黒部川のあゆみ 峡谷観光と電源・温泉開発』、展示解説書(宇奈月町教育委員会、2003年8月刊)7頁
- (18) 註(17)に同じ、7頁
- (19) 註(17)に同じ、7頁
- (20) 註(14)に同じ、14頁
- (21) 黒部市歴史民俗資料館 第8回特別展『黒部ダムを探る ～黒部ダム建設50周年～』、展示解説書(黒部市教育委員会、2013年6月刊)7頁
- (22) 註(21)に同じ、7頁
- (23) 関西電力五十年史編纂事務局『関西電力五十年史』(関西電力株式会社、2002年3月刊)392頁
- (24) 『富山県史』通史編Ⅶ現代(富山県、1983年3月刊)512頁
- (25) 富山県[立山博物館]令和4年度前期特別企画展『いざ、立山へ！ー鉄道にみる立山観光ー』、展示解説書(富山県[立山博物館]、2022年7月刊)9頁
- (26) 註(25)に同じ、9頁
- (27) 立山黒部貫光三十年史編集委員会編『立山黒部貫光三十年史』(立山黒部貫光株式会社、1995年10月刊)124頁
- (28) 註(27)に同じ、126頁
- (29) 註(27)に同じ、126頁
- (30) 註(27)に同じ、126頁
- (31) 註(27)に同じ、128頁
- (32) 註(27)に同じ、129頁
- (33) 註(27)に同じ、130頁
- (34) 註(27)に同じ、131頁
- (35) 註(27)に同じ、132頁
- (36) 註(27)に同じ、132頁
- (37) 註(27)に同じ、135頁
- (38) 註(27)に同じ、135頁
- (39) 註(27)に同じ、137頁
- (40) 註(27)に同じ、138頁
- (41) 註(27)に同じ、138頁
- (42) 註(27)に同じ、139頁
- (43) 註(27)に同じ、140頁
- (44) 田中祥子「研究ノート ある地方鉄道創業者のアントレプレナーシップ」(『高岡法学』第33号所収、高岡法科大学、2015年3月刊)50頁

- (45) 佐伯宗義『自叙伝』（佐伯芳子、1982年刊）91～92頁
 (46) 註（45）に同じ、91～92頁
 (47) 註（45）に同じ、64頁
 (48) 註（45）に同じ、9頁
 (49) 註（44）に同じ、66頁

年代	立山黒部アルペンルート関係	黒部川電源開発関係
明治5年	1872	9/12（新暦10/14）、新橋一横浜間（29km）開業【日本初の鉄道】
明治25年	1892	6、鉄道敷設法が施行され敦賀一富山間の鉄道官設の方針を決定し翌年着工
明治41年	1908	11、官設富直線、富山一魚津間が開通、富山駅が現在地に移転
明治45年/ 大正元年	1912	1、立山軽便鉄道開創
大正2年	1913	4、官設富直線、青海一糸魚川間が開通し、米原一直江津間が全線開通。北陸本線と称する 5、富山電気軌道開創
大正6年	1917	6、立山軽便鉄道開創が立山鉄道に改称
大正8年	1919	12、東洋アルミナム開創の設立 12、日本電力開創の設立
大正9年	1920	樺平から上流へ水平歩道開削開始
大正10年	1921	3、立山鉄道、五百石一立山（現岩峠寺）間開通 4、県営鉄道、南富山一上流間開通 8、県営鉄道、上流一岩峠寺間開通、立山鉄道に接続 10、県営鉄道、岩峠寺一横江間開通
大正11年	1922	11、黒部鉄道開創、三日月一立間開通
大正12年	1923	4、県営鉄道、横江一干垣間開通 11/21、黒部鉄道開創、下立一桃原（大13.3宇奈月）に改称）間全線開通〔三日月駅（現JR黒部駅）から桃源駅（現宇奈月温泉駅）まで〕 11/22、宇奈月温泉開湯 黒部専用鉄道、宇奈月一猫又間で軌道工事開始
大正13年	1924	5、黒部鉄道開創が黒部水力開創と黒部温泉開創を合併 9、山彦橋（黒部橋）の完成 仏石橋の完成 2、日本電力開創により柳河原発電所新設工事着工
大正14年	1925	水利権を日本電力開創に引き継ぎ 後曳橋の完成 仙人谷地点から日電歩道（旧日電歩道）の開削開始 冠松次郎が黒部川下廊下を完全廻行十字峠を命名
大正15年/ 昭和元年	1926	10/23、日本電力開創による黒部専用鉄道、宇奈月一猫又間で運転開始
昭和2年	1927	後曳水路橋の完成
昭和3年	1928	黒部川第四発電所地点調査開始 1、柳河原発電所竣工（50700kWとなり、当時としては日本最大出力の発電） 鐘釣橋の完成
昭和4年	1929	日電歩道全通（小黒部谷～平ノ小屋間約3km）
昭和5年	1930	2、富山電気鉄道開創設立 4、黒部鉄道開創、三日月一石田港間営業開始
昭和6年	1931	3、富山電気鉄道開創が立山鉄道開創を合併 8、同、富山田地方一上市口間、寺田一五百石間開通 10、同、電鉄富山一富山田地方間開通
昭和8年	1933	6、黒部川第二発電所新設工事着工
昭和9年	1934	目黒橋の完成 北アルプス一円、中部山岳国立公園に指定
昭和11年	1936	9、黒部川第三発電所新設工事着工 6、富山県営愛本発電所の完成 小屋平ダムの完成 10、黒部川第二発電所の完成 10、富山電気鉄道、魚津一西三日月市間の開通により全線開通
昭和12年	1937	高熱トンネルに遭遇 6/30、黒部専用鉄道、宇奈月一樺平間全線で運転開始
昭和15年	1940	仙人谷ダムの完成 11、黒部川第三発電所運転開始 5/30、黒部鉄道開創、三日月一石田港間廃止
昭和16年	1941	9/3、黒部専用鉄道上部軌道、樺谷一仙人谷間開通 12/1、富山電気鉄道開創、富岩鉄道開創・富南鉄道開創と合併
昭和17年	1942	愛本変電所の完成
昭和18年	1943	1/1、富山電気鉄道開創を母体とする県下交通大統合により富山地方鉄道開創が成立 6/1、富山地方鉄道開創、富岩線が国に移管され富山港線となる
昭和22年	1947	4、佐伯宗義、衆議院議員に初当選（昭24・27・28・30・35・38・44の8回当選）
昭和24年	1949	黒部川第四発電所開発構想発表
昭和25年	1950	5・6、「富山県議会」に2回にわたって、佐伯宗義、副知事成田政次らによる「座談会 観光放談」が掲載される 6、国土総合開発法施行（5/26、制定）
昭和26年	1951	6、第1回富山県総合開発審議会開催 7、高辻知事立山視察 9、富山地方鉄道名義で鋼索鉄道（千寿ヶ原一美女平間1.3km）敷設を申請 9、富山地鉄、千丈ヶ原一称名間バス営業開始 12、立山開発懇談会を県庁にて開催、立山開発会社設立委員会を設置 12、立山開発会社設立委員会を県庁にて開催、発起人選定小委員会を設置 12、発起人選定小委員会において発起人15人を選定 12/24、立山開発会社設立発起人会を開催し、社名立山開発鉄道株式会社、発行株式数、発起人総代佐伯宗義、定款を決定
昭和27年	1952	3、第2回富山県総合開発審議会開催、総合開発計画を知事に答申 4/1、立山開発鉄道開創（TKR）設立 8、鋼索鉄道免許状（鉄監第992号）下附 12、鋼索鉄道の地鉄線を千丈ヶ原（千寿ヶ原）で行う
昭和28年	1953	9、県と共催で鋼索鉄道及び弥陀ヶ原県有自動車道の修祓式を挙行。美女平一弘法間県有有料道路着工
		11、関西電力黒部鉄道、宇奈月一樺平間旅客営業開始

年代		立山黒部アルペンルート関係	黒部川電源開発関係
昭和29年	1954	4、富山地鉄から立山線小見一粟巣野間(5.0km) 鉄道事業と粟巣野一千寿ヶ原間(1.2km) 鉄道敷設免許を譲受(運転管理は委託) 8、立山開発鉄道、平垣線(粟巣野一立山仮間) 開通 8、立山ケーブルカー(立山一美女平間) 営業開始	
昭和30年	1955	7、平垣線(立山仮一立山間) 開通。県道美女平一弘法間開通。美女平一弘法間バス営業開始。立山駅一称名間バス営業開始(～33年) 7、富山地鉄、電鉄富山一十寿ヶ原(立山) 間直通運転開始	
昭和31年	1956	4、駅名立山を千寿ヶ原に改称 7、美女平一弘法間、弘法一追分間を日本道路公団へ移管し立山有料道路となる 8、黒部川第四発電所新設工事着工(大町トンネル掘削開始) 9、弘法一追分間開通(県)。同区間バス営業開始 10、弥陀ヶ原ホテル営業開始	7、黒部川第四発電所新設工事着工 大町ルート道路部の建設工事開始 大町トンネルの大町側からの掘削開始 ダム側からの大町トンネル迎え掘り開始 ダム地点道路の一部建設工事開始 工事用倉庫の建設水路トンネル・黒部ルートトンネル等発電所側掘削開始 地下発電所横坑の掘削開始 軌道延長工事の掘削開始 黒部ルートトンネル坑口への資材運搬用ドラムウェイおよび人用ロープウェイの建設 黒部鉄道および上部軌道の補強
昭和32年	1957	4、美女平一弥陀ヶ原ホテル間雪上車営業開始 11、富山地鉄、千垣一芦峯寺間バス営業開始	5、大町(関電)トンネル破砕帯に遭遇 12/2、大町(関電)トンネル破砕帯を突破 ダム工事用道路およびケーブルクレーン・パッチャープラント等の仮設備建設工事開始 黒部ルートトンネルのダム側からの掘削開始 発電所・変電所アーチ部の掘削開始
昭和33年	1958	5、信濃大町一黒部ダム間の大町ルート全通(2/25、大町トンネル貫通) 7、関西電力弥陀ヶ原一室堂間輸送路を県に移管、県道として供用開始。美女平一室堂間ハイヤー営業開始 9、追分一弥陀ヶ原間開通(県委嘱、自衛隊施工)。同区間バス営業開始	2/25、大町(関電)トンネル開通 ダムコンクリートの打ち込み開始 水路トンネルダム側からの掘削開始 黒部ルートトンネル開通 発電所・変電所本体の掘削開始 発電所・変電所のコンクリート打ち込み開始 発電所～黒部ルートトンネル間インクライン使用開始 水圧鉄管水路トンネル(斜坑)の完成
昭和34年	1959	2、黒部川第四発電所黒部トンネル貫通 6、千寿ヶ原ホテル開設 9、黒部川第四発電所ダム定礎式	4、高岡軌道線(新高岡一新湊間)を富山地鉄(株)から加越能鉄道(株)に譲渡 ダムコンクリート打ち込み続行 水路トンネルのコンクリート巻き立て完了、引き続きグラウト施工 水圧鉄管備え付け開始 1、2号水車発電機備え付け開始
昭和35年	1960	5、立山黒部有峰開発(株)(TKA) 設立。社長に山田昌作	ダムコンクリート打ち込み標高1,380mまで完了、貯水池一部湛水 水路トンネルグラウト完了水圧鉄管備え付け完了 水圧鉄管備え付け完了 発電機2台備え付け完了
昭和36年	1961	6、美女平ロッジ営業開始(昭42.3/25、美女平ホテルに改称)(TKR) 10、追分一室堂間一般自動車道着工(TKA)	ダムコンクリート打ち込み完了 1、黒部川第四発電所一部発電開始
昭和37年	1962	4、小見一千寿ヶ原間鉄道事業を富山地鉄(株)に譲渡。千寿ヶ原ホテルの主力株を引き取り経営(TKR)	3号水車発電機備え付け開始、年内に完了 8、全発電機運転開始
昭和38年	1963	6、関西電力(株)、黒部川第四発電所竣工 7、一般自動車道弥陀ヶ原一天狗の鼻間営業開始(TKA)。弥陀ヶ原一美松坂間バス運行開始(TKR) 9、一般自動車道天狗の鼻一天狗平間営業開始(TKA)。美松坂一天狗平間バス運行開始(TKR)	6/5、黒部ダムの完成 黒部川第四発電所の完成
昭和39年	1964	6、一般自動車道追分一室堂間営業開始(TKA)。天狗平一室堂間バス営業開始、美女平一室堂間直通運行開始(TKR) 7/14、立山高原バスライン美女平一室堂間開通式 8、関西電力トロリーバス扇沢一黒部ダム間営業開始 12/25、立山黒部貫光(株)(TKK) 設立。社長に佐伯宗義	10、東海道新幹線(東京一新大阪間) 開通
昭和40年	1965	2/12、社章と社旗制定 10、長野県大町有料道路開設 11/2、室堂、黒部ダムで黒部ケーブルカー、立山ロープウェイ、立山トンネルバス運輸施設工事起工式	
昭和41年	1966	3/25、黒部ケーブルカー着工 4/12、黒部、室堂で建設事務所開設 4/29、立山トンネル着工(7/28、中沢トンネル(雷殿一大観峰間)、8/一、主トンネル(浄土沢一雷殿間)) 9、一般自動車道桂台一美女平間起工式(県、TKA共催) 12、「立山ルート緑化研究委員会」発足	新黒部川第二発電所運転開始
昭和42年	1967	6/1、室堂トンネル掘削開始 6/16、主トンネル室堂方で第1次軟弱層帯に遭遇(9/3、突破) 9/15、黒部ケーブルカーのトンネル貫通 10/27、室堂トンネル貫通 12/24、立山貫光ターミナル(株)設立(TKT)	
昭和43年	1968	7/21、主トンネル室堂方で第2次軟弱層帯に遭遇(9/11、突破) 8/13、中沢トンネル貫通 9/30、主トンネル黒部方で破砕帯に遭遇(翌年8/13まで工事中止) 10/20、立山ロープウェイ着工	
昭和44年	1969	5/28、天皇皇后両陛下、第20回全国植樹祭に行幸啓(5/24-29。富山地鉄・立山ケーブルカーでお召車を運転。大観台へ) 7/20、黒部ケーブルカー(黒部平一黒部湖間) 営業開始(7/19開通式) 11/5、立山トンネル舗装工事と室堂・大観峰バスターミナル工事着工 11/23、主トンネル黒部方破砕帯突破 12/9、立山トンネル全線貫通	10、北陸本線、全線複線電化完成
昭和45年	1970	4、美女平一追分間道路を日本道路公団から県へ移管 7/1、富山一大町間貫通ルートを「立山黒部アルペンルート」と命名。立山ケーブルカー千寿ヶ原駅を立山駅に改称 7、国鉄、急行「立山」「むろどう」、名古屋鉄道、急行「北アルプス」が、富山地鉄立山駅へ直通乗り入れを開始 7/25、立山ロープウェイ(大観峰一黒部平間) 営業開始(7/24開通式) 12/15、立山トンネル工事完成。一般自動車道桂台一美女平間供用開始	
昭和46年	1971	4/25、立山トンネルバス室堂一大観峰間営業開始。室堂一黒部湖間全線開通 5、桂台一美女平間、追分一室堂間自動車道を富山県道路公社(4/1、設立)へ譲渡(TKA) 6/1、立山黒部アルペンルート全線開通。立山有料道路(桂台一美女平間・追分一室堂間) 供用開始	5/4、関西電力(株)が子会社として黒部峡谷鉄道(株)を設立(7/1、営業開始) 10、国鉄、急行「ゆのくに」(翌年3/15「立山」に変更)が、富山地鉄宇奈月温泉駅(8/1、宇奈月から改称)へ直通乗り入れを開始
昭和47年	1972	7、立山トンネルに雷殿開設 9/1、ホテル立山営業開始(TKT)	
昭和48年	1973	6/18、関西電力(株)、黒部川第四発電所など電源開発工事終了	10、国鉄、急行「うなづき」が、富山地鉄宇奈月温泉駅へ直通乗り入れを開始

近世の紀行文・道中記に書かれた立山禪定登山の実情についての一考察 —三河の国学者 渡辺政香の紀行文『北游藁』の記述を中心に—

吉野 俊哉

はじめに

江戸時代、立山には毎年一夏に6,000人ももの登拝者が訪れたと言われる。その中には年齢や立場の違う農民や町人、武士や文人など様々な人たちがいた訳だが、何れの立山禪定登山も彼ら一人一人にとっては、費用と時間をかけたかけがえのない旅であった。そんな彼らの立山山中での体験や見聞には、帰郷後の土産話になっただけではなく、文字情報に残されているものもある。それらは道中の支払い控や行程の記録、また随想や詩歌など多様な形をとるが、どのような形のものであれ、当時の立山山中の様子や登拝の実態を知る貴重な一次史料である。

立山山中での行動や行程は、各地に残るそれらの文字情報（以下、立山山中でのそれらの様々な情報を記録した文書を総称して「立山紀行文」）を通して分かってきている。登拝者が山中で聞いた説話や案内された場所、そこで感想といったありのままの立山登山の実態は、書かれた時代や書き手が違う複数の「立山紀行文」の記述を整理することで具体的になることである。仲語が山中で語った名所にまつわる伝説や開山説話等のバリエーション、山中にあった諸堂舎や地名などの実態は、今後もそれらを蓄積し丹念に比較・分析によって明らかになることであろう。

これまで、江戸時代に書かれた「立山紀行文」を精読し、立山山中の実情や各所に伝承する説話が、時代や筆者の立場の違いによりどう記録されてきたのか整理してきた。そこからは表記の揺れは勿論、彼らの目や耳を通した率直な感想も含めて、山中で立ち寄った場所、そこで語られていた説話の内容から禪定登山の実情が具体的に見えると考えるからである。そのためには、幅広い時代の異なる立場で書かれた様々な「立山紀行文」を参照する必要がある。

筆者は、西尾市岩瀬文庫が所蔵する、三河の国学者渡辺政香が立山を訪れた記録を含む文政5年（1822）の旅を記した紀行文『北游藁』（以下、「本史料」ともいう）の複写資料を入手した。立山山中の記述を翻刻し内容を分析したところ、これまで管見した「立山紀行文」と比較して特徴的な部分を含み、そこには禪定登拝者たちが見聞きした立山山中の実態を補う史料的な価値があると思われた。

そこで次章以下、先ず「本史料」の史料価値を論ずるために必要な著者渡辺政香の経歴や著述活動歴などを挙げた後、「本史料」の書誌と政香の文政5年の旅の概略を紹介する。そして、岩嶽寺から芦嶽寺へ行き、禪定登山後に下田へ戻るまでの足かけ4日間の行程部分を軸として、これまで管見した複数の「立山紀行文」の記載との比較分析を通して具体的な山中の実態を整理し、「本史料」の「立山紀行文」としての価値を確認したいと思う。

尚、書誌の詳細は後述するが、『北游藁』には最初に書かれた初稿本と、その後改稿増補した再稿本が存在し、岩瀬文庫ではそれぞれを甲、乙と分類している。小稿では両者を翻刻して校勘した上で、先ず甲（初稿本）からの引用を示し、刪削による差異を取り上げて論ずる必要がある場合には、乙の記述を並べて引用した。また本文中に引用した部分と重複するが、甲、乙それぞれの序文と立山禪定登山部分の翻刻文を、末尾に掲載した。

1. 著者渡辺政香について

1-1 生い立ち

江戸時代の国学者・神職であった渡辺政香（安永5年〈1776〉～天保11年〈1840〉）は、三河国幡豆郡寺津村（現・愛知県西尾市）に生まれた。生家は寺津八幡社の神職を務める家柄で、24歳で家督を継ぎ同社の神官となった。寛政2年（1790）には15歳で儒医浜島錦城に入門し和漢の史籍や詩文を学んでいたが、政香は思想的に錦城に最も深い影響を受けたと言われる⁽¹⁾。その後、伊勢外宮御師で漢詩人の山口凹巷にも師事し、更に文政6年（1823）には、凹巷を介して伊勢の国学者足代弘訓からも和歌を学んでいる。これらの経歴を見ると、学問に対する熱意は勿論、幼い頃からそれらの学問に触れる機会に恵まれたことが、政香の教養形成につながっていたことが分かる。

そして政香の生涯を振り返ったときもう1つ挙げておくべき点は、旅行を好み遠方への旅を繰り返し、その度に紀行文を残していることである。これは政香が師事し、やはり旅好きだった凹巷の影響が大きいと言われる⁽²⁾。凹巷には度々自作の詩や紀行文の添削を求めたというが、政香が自身の紀行文を改稿していた背後には、そんな師の姿のあったと言えるだろう。「本史料」からは、好奇心や探究心が旺盛で旅好きな教養人、詩歌を愛した文人の姿が窺われる。

1-2 事績

後世に政香を郷土の偉人として顕彰した文章では、概ね2つの事績を挙げている。1つは各地に残された様々な文献を参照し、三河地方に関する詳細な歴史や文化誌を記録していたこと。もう1つは、神職として様々な階層の人たちと身近に接しながら、弱者救済の立場で農民の側に立ち一揆の仲裁を行ったことである⁽³⁾。前者の代表としては三河国に関する歴史文化や人物をまとめた地誌『参河志』の編纂や、天保7年（1836）に三河国加茂郡で起こった大規模な一揆を活写した記録『鴨の騒立』の執筆がある。また後者の代表としては、同じ年に寺津村で起こった一揆の際に農民の側に立って大浜陣屋との間に入って仲裁したことがある。その顛末は『寺津村旧記』に書き残している。

そのような三河地方に関する著書その他、紀行文集、詩文集などを含め『国書総目録』には43件を記載するが、その精力的な文筆活動の背景にあって、「本史料」を含め数々の紀行文の執筆でも重視していた点が2つあったと考えられる。

1つは、記録性と細部に亘る客観性の重視である。前述の『参河志』では、その編纂に際して三河のみならず江戸や京、大坂などで三河地方に関する広い分野の資料やその写本の収集を行っていた。各地を旅行した際にも客観的な記録の重要性を意識していたことは、道中の見聞のみならず、関心を持った場所や訪れた各地の寺社について、後から関連文献を参照して内容を補う姿勢にも反映していたと思われる。

もう1つは、保存の重視である。政香が収集したそれらの資料や自著稿本を収めるため、境内に私設文庫「寺津八幡書庫」を設けたことである。それらの蔵書は、現在でも三河地方の歴史や文化を知るうえで貴重な一次資料群とされる。しかもそれを個人的な書庫とせず、蔵書を地域の人々に公開し広く閲覧を許し、地域での知識の共有と啓蒙に役立てていたという⁽⁴⁾。これを地域社会の教養の向上に寄与した先進的な事績として、地元では公共図書館の先駆けと評している。

1-3 旅の記録と紀行文の執筆

政香は生涯に何度も遠路の旅に出ている。その目的は一樣ではないが、17歳の時に伊勢熊野へ出かけて以来、紀行文を残した旅だけでも6回になる⁽⁵⁾（表1）。

政香の紀行文の特徴は、何れも草稿を執筆した後で更に推敲や増補を加えた再稿や、三稿となる改稿本を執筆していることだが、そのような紀行文執筆への思い入れは、記録性にこだわった政香の一面を示してい

るようである。また、政香は前述の旧師に度々詩文や草稿の添削を願い出ており⁽⁶⁾、その添削結果を参考に言葉遣いや表現を推敲し、そこに新たな関連資料を参照して納得がいくように内容を充実させた改稿を行った。政香の著作で生前に刊行されたものはないのだが、一連の改稿は寺津八幡書庫での公開を意図したものであったとも考えられる。

添削を願い出た事例は、現在西尾市岩瀬文庫がウェブ上で公開している、同文庫所蔵の「古典籍書誌データベース」に掲載される政香著作の解題でも指摘されている。例えば、「拙稿」と分類された政香の草稿中には、師の山口凹巷が政香の詩を添削した跡がある他、「詩稿」「草稿」「文稿」「歌稿」などと標題が付けられている遺稿にも、特定はされない某氏による墨書や朱書の添削があることを挙げている。その内、「文稿」⁽⁷⁾には「本史料」の「序」に添削の手が入っていたことと、本文では「神通川舟橋」に関する部分での添削文が例示されている。試みにその部分の添削文を甲本と乙本の当該部分と校勘したところ、乙本にはその添削内容を反映させた表現が確認できた⁽⁸⁾。

表1 渡辺政香の旅と紀行文

年	年齢	期間	紀行文	目的・主な行き先
寛政4 (1792)	17	1/9 ~ 2/27	『西游藁』	寛政4年春、伊勢熊野、西国三十三所を廻る。詩歌が中心。旅の記録『西游藁』(初稿本)、のち改稿して同名の再稿本、三稿本をつくる。
文化元 (1804)	29	3/13 ~ 4/1	『都紀行』	漢文に詩歌が入る。京都、伏見、大坂、奈良、三輪、初瀬、吉野、伊勢を廻る。京都では叔父渡辺政喬の墓参。旅の記録『都紀行』をつくる。2年前に結婚した妻の寿賀との二人旅。この旅で寿賀も紀行文『道の記』をつくる。
文化9 (1812)	37	3/24 ~ 5/4	『浪華紀行』	東海道を經て大坂を廻る旅の記録。詩歌が中心。旅の記録『浪華紀行』(初稿本)、のち改稿して同名の再稿本、三稿本『浪華游藁』をつくる。
文政元 (1818)	43	6/12 ~ 6/28	『東游藁』	東海道を經て富士登山、帰路吉田から甲府、信州を廻る。詩歌中心。旅の記録『富士記行』(初稿本)、のち同名の再稿本、改稿して『東游藁』をつくる。
文政5 (1822)	47	6/9 ~ 7/3	『北游藁』	白山・立山を目的に、途中諏訪神社、善光寺など各地を参拝。詩歌や漢詩多数。初稿本『北游藁』(甲本)、増補した再稿本(乙本)をつくる。
文政6 (1823)	48	3/21 ~ 3/28	『遊勢南記』	途中の各所を参拝、旧師、知音を訪ねながら伊勢を参詣。旅の記録は『遊勢南記』(草稿)の後『遊勢南記』(清書稿)、改稿して『勢南記行』をつくる。

2. 『北游藁』について

2-1 書誌

「本史料」は渡辺政香が文政5年、47歳の時に6月9日から7月3日まで25日間をかけた旅の全行程を記した紀行文である。自筆稿本は寺津八幡書庫の蔵書であったが、現在は西尾市岩瀬文庫が所蔵する「寺津八幡書庫旧蔵書」に架蔵する。

「本史料」には、先に書かれた初稿本『北游藁 甲』(43丁。以下、甲本)と、それを刪補して内容が増えた再稿本『北游藁 乙』(59丁。以下、乙本)とがある⁽⁹⁾。両者の記載内容に大きな齟齬はないが、再稿本には初稿の内容を損なわない程度に表現を改めた部分、詩歌の添削や追加、帰郷後に道中で見聞した各所に関して資料を参照、引用した部分が見られる。内容の充実度から見ても、乙本は補足資料の活用、旧師等へ依頼した添削の結果を反映させた推敲を経たものと分かる。小稿では「本史料」全文の校勘は行っていないが、政香の思想や詩歌の創作意図に関する研究では必要なことだと思われるので、今後その分野での研究の進捗を望みたい。

巻頭には文政五歳の年号が入った漢文の序が付けられ、それに続く本文には毎日の行程を記した日記的記録、各地の名所や立ち寄って参拝した社寺の名称やその謂れ等の他、随所に漢詩や和歌が挿入されている。他には、訪れた各所の伝承や動植物に関する記述⁽¹⁰⁾も見られ、街道に沿って地誌や民俗、寺社の様子や安置する仏像等の所在を知る上でも貴重な資料である。

2-2 記述や書き方の特徴

個人的な金銭の支出控ではなく、訪れた各地の名所や風土を記録する紀行文としてまとめられており、全体からは神道や国学の教養に加え漢詩や和歌にも通じた、当時の文人・知識人による旅の実態が読み取れる。

序文は、記紀に遡って霊山登拝の歴史を概観した後、旅の動機につながる内容や、安寧な時代にあって自らが霊山を登拝できることへの感謝などが簡潔に綴られている。

本文はほとんど毎日、日付とその日の天気で書き始め、終わりは宿泊地を記入して一日を締めくくる記述のパターンを守り、各地での見聞に客観的な記録性を重視している。前述のように政香は三河地域の風俗・信仰・景観を、地域文化の記録として詳細に描写した著作を多数書き残しているが、紀行文の執筆でも、訪ねた土地の記載には同様の意図が感じられる。

それを裏付けるように、宿泊した各地の宿場だけではなく通過した街道沿いの地名、乗った渡し舟、越えた峠といった旅程を細かく記している(表2)。更に面白く思われたのは、立山山中は勿論、各地で道中の湧き水の在り処を頻繁に記録している点である⁽¹¹⁾。政香がこれを旅程に記すべき重要な情報と考えていたのであれば、各地で訪れた神社仏閣の謂われを細かく書いていることと併せ、今後旅を企図する人々を読者に想定した、旅行案内に類する意味も持たせていたのかもしれない。

その一方で、旅先で出会った人々、またその場所で感じたことなど、人についての記録や個人的な感想はほとんど見られない。見聞の記録を重視し、本文中で個人的な感想を加えることは控たようである。言ってみれば、随筆的(エッセイ)というより記録文学(ルポルタージュ)の感がある。但し、長い旅の中での個人的な感慨が一切省かれている訳ではなく、その時その場で感じた感想や感動は、幾つもの即興の和歌や漢詩にして頻繁に挿入し、表現している。

2-3 甲本・乙本に書かれた記載内容の差異

甲本と乙本を比べてみると、乙本では詩歌の語句の添削の他、新たな創作や削除が見られる。総じて甲本は行程記録が主であるのに対して、乙本は旅を通して関心の高かった部分に、新たな補足や詩歌を加えて情報量を増した内容になっている。

3. 文政5年の旅について

「本史料」の基になった文政5年の旅について、旅の動機を考察し全体の行程を整理する。

3-1 旅の動機

巻頭の序文は大きく3つの内容で構成されており、そこから政香の霊山への思いや旅を思い立った理由の一端が読み取れる。

この旅では各所で幾つも神社仏閣に参拝しているが、政香は日本の霊山に憧れを持ち、殊に富士山・立山・白山の三霊山には強く思いを寄せていたことが窺える。(以下、下線はすべて筆者)

①皇国大嶽之中富士立峯白山歴世遼邈而尤峻秀也。然上古未曾聽跋涉者、②漸至大宝年間而得役居土攀富頂佐伯有頼登立峯泰澄窮白嶺矣。(甲本 序)

ここでは、下線部①で富士山、立山(立峯)、白山の美しさ雄大さを称賛し、下線部②では、それぞれの

山を開いたと伝承する役行者（役居士）、佐伯有頼、泰澄の登山を挙げている。何れも7世紀末から8世紀初頭のことと伝えられるもので、古くから宗教的な開山を経た霊山へ登ることへの特別な意味を強調しているようである。

そして、その後は長く霊山への登拝が行われなかったことを遺憾としている。

皇国之靈嶽道尚茅塞而歴数千歳矣、可謂遺憾之甚歟（甲本 序）

江戸時代になると社会の安定から、修験者だけではなく山好きの文人墨客も富士山、立山、白山への登拝を憧憬するようになった。その文脈の中で、池大雅たち3人が三霊山へ登拝したことを特記して意識している。

③近世洛池大雅甲高孺皮勢韓大年有三岳之遊（甲本 序）

政香は、この旅の4年前文政元年（1818）に富士山へ登っており、この年の旅の主目的は立山と白山の禪定登山であったが、旅の動機と池大雅の「三岳之遊」は無関係ではないように思われる。

池大雅は寛延元年（1748）7月に富士山へ登り、翌寛延2年（1749）5月には高芙蓉（孺皮）とともに白山と立山に登る。これにより三霊山すべてに登拝したことで、大雅は「三岳道者」と称した。更に宝暦10年（1760）には高芙蓉と韓大年の3人で7月3・4日に白山、7月13日は立山へ登り、その後戸隠、浅間山を経て8月22日には富士山に登っている。苦行とも思える2か月半の非常にハードな日程で三霊山を一気に登拝した後、同行した高芙蓉と韓大年もまた「三岳道者」と称した⁽¹²⁾。下線部③は大雅たち3人の宝暦10年の旅を指すものだが、乙本ではそれに続けて加筆（下記ゴチック部分）があり、そこからは大雅たちが三禪定を成し遂げ「三岳道者」と称したことを知って、政香は心が穏やかではなかったニュアンスが窺われる。

近世洛池大雅甲高孺皮勢韓大年有三岳之遊、因号三岳道者唯竊惜其跡、④雖奇其文未題亦未聞紀行及吟咏流播於無者也（中略）従未有遠游之癖、⑤粗窮東西之諸勝、未至北陸居諸荏苒遍知命之年矣。（乙本 序）

この大雅たちの三禪定が、この時の政香の旅立ちの動機に影響を与えていたと見てよいだろう。ただ政香は、大雅がそのときの登山を『三岳紀行』に書いていることは知らなかったようである。下線部④を見ると、政香は大雅の旅を念頭に置きつつ、霊山を巡りその記録をきちんと残す紀行文を執筆する意思を強くしたものと推察される。

政香が住む三河や尾張は三禪定の習俗が集中する地域であり、「本史料」の行程を見れば、足を延ばせば同時に富士登山も可能だったと思われる。しかし序文からは三禪定の習俗に見られる根強い苦行性への共感は見られない⁽¹³⁾。その上で下線部⑤を見れば、このときは三霊山の巡詣への思い入れよりも、各地の寺社を参拝し名勝を巡りつつ北陸を訪れることが主目的であり、しかも富士への登拝は既に終えていたことから、敢えて一度に三霊山を巡拝する習俗には拘りを持たなかったのかもしれない。

3-2 行程

行程を整理すると、訪れた土地や拝観した神社仏閣が丁寧に書かれていることが分かる。ここからは、各地での見聞記録は客観的に、また訪れた寺社で知った謂れや土地の習俗は、精力的に記録していると感じられる。

表2は「本史料」に見える主だった地名と訪れた見学先、参拝した寺社などを挙げたものである。ただ訪れただけでなく、神職として潔斎する意識もあったからか、矢作川（6月9日）、白山の川や滝（6月13・14日）、加えて立山では称名川（6月20日）でも身を清めている。垢離は禪定途中の習俗としては珍しくなかったのかもしれないが、立山での垢離を記録した「立山紀行文」は、「本史料」の他に後述する3

件が管見される。

表2 『北游藁』に記された旅の行程

<p>凡例 〈 〉は主な見物先、【 】は訪れた主な神社仏閣等。ゴシック部分は立山の旅程で、小稿での翻刻、分析した部分で、次章以下に詳述する。()は行動や場所などの補足。名称は現在の地名になおした。</p> <p>6月9日 寺津村発—中畑(矢作川で禊)—刈谷—〈桶狭間〉—松—鳴海【成海神社】—〈戦人塚〉—宮泊 10日 宮—熱田【熱田社・境内末社】—【高座結御子神社】—【大龍寺五百羅漢堂】—小牧—犬山泊 11日 犬山—【寂光院】—栗須—【新長谷寺】—立花—須原泊 12日 須原—千虎—郡上八幡—剣泊 13日 剣—白鳥—【長瀧寺】—〈阿弥陀ヶ瀧〉—石徹白—【白山中居神社(神前の川で垢離)】—石徹白(社人宿坊)泊 14日 石徹白—【白山参詣(泰澄大師像拝観・市ノ瀬の滝で垢離)】—白山室堂泊 15日 白山室堂—高天原—【御前峯奥宮】—市ノ瀬泊 16日 市ノ瀬—牛首—木滑関所—木滑—吉野泊 17日 吉野—鶴木—小柳村—額谷—金沢〈金沢城下〉—金沢泊 18日 金沢—津幡—【俱利伽羅不動寺】—【埴生護国八幡宮】—石動—高岡—小杉泊 19日 小杉—桜谷—〈五百羅漢〉—神通川舟橋—富山〈富山城下〉—大森—岩嶺寺—芦嶺寺(泉蔵坊)泊 20日 芦嶺寺—立山山中各所—室堂泊(参籠) 21日 室堂—立山山中各所—芦嶺寺(泉蔵坊)泊 22日 芦嶺寺—下田—森尻—滑川—魚津泊 23日 魚津—持光寺—三日市—【徳法寺(親鸞上人腰掛石・手植柿木)】—〈愛本(刎橋)〉—泊—市振泊 24日 市振—親不知・子不知—駒返—犬尻—風波—外波—青海—姫川—寺島—糸魚川—鬼伏—能生(船中) 25日 五智—高田—新井—関山—関川—野尻—柏原泊 26日 柏原—【戸隠大明神】—平出—吉—上野—丹波島—善光寺泊 27日 善光寺—【善光寺(朝開帳参拝)】—中御所—塩崎—〈姥捨山(冠着山)〉—猿ヶ馬場峠—麻績—青柳—法橋泊 28日 法橋—立峠—会田—刈谷沢—松本—塩尻—【小野神社・弥彦神社】—【祭林寺】—【諏訪神社】—南小野泊 29日 南小野—新町—伊那部【常圓寺】—飯島泊 晦日 飯島—七久保—座光寺—飯田—大沢—大野泊 7月朔日 大野—浪合【浪合神社】—月瀬—杣路峠—武節—蓮谷泊 2日 蓮谷—上垣内—足助—桑原【龍溪院】—【岩津天満宮】—【伊賀八幡宮】—岡崎泊 3日 岡崎—【六所神社(遙拜)】—寺津村帰着</p>

4. 文政5年の旅で訪れた立山山中の各所

「本史料」に書かれた立山禅定登山の行程に沿って、通過した場所や山中の様子、そこにまつわる説話などから特徴的な部分を引用し、他の「立山紀行文」等での記述と照らすことで「本史料」の資料的な特徴を浮かび上がらせ、具体的な山中の実態を整理する。

4-1 立山での具体的な行程と行動

(1) 1日目(6月19日)

—富山城下—大森—岩嶺寺—芦嶺寺—【嬬堂】—泉蔵坊泊

①大森

政香は小杉から富山城下へ入り舟橋を渡り昼食を済ませ、中市から流杉方面を通り、大場から西大森へ常願寺川を渡り岩嶺寺へ向かったと見られる。

その途中で見つけた「渡過道」と彫られた大きな碑が倒れていたのに関心を持っているが、この碑の存在については他の「立山紀行文」では管見しない。いつかの時点で水害などにより転倒していたのかもしれない

い。道標とも思われるが高さが八尺は大き過ぎるようでもある。

田中二自然石の大碑八尺余あり、田中倒れ伏せり。渡過道の三字斗りみゆ、何人の碑なるや知難し(甲本)

②岩嶽寺

岩倉寺では立山権現を参拝しており、境内地にあった堂舎の名称を詳細に記録している。

岩倉村立山権現の別当にして坊舎二十四坊あり、本坊を岩倉寺という。神明 天神 八幡 若宮 岩崎 新宮七社あり。(甲本)

甲本ではこの記述箇所の上部余白に「岩嶽寺／社領五十石／別当天台宗／妻帯」と書き込んでいるが、この部分は乙本では本文中に加筆されている。

続けて、岩嶽寺に関わる長文の開山縁起を書いている。この部分は、岩嶽寺で刷られた登山案内図(「越中国立山禪定名所附図別当岩嶽寺」。以下、山絵図)の記載を、ほぼそのまま引き写したものである。これ以降の記述でも禪定道に沿った山中の地名や堂舎の名称、堂舎の大きさや山中の距離などは大部分が山絵図の禪定道案内と一致、または類似することから、政香がここで山絵図を入手し途中や帰郷後にも目を通していたことは明らかである。

この旅の途中では熱田や白山、諏訪、善光寺などでも参拝した寺社の由来や縁起に相当する長文の記述部分が見られるので、立山以外でも同様に地元の史料からの引用があるものと推定される。

立山大権現ハ伊弉諾伊弉冉の霊体一切男女の元神にて此峯を城都として上下人の父母なる故に邪正ともに利益す、謂る越の大宮なり。四十式代聖皇文武神託によつて①佐伯有頼公を越の領主に下し玉ふ。二神わさと鷹に化現して②嫡子有頼を峯中に引入す。則玉殿岩屋の内にして先代祖々の法を受持し頓悟す。依て慈興と称し中興の開山なり、大宝元年に別当岩嶽寺を立、又四月八日に権現告て曰灵天ニハ峯に住し龍花会を待、天上にハ此処に住してそつ寂光を守る。是垂後の地なり。諸堂精舎を造立し、毎年此日祭礼修行なすへしと云云。今ニ七社の神輿をすへ樂者を揃へ児の舞法華問答あり。此山の地主ハ手力雄の尊なり。天平七年行基菩薩此峯によちのほり諸嶽を拜し、岩倉寺五智の尊像を造立し講堂に安置し玉ふ。(甲本)

下線部①に「佐伯有頼公」とあるのは、下線部②「嫡子有頼」と対照させたとき、開山説話の内容から考えて「佐伯有若」と書くべき点であろう。しかし、ここでの記載は政香の錯誤だったとも言い切れない。山絵図には、芦嶽寺との争論の反映や制作された時代の違いなどで、刷られた縁起の内容に微妙な移動を含む複数の版が存在するからである。そこで立山博物館と富山県立図書館が所蔵する山絵図10点の縁起部分を校勘してみると、当該部分の記載にはそれぞれ[有若・有頼]、[有頼・有頼]、[有 公・有頼]のバリエーションが存在する⁽¹⁴⁾。後述する芦嶽寺の嬬堂についての記載と併せて、政香が入手していたのは[有頼・有頼]とある版で、そこから引き写していた可能性が高い。

③芦嶽寺

芦嶽寺では泉蔵坊に宿泊している。国別の配札先では三河を檀那場としていたのは善道坊だが、嘉永3年(1850)分の善道坊の檀那帳では、配札に訪れた村146ヶ村に政香の住む寺津村の名前はない。三河や駿河は立山信仰が盛んな地域でもあり、善道坊ではなく泉蔵坊と関係を持っていた可能性も考えられる⁽¹⁵⁾。

また下線部の「蚊帳を止む」といった蚊帳の記述は政香のこだわりのようで、「本史料」では立山に限らず多くの宿泊地で書かれている習慣的な表現である。

坂を越へて芦倉村ニ到り泉蔵坊ニ舎る、蚊帳を止む (甲本)

④布橋・媯堂

その日のうちに媯堂を参拝している。『三の山巡』には「立山へ参詣のもの先ヅ此媯堂へ詣、此所にて色々教化いたし候事也」とあるので、政香も禅定登山の前には媯堂で媯尊の由来や信仰上の説話などを聞いていたことと思われる。政香はそこで媯尊について記紀との関連に興味を覚えたようで、「本史料」には他の「立山紀行文」では管見しない部分が含まれる。

媯堂前の橋を浮橋という。橋の数板の数欄干ニ到る迄皆諸仏菩薩の員数法華經の文字ニ合せて架すという。橋本に拾抱余の杉四五本あり。①媯堂中尊ハ沙土煮尊、大戸辺尊、惶根尊なり、此山へ天降り玉ふという。其外六十六ヶ国の媯御前の像あり、②或説に有頼公の母上像なりともいう。大宝三年八月十二日忌日なる故毎年秋の彼岸の中の日^に供養あり。（甲本・乙本も同意）

媯堂内の媯尊は本尊が3体、その他に日本66州にあわせて66体の全部で69体ということ、他の「立山紀行文」で数を挙げて記録しているものは管見しない。「本史料」では数字を挙げている他、下線部①で本尊3体の由来を、立山へ天下った沙土煮尊、大戸辺尊、惶根尊としていること、また下線部②では佐伯有頼公の母という説を併記して媯尊の来歴について複数の解釈を記している点は興味深い。

「本史料」で媯尊の由来とする沙土煮尊、大戸辺尊、惶根尊は、ともに『古事記』や『日本書紀』に記される日本神話では、天地開闢の後に誕生した神々の世代「神世七代」の女神たちである。沙土煮尊はその第三代で、後世では土壌や農耕の神としても信仰されることがあるという。また大戸辺尊は第五代で、大地が完全に固まった状態を神格化した存在、そして惶根尊は第六代で、世界の秩序や人間の完成された姿を神格化した存在とされる。

芦峯寺での媯尊の来歴は、時代によって柔軟に解釈を加えながら変遷している。古くは延宝3年（1675）の「加越能社寺来歴」では「御姥本尊之内一尊ハ文武天皇之御収影又ハ天津彦火瓊瓊杵ノ御尊供あがめ奉り、一尊ハ伊弉諾命、一尊ハ伊弉冉之命、以上三尊おかりに御姥与名付奉り惣して六拾六尊御座候」としていた。その後、記紀に現れる女神沙土煮尊、大戸辺尊、惶根尊が持つそれぞれの神格とのつながりは、本地仏と習合させ縁起に記載して定着させると共に、天地開闢や瓊瓊杵命降臨の神話などをモチーフにして媯尊を独特に神格化させていったものようである。文化3年（1806）に加賀藩寺社奉行へ提出した「立山芦峯寺由来帳」では「立山中宮芦峯寺媯之三尊ト申者、一尊者、娑栴根命、一尊ハ大戸間辺命、亦一尊者、堅惶根尊、則、天神七代之御神ニ而」、また文化13年（1816）の「立山略縁起」では「立山御媯三尊ハ、右の御手に五穀を納、左之御手にハ麻之種子を執持し、則、越中立山芦峯に天降たもう」ともある。

そして立山一山会文書「芦峯中宮寺媯尊大縁起」⁽¹⁶⁾（文化14年〈1817〉）を見ると、3柱の女神たちは仏と習合し「左之御手ニ納五穀、右手者麻之種子執持、刀利之雲分来、（中略）天神七代尊、一体分身、以媯形現三体之尊像、先一尊者不動明王、惶根命。一尊者金剛界、大日之垂迹、大戸間辺命。亦一尊者胎蔵界之大日、娑栴命、都合三仏」となる。但し、泉蔵坊に伝わる異本「芦峯中宮御媯尊縁起」⁽¹⁷⁾（天保2年〈1831〉）では、同じ部分は「左ノ御手ニ五穀ヲ納メ、右ノ御手ニ執ニ持シテ麻ノ種子ヲ、（中略）天神七代之命ト、此ノ所ニ一体分身シテ、而以テ媯之形ヲ現ス三尊之体ヲ、沙土煮尊・大戸辺尊・惶根尊是也」とあり、仏と習合された内容は見えない。国学を学び記紀に造詣が深い政香が、媯堂を参拝して泉蔵坊へ宿泊したことに鑑みると、習合せずに媯尊と日本神話の神々と結び付けている泉蔵坊の異本の内容に基づく説話に興味を持ち、それを特記したと想像される。

そして、下線部②は、並行して芦峯寺に伝わる「有頼（慈興上人）が母を偲んで彫った像」という伝承を異説として同時に聞いていたか⁽¹⁸⁾、或いは、岩峯寺で入手した山絵図に書かれたものを見てその話を知ったものと思われる。岩峯寺の山絵図の中に「阿しくら媯堂ハ佐伯有頼公の母の像大宝三年八月十二日忌日なるゆへまいねんあきの彼岸の中日に供養をす」という文言の入った版の山絵図⁽¹⁹⁾も存在しているので、記述がもし山絵図に基づくものであったならば、政香が入手していた山絵図の版は限定されてくるだろう。

(2) 2日目(6月20日)

芦峯寺(泉蔵坊)－嬬堂－藤橋(称名川で垢離)－小金坂－千寿ヶ原【千手堂】－熊野権現－材木坂－餓鬼が首－鷲が窟－美女杉－ぶな坂－だんさい坂－【不断光仏】－禿杉－伏拝(称名滝)－かりやす坂－桑谷－【桑さき観音堂】－【不動堂】－姥石－上野－二の谷・小鎖－一の谷・大鎖－獅子が鼻窟－ささ峠－畜生原－鏡石－小杉谷下市場・上市場－地獄谷追分－室堂平(室堂)－地獄谷(百三十六地獄廻り)－室堂泊(参籠)。

禪定者は、仲語に案内され禪定道を通って立山へ登るが、当然各々の興味関心が違うため「立山紀行文」に書かれる地名の粗密やその表記の揺れ、また、各所にまつわる諸説話、堂舎や石仏の有無などの記述は一樣ではない。しかし、その理由は当事者による印象や記述の選択だけではなく、嘗て有った堂舎が登った時点では既に無くなっていたなど環境の変化による理由の他、道中の案内についての仲語の説明にも理由もあったように思われる。

道すがら仲語たちが語る立山の様々な伝承が必ずしも一樣ではなかったのは、定本のテキストが存在しないので当然であろう。その他にも登拝当日の山中の状況や悪天候などのコンディションもまた、仲語が語る内容を左右したに違いない。そして内容などは先輩者からの口伝であり、実際には語る仲語の数だけ内容や表記のバリエーションがあったと想像される。岩峯寺で作られた山絵図には地名と極簡略な伝承が載せられてはいるが、近代以降に活字化されて拡散した内容は、採話された幕末時点に定着していたものであり、そこに到るまでは、細部で任意の解釈が加えられて変化していった余地は多い。言い換えれば、立山禪定道の説話は場所に付いて存在すると同時に「人」に付いて伝承している訳である。

表記の解釈について具体例を挙げれば、「しょうみょうだき」は現在では「称名滝」と漢字を当てるのが一般的だが、「立山紀行文」や山絵図では表3のような多様な揺れが見える。慣例的に、名称と「滝」の間に「の」や「が」など格助詞を挟む慣習の有無は措くとして、聞いた者は「ショーミョー」という音に様々な字を当てて理解していたからであろう。仲語が伏し拝みで滝の名の由来を「落ちる滝の音が、南無阿弥陀仏の称名を唱える声に聞こえた」という説話で語っていたとすれば、それを聞いた者はその発音から「称名」の語を理解していたり、或いは仏教的な雰囲気から勝妙や正明などの字をイメージしたりして揺れが生じていくのであろう。

ただ、「称名」と書き「ショーミョー」と読んだのであれば、仮名遣いの原則に従うと「しょうみやう」と表記すべきである。この点で、仮名遣いについては芦峯寺系と岩峯寺系の山絵図ではそれぞれ表記が異なっていた点を指摘しておく。芦峯寺では「せうめう」と書くので、仮に「ショー」に漢字を当てるとすれば「せう」には照や詔などが、一方岩峯寺では「しやうめう」と書いているので、「しやう」には正や声、唱、庄などを当てていた可能性が考えられる。そして「ミョー」は「めう」と共通するが、漢字にすれば名や明ではなく、妙が当てられて然るべきであろう⁽²⁰⁾。

現存する版を管見した限り、各々で改版した際にも仮名表記は変更されず、ほぼ踏襲されている。この違いは、単に原則に構わず当てたものとも思われるが、それぞれの村が別々に滝の名称を解釈していたのか、或いは両村の宗教的利権に関連して敢えて変えていたのだとすれば、その背景には興味を持たれる。

①藤橋(称名川で垢離)

「称名滝」の表記に揺れが多いのに対して、「藤橋」の表記では管見したほとんどが漢字で書かれ、揺れがない。遠景を遙拝するしかない称名滝に対して、実際に藤蔓で架けた橋を渡りはっきりとモノと名称が一致して印象付けられることも関係しているように思われる。

藤橋を渡った後、政香は立山権現への参拝を前に称名川で身を清めたことを甲本に書いている。

藤橋を渡り称名川にて垢離す(甲本。乙本では削除)

前述のように、政香はこの旅の途中では何回も身を清める敬虔な態度が窺えるが、乙本では垢離を取った記述は削除している。

この他にも『和漢三才図会』、『立山道名所』⁽²¹⁾に称名川で垢離を取ることに触れた個所がある。

また、十返舎一九も立山を訪れているが、その時の見聞をモチーフに書いた『越中立山／参詣紀行・方言修行金草鞋』（文政11年〈1828〉刊）にも垢離を取ることに触れた箇所がある⁽²²⁾。ストーリーは戯作の形をとっているが、立山山中の地誌はかなり正確に描写してある。

『立山道名所』の筆者自身や十返舎一九が実際にここで垢離を取ったか否かは不明だが、ここが禅定途中で身を清める場所として認識されていたことは分かる。

渡_ス藤橋_ヲ行人取_ル垢離_ヲ処（『和漢三才図会』）

此河照名川と云。爰ニテこりお（垢離を）取所也（『立山道名所』）

それよりゆ川（湯川）、しやうめう川といふ、とうざんの人こりを（登山の人垢離を）とる所也（『越中立山／参詣紀行・方言修行金草鞋』）

②千寿ヶ原から室堂まで

「本史料」では、藤橋を渡った後の禅定道に沿って山中の地名や堂舎の名称、また大きさや山中の距離などを細かく記している。これも岩峯寺で刷られた山絵図の禅定道案内を基にして実際の見聞も加え、特に興味があった場所には内容を補足したものになっている。

こかね坂、せんじゆ原、せんじゆ堂あり。是より美女杉迄一里、①此間に熊野権現の社あり。

②昔材木拵へ所へ女人来る故材木石になる、以立積ミ横積ミの形なり、是を材木坂という。かきか首、又鷲の岩屋あり。③若狭国長良の尼の下女美女杉となる。㊦七度浮橋の用木となりて成仏せんと誓て伐迄ハ芽を生して大木となり、七度目に枯たり。今は切株はかり也。此処水なし。ふな坂まで一里此間に④しかりはりという穴あり。右の尼かふるをしかりなから小便するに、ならくまで穴通りしとなり。たんさいのみさかと云坂あり。ふたんくはう仏ちんざ、かふる㊧かふる杉となる、廻り八尺斗り高さ三間四方にたれてしなり、廻り三十間はかりあり。ふな坂よりくわ谷へ一里此間左ニ称名滝を拜、ふしおかみという。かりやす坂、くわ谷此所に室あり。清水あり、昼飯を喫す。不動堂まで壱里此間にくはさき観音堂あり。不動堂ハ式間に三間なり。堂より右十間斗り往て水あり。追分迄一里此間に湯道あり、松尾越という。阿弥陀原薬師如来なり。右ハ姨がふところ道、⑤右の尼、石となる女人の形あり。左ハ一の谷道のほりハ此道を往き下向は姨かふところを下る也。上野迄一里此間に二の谷小鎖、一の谷大鎖あり。三条小鍛治宗近が作という。獅子か鼻の岩屋弘法大師こま修行の灰あり。さゝ峠坂の左の方畜生原、此処にふしきの牛馬を見る事多し、面ハ人間にして四足あり。⑥下市場迄一里此間に鏡石あり。右尼姨かふところにて権現に鏡を上るに石となる、式間四方あり。小杉谷下市場上市場あり。聖霊市をなす故に市場という。左は大日か嶽右は国見か嶽此間に横渡りという処、雪の上五丁はかり往く、かんせきの谷なり。不信心の者畜生出て通り難し。地獄谷の追分あり。右は室堂道なり。左は地獄道高塔婆という処に塔婆あり。右の山ハ大天狗小天狗の御在所なり。室堂式軒、⑦四間二五間余なり。（甲本・乙本とも、挙げられている地名は同じ）

○熊野権現

熊王権現の社（熊王権現堂）は、がきが首という場所にあり、昭和5年（1930）の国土基本図に記された尾根道とは別の南斜面をつづら折りに折れに登る道で、現在地とは違い尾根にあったようだ⁽²³⁾という。政香が見た状況は、まだ旧道の様子が残る明治34年（1901）に浅地倫が登った記録にある「岩窟の祠のあ

る所に出づ窟内熊王権現を祀る」⁽²⁴⁾とさほど変わらなかったのではないかと思われる。政香はここを下線部①のように「熊野権現の社」と書いているが、管見する「立山紀行文」では「熊尾権現」（『道中日記』⁽²⁵⁾）、「熊負権現」（『三の山巡』）と書かれたものなども見られる他、山絵図には「くまをちんざ（鎮座）」とある。これらの表記から総合すると、衆徒や仲語はこれを「クマオー」と呼び、通常は「熊尾（くまを）」と表記していたのではないかと思われる。もし「熊王」とするなら「くまわう」と書かれる筈だからである。

ここには修験者の修行、また有頼開山説話に関係した説話が伝えられる。要約すると、「慈興上人が立山を開くためにこの地に差しかかると、第六天魔王が眷属を連れて現れ、難題を持ちかけた。しかしどこから小山大明神や熊尾権現の使者が熊になって現れ、魔王は降伏して姿を消した。そこで熊尾権現の使者になった熊をこの地に祀った」⁽²⁶⁾というものである。

この説話からは、正式に熊野神を勧請したものではなく、修験・熊野信仰・開山縁起の熊説話などが基になって立山で語り継がれた地元神ではないかと推察される。ただ、仲語によっては案内の際に修験や熊野信仰との関連を強く語った場合もあったのかもしれない。「立山紀行文」に見える表記の揺れは、仲語の話を聞いていた登拝者が「くま・の」「くま・お」「くまおう」などと耳で聞いたまま記載し、そこに『和漢三才図会』などにある「熊野権現」の記述が干渉していたり、熊野信仰との結びつきをイメージしたりして理解していた場合もあったと思われる。

○材木石・材木坂

材木坂は、その場所を通ればいつでもはっきりと対象となるモノが見えることや、山中各所にある女人禁制の伝承と親和性が高いため、印象に残りやすい場所であろう。「本史料」下線部②の記述は山絵図から引き写されたものだが、女人の正体も、神罰を受けた理由も特定されていない。しかし『三の山巡』では「何とか云尼僧登り来て御山を穢せしゆへ一夜の内に石になりしといふ」とあり、美女杉や禿杉、姥石や鏡石の神罰とつながりを持たせている。

○美女杉

女人結界を犯した尼僧が杉に変えられたとするのは、岩嶺寺に伝えられた説話である。『和漢三才図会』では既に「若狭小浜ノ女僧名_ニ止宇呂_ノ尼_ト者」とあるのが原型と思われるが、下線部③の記述とその引用元になった山絵図では「若狭国長良の尼の下女」とある。『和漢三才図会』の記述が岩嶺寺の衆徒に取材して記載された⁽²⁷⁾と見られるものなので、岩嶺寺では若狭の止宇呂尼と長良の尼の名は揺れながら並行して語られていた時期があったと考えられる。

それに対して、芦嶺寺では開山堂に慈興上人像を祀り開山廟を置くからか、岩嶺寺と異なり姥石や美女杉にも開山説話と有頼（慈興上人）の生涯を絡めた説話が多く伝承する。

芦嶺寺では立山信仰のアイデンティティとしての佐伯有頼にまつわる内容として、また岩嶺寺では女人禁制が色濃い全く異なる内容の美女杉説話を並行して伝承してきたが、明治以降活字になった時期と採話された経緯から、現在では女人結界を犯し杉に変えられた尼僧の話が広く流布している。

但し、芦嶺寺で伝承する佐伯有頼にまつわる説話の中でも複数のバリエーションが見られる。

例えば、佐伯幸長氏（芦嶺寺大仙坊後裔）が自著⁽²⁸⁾の中で紹介している説話である。以下に要約する。

「美女杉説話 1」

有頼には美しい許嫁の姫がいたが、立山で修行して何年も帰らなかったため、姫は「有頼の側で困苦を共にしたい」と思い、乳母とともに立山へ登った。しかし急峻な山道で動けなくなり、途中にあった行者の臥小屋で有頼の下山を待つことにした。乳母は、その姫の思いを有頼に伝えようと、女性の魂と言われる「鏡」を持って一人で山を登ったが、弥陀ヶ原から畜生が原に至る谷間で動けなくなった。乳母はその場で息絶えて石になってしまうが、その間に「有頼に姫の心を伝えよう」と、持ってきた鏡を

投げるとそれが鏡石となった。やがて有頼は山を下り行者の臥小屋で待つ姫と会うが、姫を哀れと思いつつも愛着の心を断ち切り、下山させた。そこで姫は山を下る途中で一本の杉の若木に向かって有頼との再会の日を祈った。杉は健やかに育ち、後にこの杉を美女杉、その一帯の高原を美女平と呼んだ。またこの姫を杉姫と呼んだ。

「美女杉説話1」は、立山開山にまつわる、女人禁制とは関係しない杉姫の説話である。佐伯幸長氏はこの話は父から口伝で聞いたとしている。

これとは別に、佐伯立光氏（芦峯寺泉蔵坊後裔）が自著⁽²⁹⁾で紹介する説話を以下に引用する。

「美女杉説話2」

昔、有頼の継母藤波という人が、美人の侍女を引き連れてこの地へ参りますと、a 侍女の一人が慢心を起し、かつて材木坂で山住の神の怒りに触れて材木を突崩されたが自分らの身には少しの災もなかった。この山は、女人禁制の山と称するけれども何事に祟あらんと思うに、忽ち一天かき曇り震動雷動して侍女の五体は立ちすくみ、やがて総身が焰となって一步も進むことができなくなりました。その時はじめて侍女は仏心を起し、死期に近づいていうには、b 私は一本の杉となり、麓天の浮橋に七度まで掛変って成仏すると遺言し、姿が消えました。c のち天の浮橋が七度の掛け変えを終えたのを機会に、再びその地を訪ねてみますと、不思議やd 侍女の姿が消えた場所には、一本の杉の木が生へ繁(マツ)っておりまして。美女の侍女が一本の杉の木に化したところから、美女杉と名づけられている。

「美女杉説話2」には2つの特徴が見える。1つは、下線部aのように「材木石」に関する説話と連動するような関連を持たせ、材木が石に化す原因を作った別の侍女を設定している⁽³⁰⁾ことである。美女杉になった侍女は、材木石の原因を作った別の侍女には直接神罰が下らなかったことを知っていたので、慢心して故意に女人結界を犯すという展開になっている。

もう1つは下線部b、cで天の浮橋（布橋）の掛け替えが美女杉説話のプロットに加えられていることである。

「本史料」の波線部Aにある「浮橋の用木」とした話は山絵図には無いので、政香が仲語や芦峯寺の衆徒から聞かされた内容が元になっていると思われる部分である。ここからは七生には輪廻思想が、また天の浮橋（布橋）は芦峯寺では重要な宗教施設であることから、その用木となる功德で成仏できるというような考え方があったこと、そしてそれが七度目で成仏したというストーリーで構成されていることが分かる。しかし細部を見ると、下線部dでは成仏した後に「美女杉」となって繁り続けたのに対して、「本史料」の波線部Aでは「七度目に枯れたり。今は切株はかり也」と変化している。つまり政香が見たのは既に枯れた後の株だった訳だが、これは美女杉が枯れてしまった後の切株に対して、あたかも成仏したから身体（幹）は枯れて姿が消滅してしまったと言うかのような、辻褄を合わせるために手を加えたバリエーションもあったであろう。

美女杉はいつの時点で枯れたのか明確には分からないが、枯れた後もずっとその付近で切り株を指して説話が語られていたものと思われる。「立山紀行文」から時系列に美女杉枯死の記述を拾うと、『三岳紀行』（宝暦10年）「美女杉ノかふ（株）有」、『立山ノ記』（文化9年〈1812〉）「美女杉、今已ニ稿死ス」、『本史料』（文政5年）は「今は切株はかり也」。その後は、『三の山巡』（文政6年）に「美女杉 今は枯れしよし」、『立山道の記』⁽³¹⁾（天保12年〈1841〉）「美女杉ト云、今ハ枯テナシ」、『立山遊記』（天保15年〈1844〉）「美女杉ノ大木ノ根アリ。二三十年前に枯レタリ。今ハ根朽チタリ」と続く。管見した限りでは宝暦10年が最も古い記録で、18世紀半ば頃までには既にモノとして美女杉はなかったと推察される。

また、美女杉の枯死に関連して、「本史料」の波線部Aに「伐迄ハ芽を生して大木となり」とある部分との関連が窺われる立山曼荼羅がある。「立山曼荼羅立山博物館日本」では、美女杉は他の絵とは異なり「びじよ

う杉」と書かれた左側に、折れた切株の右脇から枝葉を繁らせる杉を描いている（写真1）。これは、杉の木に女性の顔を付けて描かれる「記号としての美女杉」の作画ではなく、切株になっていた当時の杉を実際に見て描いていたものではないか、とも考えられている⁽³²⁾。

○しかりばり

しかりばりの説話は、比較的多くの「立山紀行文」に書かれているが、小便をしたのが尼であったり、禿の失禁であったり、口伝の中でその理由が揺れる⁽³³⁾。山中に存在する底なしとも思われる不可思議な大穴はイメージーションを刺激するものであったのだろう。しかし現在の場所は不明である。山中の考古学的調査では、現在は有料道路の下になってしまった風穴と見られる、としている⁽³⁴⁾。

○姥石・鏡石

「本史料の」下線部⑤⑥に書かれる姥石と鏡石にも、芦峯寺と岩峯寺では異なる説話が並行して伝承している。広く知られる女人禁制の中で語られた姥石の説話は『和漢三才図会』にも見られる。一方芦峯寺に伝承するものは、前述の「美女杉説話1」に見える有頼の許嫁の乳母が石に化すもので、女人禁制とは無関係である。鏡石は女性が持っていた鏡が石化した点では共通するが、芦峯寺の説話では、やはり女人禁制には結び付かない。

このように、同じ語を両村が別の意味で解釈し、異なる説話を伝承している事例は、ここに限らず佐伯有頼の開山説話の中にも見られる⁽³⁵⁾。ここでは、「うば」を芦峯寺では「乳母」に、岩峯寺では「老婆」と解釈して別々に創作されたものと考えられる。岩峯寺では、大峰山の都藍尼、高野山の石童丸の説話など各地の説話との類似性⁽³⁶⁾から見て、「老婆」に、山と女人禁制の範疇で「とうろ」の名から人物像を創作し、美女杉や禿杉と同様の一連のストーリーとして語られてきたのではないかとと思われる。

○室堂

「本史料」の下線部⑦は山絵図からの引き写しだが、政香が式軒と書いているのは実際に泊った体験に基づく。山絵図には3棟と書かれ立山曼荼羅にも3棟が描かれているものはあるが、現存は2棟である。『和漢三才図会』には「室堂 四間五間三棟」とあるが、歴史的には棟ごとに何度か建て替えながら段階的に3棟となり、文政頃には1棟を廃止して2棟になったという⁽³⁷⁾。政香が登ったときには2棟で運用されていたということである。そして、登山人数が減る要素はないのに2棟に減ったことと、天保期の「立山紀行文」には、室堂の環境が劣悪であった記述が集中して見られる⁽³⁸⁾ことは、無関係ではないだろう。

○地獄谷（百三十六地獄廻り）

禪定登山では翌日早朝に御本社へ参拝するので、着いた日は地獄廻りの後、室堂に宿泊する。

地獄谷の光景やみくりが池の光景に地獄廻りで見聞した感想を添えている「立山紀行文」は多いが、「本史料」では個人的な感想は述べられていない。賽の河原からみくりが池、血の池を描写しそれを地獄廻りの最初と最後としているが、その他には具体的な地獄の描写もない。

地獄廻り最初さいの河原八寒地獄は大池なり。雪解の水漕り落つ、水色藍の如し。夫百三十六地獄を廻り終二血の池あり。女人成仏の為に血盆経を池中に納む。廻り終りて室堂二歸り此夕室堂に籠る。（甲本）

地獄に関して乙本では、これに続けて『婆沙論』を引用した補足を加筆している。

婆沙論二南瞻部州下過五百由旬、乃有其獄有大有小大則八寒八熱小則一々大獄四門各有四、小獄共為十六小獄云云。八大地獄に各有十六別処共百三十六地獄也（乙本・加筆部分）。

この加筆は、甲本では上部余白にメモ書きされており、乙本で本文に入れている部分である。

下線部に「百三十六地獄を廻り」としているが、実際には立山山中でその全てを1つ1つ見て回る訳ではないので、政香は136の地獄があること自体に興味、或いは疑問を持ち、帰郷後に經典に当たって補足した部分のようである。

(3) 3日目(6月21日)

室堂－〈六道、釣鐘堂〉－懺悔坂－【祓堂】－【御本社】－【玉殿の岩屋】－室堂平－藤橋(近迎え)－芦峯寺(泉蔵坊)泊

室堂に宿泊し、雄山頂上の御本社参拝を目指して夜明け前に出発している。

夜をこめて室堂を発し雪谷を横切二渡りわらしをはきかへ、①六道、つり鐘堂あり。懺悔坂、祓堂、夫より一の越、五の越までのぼりて御本社なり。伊弉諾伊弉冉の尊を祭る。②佐伯有頼公の鎌、大刀其外靈宝多し。又もとの道へ下向する右に玉殿の岩屋あり。奥行拾間余、③自然岩屋内に蓮花石金像の弥陀あり。左の脇に矢の穴あり、此矢ハ本社ニ納む。(甲本)

①山中の釣鐘堂

下線部①のように、政香は御本社に向けて室堂を出発した後に懺悔坂、祓堂付近で釣鐘堂を目にしている。明治以前、立山山中では到る所に梵鐘(喚鐘)(以下、総称して釣鐘)があり、立山信仰の唱導に重要な役割を果たしていたと考えられている⁽³⁹⁾。確かに、複数の立山曼荼羅や山絵図には立山山中に有ったとみられる釣鐘、屋根をつけて釣鐘の吊した堂舎が描かれている。『立山寄付券記』⁽⁴⁰⁾には、越中国内だけでなく金沢や江戸、京都からも釣鐘が寄進されたことが記され、その数は10口にもなる。しかし、それらが時代を通じて存在していたのか、或いは自然環境の中で破損していつの頃かに失われたり、逆に新たに寄進されたりして時代によって場所や数が異なっていた可能性もあり、いつ頃に、何処に幾つ存在していたのか詳細は明らかではない。しかも、近代になると廃仏毀釈が影響し明治以降にその大方は売却や破損により散逸した。加えて太平洋戦争時の金属回収に伴う供出でも失われ、嘗て立山に関係した釣鐘で現存するものは僅か4口である⁽⁴¹⁾。

これまで「立山紀行文」には山中の釣鐘を記録したものが少なかったので、ここで新たに「本史料」の記載を加えて、山中の釣鐘・釣鐘堂の位置などを整理しておきたい。

まず、立山曼荼羅や山絵図に描かれた釣鐘(中に釣鐘が見える、またはその存在が推定できる堂舎)を挙げてみる。

先学が指摘しているように、立山曼荼羅は距離感覚や縮尺がデフォルメされているので、岩峯寺や芦峯寺地内に描かれた鐘楼も含め山中の正確な場所や釣鐘の大きさまで読み取ることはできないが、本来なかった場所にわざわざ釣鐘を描き足して誇張するとは考えにくく、大凡の範囲で場所の推定はできる。また紀行文を記した登拝者も、途中で目にした釣鐘の全てを気かけながら登拝していた訳ではないとは言え、目ついた釣鐘をそのまま記録することはあっても、見ていない釣鐘を潤色して記録しているとは考えにくい。

政香が見た釣鐘は、下線部①に「六道、つり鐘堂、懺悔坂、祓堂」とあるものだが、この釣鐘の存在を記した紀行文はこれだけではない。

室戸(註:室堂)立、辰の上刻。又雪の上を下る。雪未だ一丈計りも有ると見ゆ⁽⁴²⁾。道に釣鐘堂、廻り石など諸所行場ある様なれど、雪にて一切知れず。(『九峯修行日記』)

立山曼荼羅や岩峯寺系の山絵図では、懺悔坂に沿って六道(六道両社)⁽⁴³⁾と祓堂の間、また頂上御本社下に描かれているものが多く見られる。しかし、それは岩峯寺系の山絵図にのみ描かれ、芦峯寺系のものに描

かれたものがないのは、両村間の争論や山中の堂舎管理権が関係していたためかもしれない。

管見できた、それらが描かれた山絵図、立山曼荼羅を挙げておく。

(ア) 懺悔坂付近と頂上御本社下の両方に描くもの

*【山絵図】 8枚。富山県立図書館蔵「越中国立山禪定名所附図立山別当」7枚（収蔵番号N31-3、N31-4、N31-5、N31-6、N31-7、N31-8、A03-2）、立山博物館蔵1枚（写真2）。

*【立山曼荼羅】 8本。「玉林坊本」、「中嶋家本」、「志鷹家本」、「立山博物館E本」（写真3）、「飯野家本」、「立山博物館G本」、「立山博物館B本」、「竹内家本」

(イ) 懺悔坂付近にのみ描くもの

*【立山曼荼羅】 8本。「泉蔵坊本」、「宝泉坊本」、「吉祥坊本」、「立山博物館D本」、「中道坊本」、「佐伯家本」、「立山博物館F本」※鐘そのものは描かれず建物のみ、「村上家本」

(ウ) 頂上御本社下にのみ描くもの

*【山絵図】 1枚。富山県立図書館蔵「越中国立山之図」（N31-14）

*【立山曼荼羅】 4本。「龍光寺本」、「専称寺本」、「立山博物館C本」、「称名庵本」

その他の場所にも釣鐘の記録が散見される。「立山紀行文」以外にも『方言修行 金草鞋』には、立山へ寄進する釣鐘を運ぶ様子を描いた挿絵が載せられているのは、立山への釣鐘寄進が少なくなかった傍証のように思われる⁽⁴⁴⁾。

○一の越～五の越に到る禪定道の釣鐘

浄土山方北へ下り一ノ腰へ上ル。鐘有。二ノコシ・三ノコシ・四ノコシ・五ノコシ、鐘ツキ堂有。（『越中道の記 立山』）

一の越から五の越までの各所に堂舎があり、そこに釣鐘が寄進されていたことは『立山寄附券記』にも記載がある。

○血の池の釣鐘

血の池の釣鐘は複数の「立山紀行文」に記載がある。しかし、立山曼荼羅では血の池に鐘、鐘撞堂を描いたものは管見しない。登拝者の釣鐘に対する意識は様々で、多くは一瞥しただけと思われるが、中には寄進の年代や寄進者の名前を見て、それを細かく書いているものもある。

立山血ノ池ぢごくへ越中ふなみ村荒川や清兵衛と申すものゝ妻血ノ池へをちさんけいの人を頼ミ内へ願ヲ立テ、右清兵衛方へあけ候鐘あり（『道中日記』）

この筆者は不詳だが、このように詳細な事情を記述したのは、血の池で聞いた話に強く興味を示していたからであろう。『立山寄附券記』には、天保11年に「一血ノ池地獄ノ鍤鐘壹ツ 下新川郡丹見村ノ大工清兵衛」という寄進の記載がある。『道中日記』はこの寄進と同じ天保11年に登拝した記事なので、真新しい鐘に注目して敢えて記載していた可能性もあろう。

しかしこれが最初に寄進された釣鐘ではなく、『立山遊記』（天保15年）には、

登山ノ者日々血盆経ノ紙を投ぐる故、今ハ池モ埋もレ甚だ浅シ。此处ニ高サ二尺斗リノ鐘二ツ有リ。寛政ノ銘字有リ（『立山遊記』）

とある。下線部のように、血の池では寛政年間に寄進された釣鐘と天保11年に寄進されたものの2口が同時に存在していたと推察される。

政香は文政5年に立山へ登り、血の池を訪れ「終ニ血の池あり。女人成仏の為に血盆経を池中に納む」と

書いているが、前述の寛政年間の銘がある釣鐘については触れていない。

更に血の池の釣鐘については、

坊間ヨリ血文経ヲ貫、此池へ流ス事ナリ。此所ニ六観音堂有、鐘有、参詣人ツクナリ。(『越中道の記 立山』)

という記述もある。立山曼荼羅では血の池に観音像(如意輪観音)や、堂舎(如意輪堂)を描いたものを散見する。『越中道の記 立山』の記述に従えば堂舎の中に釣鐘があり、参詣人はそれを撞くことができたようだが、直接釣鐘を描いたものは見られない。

②御本社

御本社の宝物は興味を引くものであったようで、その名称は「立山紀行文」では様々に書かれている。『和漢三才図会』では8種の什物を書くが、その後の登拝者の記載を見ると、時代を経て宝物の一部に変化が見られる⁽⁴⁵⁾。「本史料」に挙げている鎌と大刀は、『和漢三才図会』では「墓股鎌 有頼射レケル熊ヲ之矢ノ根」、「有頼所持ノ刀 無銘」とあるものである。

佐伯有頼公の鎌、大刀其外靈宝多し (甲本)

③玉殿の岩屋

玉殿の岩屋は、開山説話では重要な場所だが「立山紀行文」にはほとんど記載がない。実際に岩屋を訪れ、その中の様子を書いたものは「本史料」と『越中道の記』の他には管見しない。

又もとの道下向する右に玉殿の岩屋あり。奥行拾間余、自然岩屋内に蓮花石金像の弥陀あり。左の脇に矢の穴あり、①此矢ハ本社ニ納む。(甲本)

室堂近クシテ玉殿ノ岩屋有。奥行十間程。内ニ蓮花石アリ。阿弥陀仏ノ金像安置。左リノ胸ニ矢ノ穴有り (『越中道の記』)

内部には現在でも石仏や奉納品が中に置かれるが、この中に矢疵阿弥陀が安置してあったことは貴重な情報と思われる。下線部①は御本社の什物で、「佐伯有頼公の鎌」とあるものを指す。

④藤橋(近迎え)

禅定登山を終えて下山してくる者を、宿坊から弁当などを持って迎える「近迎え」の様子が書かれている。近迎えを具体的に記しているものには「本史料」の他、文化10年(1813)と、文政7年(1824)に書かれ同名の『三禅定道中記』⁽⁴⁶⁾がある。(以下区別のため、引用の際は前者を『三禅定道中記』①、後者を『三禅定道中記』②と略記)。何れでも酒が入り、無事に禅定登山から帰り安堵し、称名川の河畔で休息の小宴を張ったことが読み取れる。

八つ時藤橋を渡り、坊よりの迎として酒行厨など贈りにけれハ谷河の端にて喫し、暫休息して七つ半ニ泉蔵坊ニ帰り宿す。(甲本)

藤橋迄坊ノ酒一樽赤飯、面々弁当ニ而迎ひ出ル、坊へ着き候所、暮六ツ着仕候 (『三禅定道中記』①)

夫ノ藤橋迄坊ノ酒一樽赤飯面々弁当ニ而迎出ル (『三禅定道中記』②)

(4) 4日目(6月22日)

芦峯寺—下田～森尻…魚津泊

①宿坊の馳走

いよいよ禪定登山を終えて帰途に着く。「本史料」に記載は無いが、山を下りた翌日の朝は十分な食事で栄養を付けるのが習慣で、政香とほぼ同じ時期に三学坊に泊まった禪定者による『三禪定道中記』①、②では、どちらも朝食の内容は「一汁七菜」とあり、かなりの御馳走であったように記している。

そしてこの御馳走と言うのは、十分な食事を食べさせてから山を下ることだけではなく、帰りは宿坊から馬に荷物を積んで送る習慣も指していたようである。

「本史料」では、

廿二日天気よし。泉蔵坊を發す。①坊より地走に馬壹疋荷物をのせてみさと村まで送る三里の間なり(甲本)

廿二日快晴 泉蔵坊より②馬一疋二荷を載せて送る、みさと村迄行程三里也 (乙本)

とある。甲本では下線部①で「坊より地走に」とあるが、これは「馳走」と書くべきところの誤記であろう。また「みさと村」は、芦峯寺から下り3里の距離から考えると下田村を指す。同じ部分は乙本では下線部②で単に馬に荷を乗せて送ってもらう意に書き換えられているが、総合すると「馳走」とは、帰りに荷物を下田付近まで運送する宿坊の持てなしの一部だったと読める。

この「馳走」について『三禪定道中記』①では、

明朝一汁七菜二而御飯出ス、漸く五ツ半二坊を立、其故又御馳走として拾壹人へ馬貳疋出ス、辞退いたし候得共、先例と申、無拋岩倉迄荷物付連レ申候、宿坊礼拾壹人而て金壹両、此當り壹人二付、丁六百文ツツ、荷持案内として一日ニ三百文積り十壹人而て二人連る、此割百九文也 (『三禪定道中記』①)

とある。また『三禪定道中記』②では、

明朝一汁七菜二て御飯出し漸く五ツ半二坊を立、其故又御馳走として拾貳人へ馬三疋出ス、辞退いたし候得共、先例と申、無拋岩倉迄連レ申候、為坊礼拾貳人二て金壹両壹分、荷物山案内として一日ニ三百文積り十貳人二て二人連る (『三禪定道中記』②)

とある。『三禪定道中記』①、②では何れもこのサービスを一度辞退するが、宿坊から「先例」だといわれて「無拋」^{よんどころなく}受けている。宿坊では、師檀関係にある登拝者を「道者衆」として丁重にもてなしたことが知られているが、これもそのような「道者衆」への一連の接待の一部だったようにも思われる部分である⁽⁴⁷⁾。

但し、『三禪定道中記』①、②の2点は何れも芦峯寺三学坊での事例であり「本史料」の泉蔵坊の事例を含めても、これが芦峯寺ではどこの宿坊でも行っていた一般的な接待だったのかを判断するには事例が乏しい。この「先例」の詳細は、宿坊側、禪定者側から事例を集めて今後の研究成果を俟ちたい。

(5) その他の特徴的な記述

①佐々成政のざらざら越えを特記した「付録」

甲本、乙本共に「付録」と見出しを付けて佐々成政のざらざら越えを特記している。

佐々成政さらゝ越へといふハ、越中富山城主佐々陸奥守成政大軍に圍れ①救兵を信州松本の城に請んとすれと敵海道を遮さして通せず。②成政主従七騎に雪中に③立山をのり越へざら河へ出て松本に至る。ざら河の下を広川という、④湯もとの岩に成政馬の蹄の跡あり。近世加賀の大守立山巡検として三年目ニ家臣、麓を巡る。其節此ざら河へも出るといふ。

登立山懐佐々成政

峯如劔鋒寒最盛 飛鳥^鳥唼翼鳥翔猶病 三冬侵雪濟攀雜 驍勇無双源成政

雪風に 鳥も通^ぬ 立山を ふみ分けへ越し 人をしのはめ (甲本。※乙本も同意だが、短歌は削除)

さらさら越えは、通説では天正12年(1584)冬、小牧・長久手の戦いで孤立した佐々成政が、徳川家康に再挙兵を促すため、富山城から厳冬の北アルプス越え徳川家康のいる遠江の浜松城へ向かうものの、再挙兵を拒否され成政は失意のうちに越中へ帰還したとされる件である。しかし技術的に厳冬期にざら峠を越えたとする史実性への疑問や、別ルートを通ったとする諸説がある⁽⁴⁸⁾。肥後に転封させられた後の成政の悲劇性も加わり、江戸時代以降脚色され歌舞伎や浮世絵の題材にもなり語り継がれる伝説だが、ここで政香が書いている内容は、「佐々成政が冬のざら峠を越えた」というプロットは残るものの、場所や内容がすり替わったストーリーである。

「本史料」とほぼ同時代に書かれた『肯構先達録』に載せられた内容は、200年以上も前の出来事に劇的な苦難の雪山越えを講談調に脚色したものである。それが当時膾炙していた通説と思われるが、これも浜松で家康に挙兵を促すことを目的として書かれている。

しかし「本史料」では通説とは異なる記述が多い。先ず下線部①では行き先が浜松ではなく松本であり、家康との面談が目的ではないこと。随行した家臣の人数も、文献により極秘のため数人であったとするものや100人近くとするものなど諸説⁽⁴⁹⁾ある。次に下線部②では「主従七騎」とするが、『肯構先達録』の「主従九十四人」とは食い違うこと。「佐々成政さらゝ越へというハ」としながら、ざら峠ではなく下線部③では「ざら河」となっていること。また、下線部④に「成政馬の蹄の跡あり」とあるのは、厳冬期に馬に乗って通ったとは考えられないので、ザラ越えの際に立山温泉で日和を待ったという話が伝えられて変化し、温泉の場所と成政を結びつけるモチーフとなった可能性はあるだろう⁽⁵⁰⁾。

小括すると、政香が立山で聞いたのは、芦峯寺を含む立山の人々の口伝で通説が変化したものと考えられる。この他にも、「立山曼荼羅竹内家本」には成政が立山大権現の霊告を受ける姿や、立山温泉で甲冑を脱いだ姿が描かれている。政香よりも後、天保11年に越後から立山を参詣した禅定者の登拝記録には、成政はサラサラ越で信州野口村(現・大町市)へ下ったとする内容⁽⁵¹⁾も見られる。戦国期から250年を経る内に佐々成政のざらざら越えは、ストーリーに様々なプロットを取り込みながら語り継がれて変化していったようである。

「付録」は、政香が立山を訪れてこの説話を聞きその内容に感動して特記したものと思われ、成政の勇敢な行為を称えた七言絶句や短歌を詠んでいる。

②室堂で菜に食べられた薊

室堂では食事の菜に、現地で採集できるタテヤマアザミを食材にしていたようである。アザミは当時から全国で食用にされ、政香の故郷三河地方でも食べていたと思われるが、政香は立山で初めてそれを食べ、三河が思い出されて感慨が深かったのであろう。甲本ではその感動を歌に詠んでいるが、乙本では説明的な記述に変えている。

室堂にて薊葉を煮て出したれハ

木綿たすき 思ひもかけぬ 立山に 薊葉の若葉 くひそめんとハ (甲本)

室堂にて汁のみに薊葉を煮たり、薊葉ハ故郷にあれとも立山ニ而喫しそめしは好因縁とやいはむ。(乙本)

室堂の居住環境が劣悪だったこと⁽⁵²⁾や、高地のために飯が柔らかく炊けないといったことは複数の「立山紀行文」に散見されるが、食事の菜については管見しない。近代になっても、明治34年に立山へ登った

浅地倫の登山記『立山権現』には「立山薊の味噌汁を恵まる味旨くして迎も下界にて喰へぬ靈草たるを知られたり」とあり、物資の輸送が難しい場所では、明治以降もずっと食べられていた貴重な食材だったことが分かる。

③立山を詠んだ歌と漢詩

本文中に心情の表現はほとんどなく、感情や感動は主に詩歌で表現されていることを前述した。政香がその都度感慨を表現している詩歌についても、甲本と乙本では技巧表現を加え推敲した表現の違いが幾つか見られる。

甲本の短歌では、立山に登ったときの、雲海の上に立つその高さへの感動をモチーフとし、一度書いた言葉を消して書き直しつつ言葉を選びながら詠もうとした跡が残っている。

立山にのぼりつれハ鳥の ○ [白雲の千重をおしわけ天そそりたかき立山まで上へに□□□□□□の梯
を見てなりてと其坂尊ふとそれハ] ※ ([] 内は○を付けて後から割書きで挿入した部分。また□□
□□□□部分は、書き直して消されて判読不能な箇所)

きのふ迄 空になかめし 白雲の上が上へ行 立山のみね
梓弓 矢竹心に 白雲の立山ふかく いるそ嬉しき (甲本)

それに対して乙本では、甲本にあった2首の短歌を削除して、長歌とその反歌に詠み直している。技巧を凝らした表現と共に、和歌を学び『万葉集』にも造詣が深かったことが分かる。

詠立山歌并短歌

しなさかる こしの国内に 山ハしも さはにあれとも 天雲を 八重おしわけて 天そそり 高き立山 神さひ
し 高根を見まく はろはると かたかひ河の 河の瀬の 流にそひて 水上を 尋のほれハ はるかなる 岸をへ
たてゝ ささかにの いともあやふく 藤つるを かなたこなたに 引むすひ かけし浮橋 通ひつつ 流れを見
れハ 弩の 箭よりもはやし 瀧ち行 其水音ハ 鳴神の なるにまさりて なるとかや そをきく人ハ 魂も きゆ
はかりなる 心地して 渡はつれハ して立る 杉の木かけの 向つをの 坂道をさへし いはほとし のほるた
つきに 朽ちかけし くさりにすかり 岩かとを ふみならしつ 谷見れハ さかまく水も わきあかり 湯玉
たはしり もゆる火の きゆる時なく 立燈 たゆる世もなく いにしへゆ 今もさかりに 見る人の かたりに
すれハ きく人の 見まくほりする 是神山を

反歌

きのふまで 空になかめし 久堅の 雲はふもとに 立山のみね
天そそり そそりたゝせる 白雲を 八重おしわけて 立山のみね (乙本)

立山を初めて神の山と詠んだ大伴家持をオマージュするように、長歌は「見まくほりする 是神山を (見たいと願う、この神の山を)」と結んでいる点、また下線部に用いられた表現からは、『万葉集』に載る大伴家持やそれに和した大伴池主の長歌の表現を踏まえて言葉を選び詠んでいることが分かる⁽⁵³⁾。

まとめにかえて

小稿では、江戸時代の立山禪定登山の実態、特に山中の様子を明らかにすると共に『北游藁』の特徴や史料価値の考察のため、政香が立山を訪れた4日間を抄出して取り上げた。その結果、「本史料」は、山中で仲語が語っていた具体的な案内の内容に、これまで知られていた「立山紀行文」の記載を補完する内容を含むものであることが明らかになり、近世の立山禪定登山の実態が分かる史料の一つと見ることができる。

立山禪定登山の部分は分量としては全体の1割程でしかないが、「本史料」全体を通して見たとき、政香

が記録した各地の内容からは、18世紀末～19世紀初期に於ける知識人の旅の実態を知ることができる史料でもある。

また、政香の思想や教養については、「本史料」が持つ記録性、国学者・文人としての知識教養に裏打ちされた見聞や、文献を用いた内容の増補、挿入された和歌や漢詩の分析からも明らかにされることであろう。

そして立山に関しては、「本史料」が特に三禅定の事例の多く見られる三河地方の人物が書いたことに鑑みれば、立山に先立って訪れた白山禅定登山の部分、また文政元年に富士山へ登った際の紀行文『東游藁』の内容を併せてその実態を整理することで、今後の三禅定の研究の進捗にも貴重な史料だと考えられる。

[謝辞]

「本史料」の複写と小稿への翻刻文掲載に際しては、ご所蔵の西尾市岩瀬文庫より格別のご配慮をいただきました。お名前を挙げて感謝申し上げます。

[註]

- (1) 農山漁村文化協会『江戸時代 人づくり風土記③ふるさとの人と知恵 愛知』（農山漁村文化協会、1995年）「8 豊橋 三河の歴史、人物伝をまとめた渡辺政香と在郷の人々」参照。
- (2) 註（1）に同じ。
- (3) 前掲農山漁村文化協会、『西尾市史3 近世下』、など。
- (4) 愛知県教育会・愛知一師偉人文庫『新編愛知県偉人伝』（川瀬書店、1934年）124頁参照。
- (5) 最後の旅は天保9年（1838）、63歳の時に寺津八幡宮の御朱印改めのため江戸へ行ったもので、この時には国学者平田篤胤に会っている。
- (6) 註（1）に同じ。
- (7) 函番号168-84。この中には、紀行文『西游藁』序文の添削も含まれる。
- (8) データベースの解説 (<https://adeac.jp/iwasebunko/catalog/mp01810300> 2025.12.10閲覧) には、添削後の部分「北越富山駅有神通河源從飛驒出而入北海矣河広貳百余歩水勢急激架橋無因建柱於兩岸以鉄鎖繫船六十四艘以作河梁」が載る。この部分を甲本、乙本と三者で校勘すると、甲本には「北越」がなく、「無因建柱於兩岸」は乙本では「不可架橋建杭於兩岸」となっている。政香は推敲の際には添削を受けた結果を基にしつつも、必ずしも添削結果をそのまま差し替えた訳ではなかったことが分かる。甲本、乙本ではこの他の表現や内容の差異にもこれと同様の経緯があったものと推定される。
- (9) 甲・乙2件を一括し、共に岩瀬文庫での函番号（資料番号）は166-157。
- (10) 6月14日、白山山中の記述には「此辺の谷々石に波華、金杯草、銀杯草、玉簪花、桜草、桔梗、女郎花、百合其外千草の数しらす、黒百合の花又多し」や、雷鳥を詠んだ七言絶句「題雷鳥／白山靈鳥称雷禽 形似鳩雛毛彩深 不識生涯弓繳懼 出栖積雪万重岑」を挿入している。
- (11) 立山では岩嶽寺から芦嶽寺へ向かう行程に2か所、桑谷、不動堂から10間ほど行った所に水があることを記している。
- (12) 住谷雄幸「江戸時代の山岳紀行—三山（富士・白山・立山）紀行を中心に—」（『山梨英和短期大学紀要』30巻所収、1996年）119～120頁参照。
- (13) 加藤基樹「中世「三禅定」覚書—三禅定研究のゆくえ—」（富山県立山博物館『研究紀要』第18号所収、2011年）95頁参照。
- (14) 刷物の表題は共通して「越中国立山禅定名所附図別当岩嶽寺」だが、図版の構図や文章の細部に差異のある版が複数存在する。該当箇所では「有若・有頼」（「有若左衛門・有頼」を含む）とするものは、富山県立図書館蔵（収蔵番号N31-2、N31-3、N31-6、N31-7）、「有頼・有頼」は、富山県立図書館蔵（N31-4、N31-5、N31-8）、立山博物館蔵2点、「有公・有頼」は富山県立図書館蔵（A03-2）が確認できる。現存するものを管見した限りでは「有頼・有頼」の記載は少なくない。
- (15) 寺口けい子「芦嶽寺善道坊諸国檀那廻りの実態」（『富山史壇』67号所収、1977年）23～24頁参照。に「嘉永三年御祈祷檀那覚帳」をもとに、三河国で配札に訪れた146ヶ村を表にまとめている。各宿坊家は布教先が競合しないように国毎に振り分けられていたとされるが、原則的な縛りはあってもその布教先は、檀那株として売買されていたことも分かっている（『立山町史』上巻 806頁）。また尾張、三河、駿河など現在の愛知県を中心にした地方に檀那場を持つ

た日光坊、泉蔵坊、大仙坊、善道坊は昭和に入っても戦前までこの地方での配札を続けていた歴史を踏まえると、江戸時代からも地域的に檀那場は入り組んでいたとすれば、政香は泉蔵坊と師檀関係を結んでいたとも考えられる。

- (16) 木倉豊信編『越中立山古文書』（立山開発鉄道、昭和37年）に収載の「一山会本（権教坊本）」を底本とした翻刻による。
- (17) 『富山県史 資料編 I 古代』に収載の翻刻による。
- (18) ほぼ同時期の文化9年に立山に登った富山藩士野崎雅明の『立山ノ記』では、「橋ヲ過ギテ姥堂アリ、又云フ、慈興、母アリ、卒シテ後、興、エヲシテ其ノ肖像ヲ作ラシメ、此ノ中ニ置ク」と記している例がある。
- (19) 富山県立図書館蔵（請求番号 N31-3、N31-8）。
- (20) 佐伯立光『立山史談』（私家版、昭和40年）77頁参照。中世以前は仏名に因んだ「勝妙滝」、「唱名滝」などが用いられていたとするが、何れも仮名書きすると「せうめう」の表記には合致しない。
- (21) 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵、筆者、書かれた年は未詳。木倉豊信氏はこれを正徳・享保の頃に書かれたものと推定する。五来重編『修験道史料集 I 東日本篇』（名著出版、昭和58年）540～543頁。廣瀬誠による同史料解題733～734頁参照。
- (22) 浅倉有子『方言修行 金草鞋について』（『十返舎一九・越後紀行集第2巻 越中立山参詣紀行』所収、郷土出版社、1996年）によると、一九は文政9年に越後塩沢に鈴木牧之を訪ねた後、越中、加賀方面へ旅をしたと推測され、その際の立山での見聞が基になっているものと考えられる。
- (23) 『立山・黒部山岳遺跡調査報告書』（富山県埋蔵文化財センター、平成28年）24頁参照。
- (24) 浅地倫『立山権現』（中田書店、明治36年）13頁参照。
- (25) 表紙の原題は「伊勢参宮／西国札所／諸神社拜礼／道中日記」、天保11年の越後国魚沼郡芦ヶ崎村大倉与市郎の道中記。『富山史壇』197号、198号に鈴木景二氏による翻刻がある。
- (26) 前掲佐伯立光、75頁参照。
- (27) 加藤基樹「立山権現 [矢疵阿弥陀如来] の史料的考察—立山信仰と生身仏信仰—」（富山県立山博物館『研究紀要』第24号所収、2018年）53頁参照。
- (28) 佐伯幸長『立山信仰の歴史と源流』（立山神道本院、昭和48年）534～536頁参照。
- (29) 前掲佐伯立光、76頁参照。
- (30) 前掲佐伯立光、75頁参照。材木坂の説話として、有頼の継母藤波が連れていた「禿」と言う侍女が峯本社を建立するために積んであった材木に腰かけたところ、山住神女が「この用材は穢れている」と怒り、突き崩した材木が石になったとする説話を載せている。この「禿」は更に別の原因で杉にされ、禿杉と呼ばれることにも連動する。
- (31) 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵、筆者は不明。天保11年から14年にかけて越中各地を歩き、その見聞を記した紀行文。『越中道の記』は、富山県立図書館が同資料をマイクロフィルム化した際に付けた標題で、所蔵先の標題は「五ヶ山大牧入湯の記」。立山の部分は、天保12年に訪れた際のもの。前掲五来、545頁、廣瀬誠氏による同史料解題734～735頁参照。
- (32) 細木ひとみ「新出の「立山曼荼羅」からみる立山信仰の一考察」（富山県立山博物館『研究紀要』第30号所収、2024年）65頁、82頁参照。
- (33) 拙稿「明治以降リライトされた「有頼開山説話」に関する一考察—様々なサブストーリーの存在とその拡散をめぐって—」（富山県立山博物館『研究紀要』31号所収、2025年）22頁参照。
- (34) 前掲富山県埋蔵文化財センター、25頁参照。
- (35) 前掲拙稿、21頁、34～35頁参照。有頼の渡河と登山に際して遭遇する「獅子」を、岩嶽寺では「猪」に芦嶽寺では「鹿」と解釈した異なる説話が別々に伝承している例がある。
- (36) 鈴木正崇「女人禁制と山岳信仰」（三田哲学会、『哲学』第149集所収、2023年）148～149頁「3. 女人結界の禁忌」参照。立山の姥石とその類話の比較と考察については、柳田国男「比丘尼石の話」（『定本 柳田国男集』第4巻所収、筑摩書房、1963年）275頁、281頁参照。
- (37) 米原寛「立山室堂について」（富山県立山博物館『研究紀要』第2号所収、1995年）45～46頁参照。文政9年頃に3棟の内1棟を廃絶し2棟となったとするが、政香が泊まった文政5年に2棟としている点とは相違があるようにも見える。その頃建物は残存していても運用していなかったなどの理由で2棟としているのかもしれない。それ以降の『立山記』（天保11年）には「室堂両屋」、『立山遊記』（天保15年）には「室戸ハ二ヶ所アリ」とあり、2棟になっていたことが分かる。
- (38) 例えば『立山遊記』には、堂内には炊事で焚いた煙が充満する狭い室内に数百人がひしめき、蚤も多く夜も安眠できな

い。また外は人糞が散乱し歩けないなどの状況が記される。ほぼ同年代の『登立山記』でも「宿者填满、各不容寝」「戸外為厠、便溺满地、臭気可悪」とあるので、この時期の状況は政香のときも大差無かったであろう。

- (39) 加藤基樹「安養寺妙慶寺蔵『立山来迎仏』について」(富山県立山博物館『研究紀要』第16号所収、2009年)28~29頁参照。
- (40) 岩峯寺雄山神社文書 史料137。引用は『越中立山古文書』に収載の翻刻による。
- (41) 立山山中の梵鐘の存在や現存、寄進等の経緯についての考察は、斉藤善夫「近世越中立山諸堂の鐘」(『富山史壇』第104号、1991年)、及び前掲加藤(2009)に詳しい。
- (42) 登拝道には、浄土山の山腹にかかる大きな雪渓を横切る地点があった。この雪渓は万年雪で、秋になっても大量の雪があったと言われる。『富山県歴史の道調査報告書—立山道—』(富山県教育委員会、1981年)55頁参照。
- (43) 立山曼荼羅では、その付近に6つの堂舎を描くものが多く見られる。六道(六堂)の意なのかもしれない。前掲富山県埋蔵文化財センターによれば、現在の登山道では室堂の南70mのところから祇堂に向かって石敷の道が整備されているが、調査によってその60~120m北にある道跡が江戸時代の登拝道であることが分かり、その付近の大岩の上には焼く骨が残る納骨遺跡がある。山絵図ではその辺りが「六道両社」の描かれている場所になることから、その大岩の上には祠があった可能性が高いと報告している。
- (44) 『方言修行 金草鞋』には、小杉宿の茶屋で、摂津から立山へ奉納する鐘を「越中／立山奉納」と書かれた札を付けた屋根付きの函車に載せて引く挿絵がある。この話自体は潤色があるかもしれないが、この場面には「一年、一九立山へ参詣せし時、目の当たりに見たる」とも書いていることから、全く根拠のないフィクションではないだろう。
- (45) 『立山遊記』には、先年富山町人から寄付されたという6寸程の古鏡があったことを書いている。『登立山記』では、この古鏡について「鏡背有貞観二十年銘。制造奇古。背面刻富山岡宜休納之七字」と書くが、寄進した岡宜休は町人ではなく富山藩士。
- (46) 文化10年、文政7年の三禅定の旅で書かれた道中記。遠州山名郡二ノ宮村山田岩蔵と記名された『西国道中記』と一括で保存されていることから山田岩蔵本人、或いは山田家の身内の旅を記録したものと考えられる。鈴木景二『三禅定道中記』『西国道中記』—富士山・立山・白山、関西の旅』(『富山史壇』第207号所収、2025年)に史料紹介と翻刻文がある。
- (47) これが道者衆への接待の一部だったとすれば、註(15)で触れた点に照らして、政香が泉蔵坊と師檀関係を結んでいたことと同時に、泉蔵坊が三河国寺津村一帯にも檀那場を持っていたことの傍証となるだろう。
- (48) 米原寛「佐々成政の「ザラザラ越え」考」(富山県立山博物館『研究紀要』第14号所収、2007年)35~38頁参照。
- (49) 『武徳編年集成』巻之三十には「壯者百人二櫓掛サセ、今日(註：天正12年11月23日)外山城ヲ登シ更ニ越ノ難所雪深ヲ踏分テ赴キシカ、また『川角太閤記』巻三には「供の者六人召連れ我が国(註：越中国)を竊に罷り出候てはま松へ参り候」、絵本太閤記第五編巻之七には「腹心の近士武部兵庫の頭をはじめ五拾余人を引きつれ時冬の中比なれば白妙に降積し数丈の雪を踏分け道もなき険阻を凌ぎ」などがある。「本史料」の「主従七騎」は、『川角太閤記』の記述に成政自身を加えれば人数としては符合するので、政香が聞いた伝承の元になっていた可能性はあろう。
- (50) 江戸時代になってから行われた実踏調査を記録した「立山ザラ越之圖」(個人蔵、富山県立山博物館寄託)では立山温泉からザラ峠に向かう道筋に、「天正十二年佐々成政十一月十四日当山ヲ出テ此所ニ入湯シ日和ヲ考、雪中ノ信州エ越ト云、夏土民入湯」と書き込みが見える。
- (51) 『新 綜覧 立山曼荼羅』(富山県立山博物館、2022年)98~99頁「竹内家本に描かれる“佐々成政”」参照。天保11年9月に越後国頸城郡福嶋村の関根新左衛門が記した『越中立山参詣記』には「佐々成政は弥陀ヶ原の一ノ腰へ掛りサラサラ越。信州野口村(現・大町市)へ道下る」とあることを紹介している。旧野口村に当たる大町市平野口の西正院には、天正12年にザラ峠を越えて来た佐々成政が立山から持ってきて寄進したと伝わる大姥尊坐像がある。
- (52) 註(38)に同じ。
- (53) 下線部の表現には、大伴家持の「立山の賦一首」(『万葉集』巻第17 4000)の歌い出し「天ざる 鄙に名かかず 越の中 国内ことごと 山はしも しじにあれども 川はしも さはに行けども すめ神の うしはきいます 新川の その立山に 常夏に 雪降り敷きて 帯ばせる 片貝川の 清き瀬に (以下略)」や、大伴池主「敬みて立山の賦に和ふる一首」(『万葉集』巻第17 4003)の歌い出しに見える「朝日さし そがひに見ゆる 神ながら み名に帯ばせる 白雲の 千重を押し別け 天そそり 高き立山 (以下略)」などを意識して言葉を選んだ表現で、甲本で詠んだ感動に、家持や池主が詠んだ立山の歌へのオマージュを込め、改めて詠みなおしたものと思われる。

表3 藤橋と称名滝の表記の揺れ

番号	1	2	3	4	5	6
資料名	行脚文集	一宮巡詣記	奥山廻泊處 人足覚立帳	立山道名所	三岳紀行	立山紀行
年代	天和3年 (1683)	元禄9年 (1696)	正徳2年 (1712)	正徳・享保頃 (1711~1735)	宝暦10年 (1760)	寛政10年 (1798)
藤橋	葛藤の弦橋	*1			くす(葛)橋	藤橋
称名滝	勝妙の瀧	浄明が瀧	正明ノ瀧	照名ヶ瀧	シヤウメウカ瀧	勝妙の瀑布
番号	7	8	9	10	11	12
資料名	立山ノ記	三禅定道中記①	九峯修行	北游藁 (甲・乙)	三の山巡	三禅定道中記②
年代	文化9年 (1812)	文化10年 (1813)	文化13年 (1816)	文政5年 (1822)	文政6年 (1823)	文政7年 (1824)
藤橋	*2	藤橋	藤橋	藤橋*3	藤橋	藤橋
称名滝	勝妙瀑布	しやう明が瀧		称名瀧	シヤウメウが瀧	しやうめうのたき
番号	13	14	15	16	17	
資料名	登立山記	道中日記	越中道の記 立山	立山遊記	山絵図 (岩峯寺)	山絵図 (芦峯寺)
年代	天保11年 (1840)	天保11年 (1840)	天保12年 (1841)	天保15年 (1844)	江戸時代	
藤橋	藤橋	藤橋	藤橋	藤橋	藤橋(ふじはし)	ふぢはし
称名滝	称名瀑	しやうみやうが瀧	正妙ノ瀧	称名瀧	しやうめうのたき	せうめうのたき

【出典】

- 「行脚文集」:正式表題は「日本行脚文集」。俳人大淀三千風の紀行文。表記の確認は橋本龍也編『越中紀行文集』(桂書房、1994年) 収載の翻刻による。
- 「一宮巡詣」: 神道家橋三喜の紀行文。表記の確認は前掲橋本収載の翻刻による。*1本文中に藤橋の名称はなく、「藤綱にて橋を渡し」とする。
- 「奥山廻泊處人足附之覚帳」: 正式表題は「正徳二年／西水橋勘左衛門同道二而上山さら越奥山廻仕足并と泊所付之立帳」。十村内山村平三郎の覚帳。表記の確認は奥田淳爾編『黒部奥山廻記録』(桂書房、1990年) 収載の翻刻による。「藤橋」の記載はない。
- 「立山道名所」: 筆者不明の道中記。表記の確認は五来重編『修験道史料集I 東日本篇』(名著出版、昭和58年) 収載の翻刻による。
- 「三岳紀行」: 文人画家池大雅の紀行文。表記の確認は菅沼貞三「大雅の三岳紀行」(『美術研究』73号、1938年) に掲載の翻刻による。藤橋の名称はなく、葛の蔓で架けられた橋の意か。
- 「立山紀行」: 富山藩士、歌人佐藤月窓の紀行文。表記の確認は富山県郷土史会校注「肯構泉達録」の翻刻による。
- 「立山ノ記」: 富山藩士、野崎雅明の紀行文。表記の確認は富山県郷土史会校注「肯構泉達録」の翻刻による。*2本文中に藤橋の名称はなく、「藤枝ヲ編ンデ橋トナシ」とする。
- 「三禅定道中記①」: 本文註(46)に同じ。
- 「九峯修行」: 正式表題は「日本九峯修行日記」。修験者野田泉光院の旅日記。表記の確認は前掲橋本収載の翻刻による。
- 「北游藁」: 表記は甲本、乙本とも同じ。*3乙本の本文中には、「蔓を引渡して橋となせり」と加筆がある。
- 「三の山巡」: 尾張藩士某の紀行文。表記の確認は加藤基樹「三禅定」考—成立と『三の山巡』にみる実態—(富山県立山博物館『研究紀要』第17号、2010年) に掲載の翻刻による。藤橋には「藤橋とイェトモ藤ニアラズ。山ブドウノツルナリ」と書き添えている。
- 「三禅定道中記②」: 本文註(46)に同じ。
- 「登立山記」: 富山藩士、漢学者大塚敬業の紀行文。表記の確認は前掲橋本収載の翻刻による。

- 14 「道中日記」：本文註（25）に同じ。
 15 「越中道の記 立山」：筆者名不詳の旅日記。書名は富山県立図書館による仮題。表記の確認は前掲五来収載の翻刻による。
 16 「立山遊記」：加賀藩士で儒学者の金子盤蝸の紀行文。表記の確認は正橋剛二氏の翻刻による。
 17 「山絵図」：岩嶽寺で作られたもの、芦嶽寺で作られたものに分けて確認。表記の確認は富山県立図書館、立山博物館所蔵資料による。芦嶽寺と岩嶽寺では仮名表記が異なる点は興味深い。

翻刻文

凡例

- ・割書き部分は [] で表記した。読みやすいように日付ごとに行を空け、定型詩（長歌、和歌、漢詩）は字下げし、句と句の間を空けた。
- ・句読点、括弧は筆者が付けた。
- ・墨で線を引き消して推敲した部分の判読不明文字は、☐で示した。
- ・変体仮名はひらがなに、旧字、異体字は可能な限り常用漢字に直したが、合字「ㇿ」は残した。

1. 甲本 「序」と「本文 立山山中部分」

(1) 「序」

北游藁序

上古跋涉名山靈嶽者少矣。神武帝如越紀山而出芳野、日本武尊攀白井而躋膽吹為追伐逆賊者、更非探山水奇勝矣。其余雄武之士精修苦行者未聞窮其勝矣、况凡俗之徒矣。

皇国大嶽之中富士立峯白山歴世遼邈而尤峻秀也。然上古未曾聽跋涉者、漸至大宝年間而得役居士攀富頂佐伯有頼登立峯泰澄窮白嶺矣。雖然世尚草昧或戰伐後而無相繼而躋攀者惜哉。皇国之靈嶽道尚茅塞而歴数千歳矣、可謂遺憾之甚歟。近世洛池大雅甲高孺皮勢韓大年⁽¹⁾有三岳之遊。因余幸稟生於昇平數百歳之間、不知擊劍汗馬之勞、山路猛獸之害、夜行姦賊之怖矣。是輒遇跋涉窮搜之時可喜国恩矣。繇此以少々有遠游之癖、粗窮東西之諸勝、未至北陸居諸荏苒逼知命之年矣。旧友諫余曰「足下矍鑠而雖不知沈痾老後不堪跋涉、夫不可失時奚為被羈區々風塵早快遠游矣」。余聞此不堪感激、水石之癖軫切也。便請暇老親命駕千里矣。旧友之一言中心藏之記、以為因併述昇平国恩之感以冠游藁云。 文政五歳次 壬午林鐘⁽²⁾

(2) 「本文 立山山中部分」

富山駅ニ昼飯を喫し岩倉の里ニ至る。其間の田中ニ自然石の大碑八尺余あり、田中倒れ伏せり。渡過道の三字斗り見ゆ、何人の碑なるや知難し。[大森村にて河を渡るによし／大森権現の森あり]

岩倉村立山権現の別当にして坊舎式十四坊あり、本坊を岩倉寺という。神明 天神 八幡 若宮 岩崎 新宮七社あり。立山大権現ハ伊弉諾、伊弉冉の靈体一切男女の元神にて此峯を城都として上下人の父母なる故に邪正ともに利益す、謂る越の大宮なり。四十式代聖皇文武神託によつて佐伯有頼公を越の領主に下し玉ふ。二神わさと鷹に化現して嫡子有頼を峯中に引入す。則玉殿岩屋の内にして先代祖々の法を受持し頓悟す。依て慈興と称し中興の開山なり。大宝元年に別当岩嶽寺を立。又四月八日に権現告て曰灵天ニハ峯に住し龍花会を待、上天にハ此処に住してそつ寂光を守る。是垂後の地なり。諸堂精舎を造立し、毎年此日祭礼修行なすへしと云云。今ニ七社の神輿をすへ、衆者を揃へ兒の舞法華問答あり。此山の地主ハ手力雄の尊なり。天平七年行基菩薩此峯によちのほり諸嶽を拝し、岩倉寺五智の尊像を造立し講堂に安置し玉ふ。

岩倉より壺里程行てとちの木の下に至茶屋あり、木陰ニ而涼しき処なり。又半道程行ハ右ニ清水あり、次に津加沢村⁽³⁾暫く行て観音あり。爰に清水あり。坂を越へて芦倉村ニ到り泉蔵坊ニ舎る、蚊帳を止む。

姥堂前の橋を浮橋という。橋の数板の数欄干ニ到る迄、皆諸仏菩薩の員数法華經の文字ニ合せて架すという。橋本に拾抱余の杉四五本あり。姥堂中尊ハ沙土煮尊、大戸辺尊、惶根尊なり。此山ハ天降り玉ふという。其外

六十六ヶ国の姥御前の像あり、或説に有頼公の母上像なりともいう。大宝三年八月十二日忌日なる故毎年秋の彼岸の中の日に供養あり。

廿日天気よし。泉蔵坊を発し姥堂を来端あら谷⁽⁴⁾に到る、爰二式丈斗の滝あり。藤橋

いさ越ん 神の恵みを杖として千尋の谷にかかる藤橋

藤橋を渡り称名川にて垢離す。こかね坂、せんじゆ原、せんじゆ堂あり。是より美女杉迄一里、此間に熊野権現の社あり。昔材木拵へ所へ女人来る故材木石になる、以立積ミ横積ミの形なり、是を材木坂という。かきか首、又鷲の岩屋あり。若狭国長良の尼の下女美女杉となる。七度浮橋の用木となりて成仏せんと誓つて伐迄ハ芽を生して大木となり、七度目に枯たり。今は切株ばかり也。此処水なし。ふな坂まで一里此間にしかりはりという穴あり。右の尼かふるをしかりなから小便するに、ならくまで穴通りしとなり。たんさいのみさかと云坂あり。ふたんくハう仏ちんざ、かふる⁽⁵⁾かふる杉となる、廻り八尺⁽⁵⁾斗り高さ三間四方にたれてしんなり、廻り三十間はかりあり。ふな坂よりくわ谷へ一里此間左二称名滝を拜、ふしおかみという。かりやす坂、くわ谷此所に室あり。清水あり、昼飯を喫す。不動堂まで壱里此間にはさき観音堂あり。不動堂ハ式間に三間なり。堂より右十間斗り往て水あり。追分迄一里此間に湯道あり、松尾越という。阿弥陀原薬師如来なり。右ハ姨がふところ道、右の尼、石となる女人の形あり。左ハ一の谷道のほりハ此道を往き下向は姨かふところを下る也。上野迄一里此間に二の谷小鎖、一の谷大鎖あり。三条小鍛冶宗近が作という。獅子か鼻の岩屋弘法大師こま修行の灰あり。さゝ峠坂の左の方畜生原、此処にふしきの牛馬を見る事多し、面ハ人間にして四足あり。下市場迄一里此間に鏡石あり。右尼姨かふところにて権現に鏡を上るに石となる、式間四方あり。小杉谷下市場上市場あり。聖霊市をなす故に市場という。左は大日か嶽右は国見か嶽此間に横渡りという処、雪の上五丁はかり往く、かんせきの谷なり。不信心の者畜生出て通り難し。地獄谷の追分あり。右は室堂道なり。左は地獄道高塔婆という処に塔婆あり。右の山ハ大天狗小天狗の御在所なり。室堂式軒、四間二五間余なり。地獄廻り最初さいの河原八寒地獄は大池⁽⁶⁾なり。雪解の水漕り落つ、水色藍の如し。夫ハ百三十六地獄を廻り終二血の池あり。女人成仏の為に血盆経を池中に納む。廻り終りて室堂ニ帰り此夕室堂に籠る。

廿一日天気よし。夜をこめて⁽⁷⁾室堂を発し雪谷を横切二渡り⁽⁸⁾わらしをはきかへ、六道、つり鐘堂あり。懺悔坂、祓堂、夫より一の越五の越までのぼりて御本社なり。伊弉諾伊弉冉の尊を祭る。佐伯有頼公の鎌、大刀其外靈宝多し。又もとの道へ下向する右に玉殿の岩屋あり。奥行拾間余、自然岩屋内に蓮花石金像の弥陀あり。左の脇に矢の穴あり、此矢ハ本社ニ納む。室堂帰り支度してもとの道に帰る。八つ時⁽⁹⁾藤橋を渡り、坊よりの迎として酒行厨⁽¹⁰⁾など贈りけれハ谷河の端にて喫し、暫休息して七つ半⁽¹¹⁾二泉蔵坊ニ帰り宿す。

付録

佐々成政さらゝ越へといふハ、越中富山城主佐々陸奥守成政大軍に囲れ、救兵を信州松本の城に請んとすれと敵海道を遮さして通せず。成政主従七騎に雪中に立山をのり越へ、ざら河へ出て松本に至る。ざら河の下を広川という。湯もとの岩に成政馬の蹄の跡あり。近世加賀の大守立山巡検として三年目ニ家臣麓を巡る。其節此のざら河へも出るという。

登立山懐佐々成政

峯如劔鋒寒最盛 飛鳥唼翼翔猶病 三冬侵雪濟攀雜 驍勇無双源成政
雪風に鳥も通ハぬ 立山をふみ分けへ越し 人をしのはめ
立山ニのぼりつれハ鳥の ○ [白雲の千重をおしわけ天そそり／たかき立山まで上へに□□□□□□の俤を見てなりてと其坂／尊ふとそれハ]

きのふ迄 空になかめし 白雲の上が上へ行 立山のみね

梓弓⁽¹²⁾ 矢竹心に 白雲の立山ふかく いるそ嬉しき

室堂にて薊葉を煮て出したれハ

木綿たすき⁽¹³⁾ 思ひもかけぬ 立山に 薊葉の若葉 くひそめんとハ

廿二日天気よし。泉蔵坊を發す。坊より地走に馬壺疋荷物をのせてみさと村まで送る三里の間なり。(以下略)

2. 乙本・「序」と「本文 立山山中部分」

(1) 「序」

北游藁序

上古跋涉名山靈嶽者少矣。如神武帝躡紀山而出芳野、日本武尊攀白井而躡膽吹為追伐逆賊者、其余雄武之士及精修苦行者、未嘗聞探奇究游覽登涉者、况凡俗之徒乎。皇国大嶽之中富士立峯白山歷世遼邈而尤峻秀也。然上古未曾有跋涉者、漸降至大宝年間而得役居士躡富頂佐伯有頼登立峯泰澄窮白嶺矣。雖然世尚草昧或戰伐之後而無繼其高而躡者惜哉。皇国靈嶽蹊尚茅塞而歷数千歳矣、可謂遺憾之甚歟。近世洛池大雅甲高孺皮勢韓大年有三岳之遊、因号三岳道者唯竊惜其跡、雖奇其文未題亦未聞紀行及吟咏流播於無者也。余幸稟生於昇平之間、不知擊劔汗馬之勞、夜行姦賊之畏矣。得跋涉名山大門之時可喜国恩矣。從未有遠游之癖、粗窮東西之諸勝、未至北陸居諸徃苒逼知命之年矣。友人告余曰「今足下雖康強而無沈痾老至不堪跋涉、時不可失被区々風塵蓋早快速游矣」。余聞此感激、乃請暇老親命駕千里矣。旧友之一言中心藏之記、以為因併述昇平国恩之所致以冠游藁云。

文政五歳次壬午林鐘 源政香 書于保宝葉園⁽¹⁴⁾

(2) 「本文 立山山中部分」

富山駅二而昼飯を喫し岩倉二至る、田中二自然石にて八尺余碑あり、渡過道の三字見えて田中倒れてあれハ外ハ見えす、いかなる碑なりや後人の考をまつ。大森村にて河を渡るによし、大森権現の社あり。岩倉寺社領五十石別当天台宗妻帯。爰に坊舎式十四坊あり、本坊を岩嶺寺といふ。神明 天神 八幡 若宮 岩崎 新宮七社あり。立山大権現ハ伊弉諾、伊弉冉の靈体一切男女の元神にて此峯を城都として上下人の父母なる故に邪正ともに利益す。謂る越の大宮なり。四十式代聖皇文武神託によつて佐伯有頼公を越の領主に下し給ふ。二神わざと鷹に化現して嫡子有頼を峯中に引入、則玉殿岩屋の内にして先代祖々の法を受持し頓悟す。依て慈興と称し中興の開山なり。大宝元年に岩倉寺を立、又四月八日に権現告て曰灵天ニハ峯に住し龍花会を待、上天にハ此処に住してそつ寂光を守る。是垂後の地なり。諸堂精舎を造立し、毎年此日祭礼修行なすへしと云云。今ニ七社の神輿をすへ乗者を揃へ兒の舞法華問答あり。此山の地主ハ手力雄命なり、天平七年行基菩薩此峯によちのほり諸嶽を拜し岩倉寺五智の尊像を造立し講堂に安置したまふ。岩倉より壺里程行てとちの木の下に至茶屋あり、木陰にていと涼し。又半道程行ハ清水あり、津加沢村観音あり、爰にも又清水あり、坂を越へて芦倉村泉蔵坊に舍る、蚊幘用いす。姥堂前橋を浮橋といふ。橋の板数欄干に到る迄皆諸仏菩薩の員数法華經の文字に合して架す。橋本に拾抱余の杉四五本あり。姥堂中尊ハ沙土煮尊、大戸辺尊、惶根尊なり。此山へ天降り玉ふ。其外六十六ヶ国の姥御前の像あり。或説に有頼公の母上像なりといふ。大宝三年八月十二日忌日なる故毎年秋の彼岸の中の日に供養あり。

廿日快晴。夜をこめて姥堂を過ぎあら谷に到る。式丈余の滝あり。藤橋、蔓を引渡して橋となせり。称名川、こかね坂、せんじゆ原、せんじゆ堂あり。是より美女杉まで一里、此間に熊野権現の社あり。昔材木を切出す処に女人来る故材木化して石となる、是を材木坂といふ。かきか首、又鷲の岩屋あり。美女杉といふハ若狭国長良の尼の下女七度浮橋の用木となりて成仏せんと誓つて芽を生し七度目に枯たり。今は切株はかり残れり。此辺水なし。ふな坂まで一里此間にしかりはりとふ穴あり、右の尼かふるをしかりなから小便するに、ならくまで穴通りしとなり。たんさいのみさかと云坂あり。ふたんくハう仏ちんざ、かふるかふる杉となる、廻り八尺はかり高サ三間四方にたれてしんなし、廻り三十間はかりあり。ふな坂よりくわ谷へ一里此間左ニ称名滝を拜ム、ふしおかみといふ。かりやす坂、くわ谷此所に室あり。清水あり、昼飯を喫す。不動堂まで一里此間にくハさき観音堂あり。不動堂ハ式間に三間なり。堂より右へ拾間はかり往て水あり。追分迄一里此間に湯道あり、松尾越といふ。阿弥陀原薬師如来。右ハ姨かふところ道、右の尼、石となる女人の形あり。左ハ一の谷道のほりハ此道下向は姨かふところを下る也。上野迄一里、此間に二の谷小鎖、一の谷大鎖あり。三条小鍛冶宗近が作といふ。獅子か鼻の岩屋弘法大師こま修行の灰あり。さゝ峠坂の左の方畜生原、此処ふしきの牛馬見る、面ハ人間にして四足あり。

下市場迄一里此間に鏡石あり。右尼姨かふところにて権現に鏡を上るに石となる、式間四方あり。小杉谷下市場
上市場あり、聖霊市をなす故に市場といふ。左は大日か嶽右は国見か嶽此間横渡りとい、雪の上五丁はかり往く、
かんせきの谷なり。不信仰のものあれハ畜生出て通り難し、地獄谷の追分あり。右は室道左は地獄道、高塔婆と
いう処に塔婆あり。右の山ハ大天狗小天狗の御在所なり。室ハ式軒、四間二五間余あり。地獄廻り最初さいの河
原八寒地獄ハ大池なり。雪消の水漕り落る水藍の如し。夫ハ百三十六地獄を廻り終ニ血の池あり、女人成仏の為
に血盆経を池中に納む。廻り終りて室堂へ歸る。此夕室堂に籠る。婆沙論ニ南瞻部州下過五百由旬、乃有其獄有
大有小大則八寒八熱小則一々大獄四門各有四、小獄共為十六小獄云云。八大地獄に各有十六別処共百三十六地獄
也。

詠立山歌并短歌

しなさかる⁽¹⁵⁾ こしの国内に 山ハしも さはにあれとも 天雲を 八重おしわけて 天そそり 高き立山 神さひし 高根
を見まく はろはると かたかひ河の 河の瀬の 流にそひて 水上を 尋のほれハ はるかなる 岸をへたてゝ ささかに
の⁽¹⁶⁾ いともあやふく 藤つるを かなたこなたに 引むすひ かけし浮橋⁽¹⁷⁾ 通ひつつ 流れを見れハ 弩の 箭よりもは
やし 瀧ち行 其水音ハ 鳴神の なるにまさりて なるとかや そをきく人ハ 魂も きゆはかりなる 心地して 渡はつれ
ハして立る 杉の木かけの 向つをの 坂道をさへしいはほとし のほるたつきに 朽ちかけし くさりにすかり 岩か
とを ふみならしつ 谷見れハ さかまく水も わきあかり 湯玉たはしり もゆる火の きゆる時なく 立燈 たゆる世
もなく いにしへゆ 今もさかりに 見る人の かたりにすれハ きく人の 見まくほりする 是神山を

反歌

きのふまで 空になかめし 久堅の⁽¹⁸⁾ 雲はふもとに 立山のみね
天そそり そそりたゝせる 白雲を 八重おしわけて 立山のみね

廿一日天快晴。夜をこめて雪谷を横切に渡り行ハ、六道、つり鐘堂あり。懺悔坂、祓堂、夫より一の越、五の越
までのぼりて御本社なり。伊弉諾伊弉冉の尊を祭る、佐伯有頼公の鎌、大刀其外霊宝おゝし。又もとの道へ下る
右に玉殿の岩屋あり。奥行拾間余、自然石岩屋の内に蓮花石金像の弥陀あり。左の脇に矢の穴あり、此矢ハ本社
に納む。室堂に帰り山を下る。八つ時に藤橋につく。宿坊よりの迎として酒行厨など贈りけれハ、暫休息して右
行厨を喫し、七ツ半に泉蔵坊ニ歸り、此夕再泉蔵坊に宿す。

付録

佐々成政さらゝ越へというハ、越中富山城主佐々陸奥守成政大軍に困れ、救兵を信州松本の城に請んとすれと敵
海道を遮て通せず。成政主従七騎に雪中に立山をのり越へ、さら河へ出て松本に至ると云云。ざら河の下を広川
といふ。湯もとの岩に成政馬の蹄の跡あり。近世加賀の大守、立山巡検として三年目に家臣麓を巡る、其節此の
ざら河へも出るといふ。

登立山懐佐々成政

峯若劔鋒寒最盛 飛禽唳翼翔猶病 三冬侵雪濟攀誰 驍勇無双源成政
室堂にて汁のみに薊葉を煮たり。薊葉ハ故郷にあれとも立山ニ而喫しそめしは好因縁とやいはむ。

廿二日快晴 泉蔵坊より馬一疋二荷を載せて送る、みさと村迄行程三里也（以下略）

[註]

- (1) 高孺皮（享保7年～天明4年）は甲斐出身の儒学者、画家。孺皮は字、高芙蓉とも。韓大年（享保12年～寛政7年）は伊勢出身の書家・画家。大年は字、韓天寿とも。共に池大雅と三禅定を成し遂げ、三岳道者と号する。
- (2) 旧暦六月の異称。
- (3) 岩嶺寺から芦嶺寺に向かう道に「津加沢村」の地名は見えない。しかし、文中に「岩倉より壱里程行てとちの木の下に至茶屋あり」、「又半道程行ハ右ニ清水あり、次に津加沢村」とあること、『越中道の記 立山』には横矢村（横江村）に「岩

クラが一。茶や有。」とあること、また『富山県歴史の道調査報告書—立山道—』（富山県教育委員会、1981年）に、千垣で新道と旧道が交差する付近に立山参道三十三観音の石仏（千手観音）が立ち、付近に旅人に飲水を供した場所跡が存在する報告があることから考えて、横江村から半里先の千垣村を指すものと推定される。

- (4) 嬭堂から布橋を過ぎ、藤橋へ向かうほぼ中間点に「荒谷」の地名が存在するが、そこにあった滝については不詳。
- (5) 山絵図に刷られた禅定道案内には「廻り八尺」とあり、政香はこれに依っている。仲語も通常はそれに沿って伝承を語っていたのか、多くの「立山紀行文」ではこの数字を記している。ただ、管見した中で「立山ノ記」には「大キサ十尺圍ナル者アリ」とある。しかもそれに続けて美女杉やしかりばり、禿杉の説話は「一々妄説ヲ為ス。蓋シ流俗ノ附会ナリ。」とあり、仲語の話を一蹴するような書き方をしているので、敢えて素直に八尺を取らなかったのかもしれない。
- (6) みくりが池。
- (7) 夜が明けきらないうちから。
- (8) 本文註(42)と同じ。
- (9) 午後2時頃。
- (10) 酒と弁当。『三禅定道中記』①、②では具体的に酒一樽と赤飯の弁当とある。
- (11) 午後5時頃。
- (12) 歌は、立山の奥深くまで登って来てきたことを感慨深く、嬉しく感じたとの意であろう。梓弓は「射る」に掛かる枕詞。「いる」は「居る」と「射る」の掛詞。弓、矢、射る、は縁語。
- (13) 「掛く」に掛かる枕詞。ここでは「思いがけずに」の意味を導く。禪、掛ける、は縁語。
- (14) 磯泊散人、臥蝶園、仙雲亭寿山など同様、政香の号の一つ。ここでは政香の寓居を指す。
- (15) 「越」に掛かる枕詞。
- (16) 「糸」に掛かる枕詞。ここでは「糸」を副詞の「いと」と掛詞にしている。
- (17) 「天の浮橋」(布橋)ではなく、藤橋のこと。
- (18) 「雲」に掛かる枕詞。



写真1 「立山曼荼羅立山博物館H本」(当館蔵)より部分
「びじよう杉」と名付けられた杉(美女杉)が切株から新たな幹や葉を茂らせている。



写真2 「越中国立山禪定名所附図別当岩嶽寺」(当館蔵)より部分
 囲み部分2箇所 (雄山頂上御本社下、懺悔坂の右側)に「かねつき (鐘撞)堂」が見える。

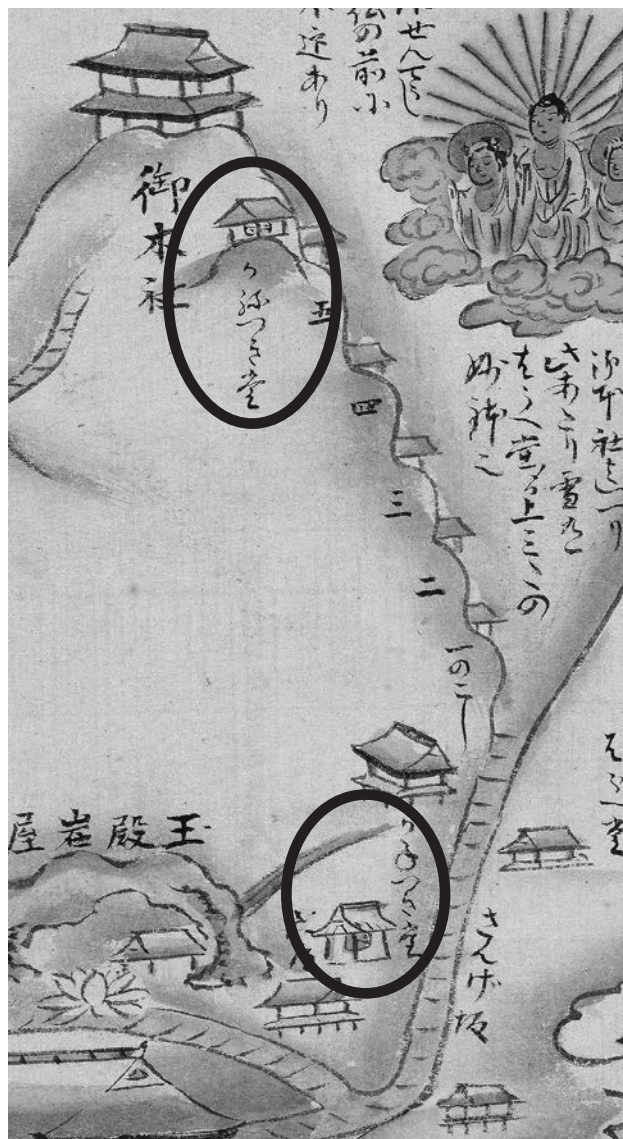


写真3 「立山曼荼羅立山博物館E本」(当館蔵)より部分
 囲み部分2箇所 (雄山頂上御本社下、懺悔坂の右側)に「かねつき (鐘撞)堂」が見える。

〈研究余録〉『日本旅行案内』 2版から4版における“TATEYAMA”の変化について

河野 史明

はじめに

日本政府観光局は、2025年11月の訪日外客数は3,518,000人で前年同月比では10.4%増となった。11月までの累計では39,065,600人となり、年間で過去最高を記録した2024年の36,870,148人を上回った⁽¹⁾。ヨーロッパでは、中部地方を縦断する旅行コースは日本の古い町並みや原風景に出合える「サムライルート」と呼ばれ人気を博し、富山県内における外国人宿泊者数も年々増加し、立山も多くの外国人観光客で賑わいをみせている。

今から150年ほど前、西洋諸国には空前の世界旅行ブームが訪れていた。1867年の汽船による太平洋横断の定期航路開設、1869年のスエズ運河開通により、世界旅行は従来よりも格段に容易となっていた。世界旅行が盛んになったことで、未知の土地について紹介する旅行ガイドブックの需要が高まった。西洋諸国では日本について紹介するガイドブックがいくつも出版された。

明治14年（1881）、駐日イギリス公使館の書記官だったアーネスト・サトウとA・G・S・ホースは、自身らが旅した日本の都市や山岳地域の情報をまとめ、外国人向けの日本旅行ガイドブック『中部・北部日本旅行案内』を出版した。3版以降はバジル・ホール・チェンバレンとウィリアム・ベンジャミン・メーソンに編集者が代わり、『日本旅行案内』として最終的に1913年の9版まで刊行された（写真1）。このガイドブックを片手に、多くの外国人が日本各地を旅したとされる。立山は「越中と飛騨」というルートの中で紹介され、サトウを含むイギリス人たちが立山を訪れた際の経験をもとに、自然、順路、宿泊先、見どころが記載されている。

版を重ねるごとに情報は更新され、立山を扱ったルートも版によって内容が異なっている。本稿では、最も“TATEYAMA”についての記述が豊富だった2版（1884年刊）から、W・ウェストンによる立山登山（1893年）の情報が採用された4版（1894年刊）における“TATEYAMA”に関する記述を取り上げ、その変化についてまとめていく⁽²⁾。

1. 各版における“TATEYAMA”の記述

『日本旅行案内』⁽³⁾（原題は*HANDBOOK FOR TRAVELLERS IN JAPAN*）において“TATEYAMA”を含む飛騨と越中の山岳地帯を巡るルートのページ数は〈表1〉となっている。

版次	刊行年	編集者	総頁数	ルートのタイトル	頁数
初版	明治14年(1881)	サトウ、ホース	510	ルート30 越中と飛騨	18
2版	明治17年(1884)	サトウ、ホース	705	ルート34 越中と飛騨	25
3版	明治24年(1891)	チェンバレン、メーソン	459	ルート34 越中と飛騨の山	10
4版	明治27年(1894)	チェンバレン、メーソン	528	ルート30 飛騨と越中の山	12
5版	明治32年(1899)	チェンバレン、メーソン	577	ルート36 飛騨と越中の山	16
6版	明治34年(1901)	チェンバレン、メーソン	579	ルート31 飛騨と越中の山	16
7版	明治36年(1903)	チェンバレン、メーソン	586	ルート28 飛騨と越中の山	16
8版	明治40年(1907)	チェンバレン、メーソン	570	ルート30 飛騨と越中の山	16
9版	大正2年(1913)	メーソン	555	ルート29 飛騨と越中の山	16

2版から3版にかけてページ数が減少した理由は編集者の交代に伴う、編集方針の転換によるものである。1884年の出版前にサトウはバンコク総領事、ホースはナイアサ総領事となり日本を離れており、国外からの編集作業は難しく『日本旅行案内』は絶版状態となっていた。続版の出版をのぞむサトウが、初版時から情報提供者としてかかわっていたチェンバレンとメーソンに託す形で3版から編集者が変更された。チェンバレンが同時期に執筆していた『日本事物誌』との内容的な重なりを避けるために、『日本旅行案内』の一部分が『日本事物誌』に移転されることとなった⁽⁴⁾。全体のページ数減少に伴って、ルート全体及び“TATEYAMA”に関する記述も2版から3版にかけて減少している。2版では2ページ半ほどを割いて記述されている“TATEYAMA”（写真2）が、3版では0.75ページほどの分量となっている。4版では少し文章量が増えて、約1ページとなっている。4版の序文（写真3）にあるように、ウェストンから「ルート30飛驒と越中の山」の改訂について助力を受けたと書かれており、その影響で内容が微増していると考えられる（下記の4版序文の波線箇所）。

〈1894年刊行の4版序文〉

Since the publication of the previous edition of the Japan Handbook in 1891, the compilers have again travelled over almost every portion of the country, from Yezo to Loochoo. They now submit to the reader a text largely re-written and thoroughly revised to date, fifteen new Routes in which the whole Empire is for the first time included, greatly improved maps and plans, and numerous illustrations.

Grateful acknowledgments are due to numerous kind friends, more especially to Rev. Walter Weston for revising the Mountain Routes 28 and 30, and to Lafcadio Hearn, Esq., for the material of Route 48.

Corrections or suggestions will be welcome at any time.

Tōkyō, May 1st, 1894.

〈翻訳〉

1891年に第3版を出版してから、編集者たちは再び、蝦夷から琉球に至るまで、国内のほぼ全域を旅した。この結果、第3版の相当部分を訂正し、最新の材料で書き直した。また、15のコースを新たに採用した結果、はじめて日本全域を対象とすることとなった。地図と旅行プランと図版にも大幅な改訂を施した。数多くの親切な友人たちに感謝の意を表す。特に、山岳ルート28と30の校閲をしてくれたウォルター・ウェストン師、そしてルート48の資料を提供してくださったラフカディオ・ハーン氏に深く感謝する。修正やご提案はいつでも歓迎する。

①2版における“TATEYAMA”（英文抜粋と翻訳）

Tate-yama is name given to the lofty summits lying on the eastern border of the province of Etchiū, and which together with the jagged peak of Tsurugi-dake, form the northern extremity of the most considerable range of mountains in Japan. The highest of the peaks(Go-honsha), is about 9,500 ft. above the level of the sea.

The main ascent leads up the western side of the mountain from the hamlet of Ashikura, which can be reached either from Kamidaki of Hara mura. There are no inns, but good accommodation can be had at the house of Saiki Masanori. In a grove of trees close by is situated a small temple dedicated to Ariyori, the hero who first succeeded in ascending Tate-yama. After death he was deified, and to the present day pilgrimages are made to the mountain, which is still sacred to his memory. His grave, stands close behind this temple which a small railed enclosure. It differs from the ordinary style of grave, being a mound about 8 ft. square, built up to a height of 4 or 5ft. with stone-faced sides. On the top of this mound grows a small

evergreen called shirakake. The temple, name Ōyama no jin-ja, is simply an unpretending wooden building. It contains a shrine of red and black lacquer ornamented with the crests of the family of Ariyori and of the former dai-miō of Kaga. The ceiling consists of square panels of birds and flowers, The road up to the mountain at first winds along the r. bank of the Jō-gwan-ji-gawa, and crossing a rapid stream which flows down from the Sho-miō taki, a cascade of some considerable height on the slope of Tate-yama, reaches the Zai-moku-zaka, where commences the actual ascent, which at the first is extremely steep, in many places up almost precipitous rocks. The trees of this part of the forest are singularly magnificent. Some well-formed hexagonal columns of andesite over which the way passes are the subject of the following legend. Ages ago, when the original Tate-yama temple was being built, a quantity of timber had been cut and prepared on this hill to be brought down, but a woman who had ventured up carelessly walked over the prostrate trunks, which immediately changed to stone. The name of Zai-moku-zaka, Timber Hill was bestowed on the place in consequence. Near the top of this hill from an opening on the 1. the Sho-miō taki can be indistinctly seen through the trees. For upwards of 3 ri beyond this point the ascent is very arduous, especially after heavy rain, when the path is little better than a track or liquid mud, in most places more than a foot in depth. Occasionally deep pools, decayed roots of trees, branches and other rotten debris add their quota to the difficulties. Emerging on to a plateau, and baths of Riū-zan-jita falls in on the r. Higher up the road ascends the rocky beds of several small streams, and passes r. a large flat block of stone, supported vertically and called kagami ishi(mirror rock),beyond which, on looking back, there is an extensive view of Etchiū with its numerous rivers, of the promontory of Noto and of the sea, and nearer, of the Yu-gawa valley. A little further on a narrow path on the 1. View is obtained of the Sho-miō taki. The road now ascends the boulder-covered side of the mountain, passes over several streams, and skirting the bottom of a snowy slope, crosses a bare shoulder to the Muro-dō(hut). During the whole ascent from Ashikura to the Muro-dō, a distance of over 20 miles the only shelter to be got consists of 3 wretched sheds. One of them, however, about 4 ri from Ashikura, possesses a spring of good water. Beeches and huge cryptomerias are the most common trees on this mountain, but they occupy separate localities, divided off by deep ravines. Chestnuts and horse-chestnuts are also met with. In a valley situated about 6 ch. to the 1. Of the Muro-dō are the remarkable solfataras of Ō-jigoku. The road thither, after passing between two tarns, one of which, to judge from the appearance of its almost vertical sides, is most likely an old crater, reaches the brow of a hill which commands a birds-eye view of the springs. The whole valley below seems as if it were alive with bubbling pools of boiling mud and sulphur. Descending the stony side of the hill, the soft and crumbing bottom of the valley is reached. It is here advisable to be careful in picking the way, for in some places the small hillocks of sulphur over which it is necessary to pass are unbearably hot, and a false step might plunge the unwary visitor into the depths of the boiling liquid below. The bottom of the valley is broken up by two or three mounds composed of a mixture of sulphur and white rock. Jets of steam mixed with sulphuretted hydrogen, issue from clefts in the sides of these mounds, in one place with a terrific noise, and with such force as to carry lumps of the deposited sulphur 10 to 15 ft. away. In some of the pools boiling water of a dark green colour is projected to a height of several feet, and falling back into its pit, is again thrown up with equal violence. In others, a yellowish mud is tossed about with the same activity. The temperature of these pools varies, that of the highest being 190°F.

The Muro-dō is in a most wretched condition, and the traveller must not be disappointed at having to put with great discomfort. One of the worst annoyances is the wood fire. The hut becomes filled with some, blinding and painful in the extreme, and it is only possible to avoid its suffocating effects by lying flat on the

floor. The hut is open for the accommodation of pilgrims during 50 days, from July 20 to September 10. No bedding is procurable, nor any food but boiled rice.

To the summit, called Go-hon-sha, is a distance of 1 ri. A short stretch of level ground, partly covered with snow, lies between the hut and the base of the first shrine (860ft. above the Muro-dō), tolerably easy. Beyond this point, however, it becomes difficult. From the second shrine (1,050ft. above the Muro-dō), the first view of Fuji is seen, and a short climb then lands the traveller upon the ridge, from which the actual summit of Tate-yama, crowned with a very picturesque temple, rises sharply. The ascent from the Muro-dō can be accomplished in 1 hr. not including stoppages. The summit on a clear day, commands a most imposing survey on every side. The number of mountains to be distinguished is perhaps greater than from any other elevation in Japan. To the extreme¹, looking eastward, are seen Myōkō-san, Myōgi-san, and Yoneyama in Echigo, Nantai-zan near Nikkō, and Togakushi-san and Asama-yama in Shinshū. Towards the S. rises the range of Yatsu-ga-take, with the isolated peak of Tateshina-yama, beyond which are seen Fuji and the high peaks of Shirane and Koma-ga-take in Kōshū. Yari-ga-take, Norikura, Kasa-ga-take, and in closer proximity, Yakushi-dake, all in Hida. To the S.W. is Haku-san on the borders of Kaga. Below to the N. the view is bounded by the Sea of Japan.

Instead of descending to Ashikura it is possible to take a short cut to Kurobe by crossing over the ridge of Jō-do-san and entering the valley of Gozen-dani. The distance is said to be only 2 1/2 ri, but the difficulties of the journey are so great that Kurobe can hardly be reached in less than 6 or 7 hours. The path branches off 1. from the first shrine above the Muro-dō, and descending a grassy slope, comes to a difficult and dangerous talus of loose stones. In next follows the rocky course of a cold mountain stream, then crosses a gentle snow slope, and rejoins the river-bed of the same stream. Further on it ascends a tributary stream flowing down the valley on the 1. Of Jō-do-san, and then diverging to the 1. up a smaller bed, crosses the ridge dividing Tate-yama from the valley of the Zara-goye. This part of the journey is extremely fatiguing, the ascent to the top of the ridge being very steep and precipitous. Near the summit the path winds to the 1. and soon being rapidly to descend. Great care is now required to avoid bruises from the sharp stones which form the side of the hill, as they are treacherously hidden by the creeping dwarf alder and thick masses of bamboo grass. On reaching the stream at the bottom of the ridge, its course should be ascended for 1/2 hr. to the point where it is crossed by the Shin-dō.

〈翻訳〉

立山とは、越中の東部境に聳える高峰群の総称であり、劔岳の険しい峰と共に、日本有数の山脈の北端を形成している。主峰（御本社）の標高は約9,500 フィート（※約2,900m）である⁽⁵⁾。主な登山道は、原村の上滝からアクセス可能な芦嶽集落より、山の西側を登る。宿屋はないが、佐伯正範の家では質の良い宿泊が可能である。近くの林には、立山開山の祖といわれている有頼を祀る小さな神社が建っている。彼は死後神格化され、今日でも立山信仰の信者は彼を祈念した神聖な立山へ向かう。彼の墓は、柵で囲まれた小さな境内からすぐ後ろに立っている。通常の墓の様式とは異なり、約8フィート四方の塚で、側面は石で、高さ4～5フィートまで築かれている。この塚の頂上にはシラカケと呼ばれる小さな常緑樹が生えている。雄山神社と呼ばれるこの寺院は、質素な木造建築に過ぎない。内部には赤黒の漆塗りで、有頼家と旧加賀藩主の家紋を飾った神殿が安置されている。天井は鳥や花の文様を施した四角い板で構成されている。

立山への登山道は、まず常願寺川の右岸に沿って走り、立山の斜面からかなりの落差で落ちる称名滝の下流部で急流を渡って材木坂に達する。ここから本格的な登りが始まり、最初のうちは極めて急峻で、多くの場所でほぼ断崖絶壁の岩肌を登ることになる。この森の樹木は格別に雄大である。山道が安山岩で構成され

ている多角形の岩柱の上につけられている。ここには次のような伝説が残されている。はるか昔、最初の立山神社が建てられていた頃、この丘で伐採された大量の木材が運び出される準備が整っていた。しかし、不用意に登ってきた一人の女性が倒れた丸太の上を歩いたところ、丸太はたちまち石へと変わった。このため、この場所は「材木坂」の名で呼ばれるようになった。

この坂の頂上近く、1番の開けた場所からは、木々の間から称名滝がかすかに見える。この地点から先、3里以上に渡っての登りは非常に険しく、特に大雨の後には、道はほとんど泥沼同然で、深さが一尺以上にもなる。所々に深い水たまりや腐った木の根、枝、その他の朽ちた残骸が困難を増す。高原に出ると、右手に立山温泉からの山道が合流してくる。石ころの多い沢道をいくつかさらにのぼって行くと「鏡石」と呼ばれている垂直に立つ大きな平たい石の右側を通り過ぎる。その先で後ろを振り返ると、無数の川が流れる越中の平野、能登の岬と海、近くには湯川溪谷の広大な景観が見える。さらに進むと、狭い道から称名滝が見える。道は岩だらけの山の斜面を登り、いくつかの沢を渡り、残雪の斜面の麓を迂回して、むき出しの尾根を越え、室堂に至る。芦嶺から室堂までの20里余りの登り道全体で、利用できる避難小屋は3軒の粗末な小屋だけである。しかしながら、うち一軒は芦嶺から約4里の地点にあり、綺麗な湧き水がある。

この山ではブナと巨大なスギが最も一般的な樹木である。両者は深い溪谷を境にして別々の地域に分布している。クリやトチノキも見られる。室堂から左手6町ばかり先の溪谷には大地獄と呼ばれる珍しい硫気孔群がある。そこへ向かう道は2つの池の間を通り過ぎるが、その一つはほぼ垂直な側面から判断して、おそらく古い火口である。道は丘の頂部に達し、そこから噴気孔群を一望できる。眼下の谷全体が沸騰する泥と硫黄の泡立つ池で生きているかのようだ。岩だらけの斜面を下ると、柔らかく崩れやすい谷底に到達する。ここで道を選ぶ際は注意が必要だ。通過せざるを得ない硫黄の小丘が耐え難いほど熱く、一歩間違えれば不用意な訪問者は下方の沸騰する液体へ転落しかねないからだ。谷底は硫黄と白色の岩石が混ざった2、3の丘によって分断されている。これらの丘の側面に走る裂け目からは硫化水素を伴う蒸気が噴出し、ある場所では恐ろしい轟音と共に、堆積した硫黄の塊を10～15フィートも吹き飛ばすほどの勢いで噴出する。中には、濃い緑色の沸騰水が数フィートの高さまで噴き上がり、再び穴に落ちると同等の勢いで跳ね上がる。他の池では、黄色がかった泥が同じ勢いで激しく攪拌されている。これらの池の温度は様々で、最も高温のものは華氏190度（※約88℃）に達する。

室堂は極めて悲惨な状態で、旅行者は大きな不快を強いられることに失望してはならない。最も厄介なのは薪の火である。小屋は煙で充満し、目もくらむほど痛みを伴い、床に伏せなければ窒息しそうだ。この小屋は7月20日から9月10日までの50日間、巡礼者の宿泊に開放される。寝具は用意されておらず、食事は炊いた米のみである。

頂上である峰本社までは1里の距離である。小屋から最初の祠（室堂より860フィート上）までは、雪に覆われた平坦な短い道が続き、比較的容易である。しかしこの地点以降は険しくなる。2番目の社（室堂より1,050フィート上）から初めて富士山が見える。短い登攀で尾根に到達すると、絵のように美しい本殿が山頂に鎮座する。室堂からの登攀は休憩を除けば1時間で可能である。

晴天の山頂からは、四方を見渡す圧倒的な眺望が広がる。識別可能な山々の数は、おそらく日本国内の他の高所から眺めるよりも多い。東の果てには、越後の妙高山、妙義山、米山、日光の男体山、信州の戸隠山と浅間山が見える。南には八ヶ岳連峰が聳え、孤峰の蓼科山を配し、その向こうに富士、甲州の白根山や駒ヶ岳の高峰が望める。飛騨方面には槍ヶ岳、乗鞍、笠ヶ岳、そしてより近くには薬師岳が連なる。南西には加賀との国境にある白山が聳え、西方の眼下には加賀と越中の平野が広がり、神通川と常願寺川の流れが越中の平野を潤している。北には日本海が見える。

立山から芦嶺へ下山する代わりに、浄土山の尾根を越えて御前谷へ入る近道で黒部へ至ることも可能である。距離はわずか2.5里と言われるが、道の険しさは極めて厳しく、6～7時間以内で黒部に到達することはほぼ不可能である。道はまず、室堂小屋の上にある最初の祠から分岐し、草の生えた斜面を下ると、崩れ

やすい岩屑の危険な斜面に出る。次に冷たい溪流の水辺を進み、緩やかな雪斜面を横切り、再び同じ川の河床に戻る。さらに進むと、浄土山の谷を流れる支流を登り、やがて分岐してより細い川床を登り、ザラ越えの谷と立山の間の一つの尾根を渡る。この区間は極めて疲労が激しく、尾根頂上への登りは非常に急峻で険しい。頂上付近で道は左に曲がり、すぐに急な下りがはじまる。丘の斜面を構成する鋭い石は、このような低木や竹の茂みに不意に隠れているため、打撲傷を防ぐには細心の注意が必要だ。尾根の麓の小川に到達したら、その流れを30分ほど遡り、信越新道が交差する地点まで進む⁽⁶⁾。

②3版における“TATEYAMA”

Tateyama is the collective name given to the lofty summits which stand on the E. border of the province of Etchū, and which, together with the jagged peak of Tsurugi-dake, form the N. extremity of the greatest range of mountains in Japan. The highest of the peaks(Go-honsha), is about 9.500 ft. above the level of the sea. The main ascent leads up the W. side of the mountain from the hamlet of Ashikura, which can be easily reached from Toyama.

The road up the mountain is arduous in parts, nor is there any shelter, except two or three wretched huts, to be got during the whole distance of 20 m. from Ashikura to the Muro-dō, 21/2m. from the summit. The Muro-dō itself is but a somewhat better hut, which is opened for the accommodation of pilgrims from the 20th July to the 10th September. No bedding is procurable, nor any food except rice.

[In a valley situated about 6 chō to the 1. of the Muro-dō are the remarkable solfataras of Ōjigoku (Big Hell). The whole valley seems alive with pools of boiling mud and sulphur.]

From the Muro-dō hut to the highest summit, whose name of the Go-honsha comes from the picturesque temple with which it is crowned, is 1 hr. climb, partly over snow. At the end, a truly superb panorama unfolds itself before the spectators gaze. The number of mountains to be distinguished is extraordinarily great. To the extreme 1. looking eastward, are seen Myōkō-san, Myōgi-san, and Yoneyama in Echigo, Nantai-zan near Nikkō, and Togakushi-san and Asama-yama in Shinshū. Towards the S. rises the range of Yatsu-ga-take, with the isolated peak of Tateshina-yama, beyond which are seen Fuji and the high peaks of Shirane and Koma-ga-take in Kōshū. Yari-ga-take, Norikura, Kasa-ga-take, and in closer proximity, Yakushi-dake, all in Hida. To the S.W. is Haku-san on the borders of Kaga. Below to the N. the view is bounded by the Sea of Japan.

〈翻訳〉

立山とは、越中国東端に聳える高山の総称であり、劔岳の険しい峰と共に日本最大の山脈の北端を形成する。主峰（御本社）の標高は約9,500フィート（※約2,900m）である。主要な登山道は、富山から容易にアクセス可能な芦峯集落から山の西側を登る。

登山道は所々険しく、芦峯から室堂までの20マイル（※約32km）、頂上まで2.5マイル（※約4km）の全行程において、粗末な小屋が二・三軒ある以外、避難場所はない。室堂自体は少しましな小屋に過ぎず、7月20日から9月10日まで巡礼者の宿泊のために開放される。寝具は入手できず、食事も米以外にはない。

[室堂から約6町（※約654m）北にある谷間には、大地獄の特異な噴気孔群がある。谷全体が沸騰する泥と硫黄の池で生きているように見える]

室堂小屋から最高峰である御本社（頂上に建つ絵のように美しい寺院に由来する名称）までは、一部雪上を含む1時間の登攀である。頂上では、まさに壮観なパノラマが観る者の眼前に広がる。識別できる山々の数は並外れて多い。東を極限に見渡せば、越後の妙高山・妙義山・米山、日光近郊の男体山、信州の戸隠山・浅間山が望める。南には八ヶ岳連峰が聳え、孤峰の蓼科山を配し、その向こうに富士山と甲州の白根山・駒ヶ岳の高峰が望まれる。飛騨には槍ヶ岳、乗鞍、笠ヶ岳、そしてより近くには薬師岳が連なる。南西には加賀国境の白山が聳え、北下には日本海が眺望の限界を画している。

③4版における“TATEYAMA”（4版での追加箇所には二重下線を引いた）

Tateyama is the collective name given to the lofty summits which stand on the E. border of the province of Etchū, and which, together with the jagged peak of Tsurugi-dake, form the N. extremity of the greatest range of mountains in Japan. The highest of the peaks(Go-honsha), is about 9.500 ft. above the level of the sea. The main ascent leads up the W. side of the mountain from the hamlet of Ashikura(accommodation at the Shintō priest's house), which can be reached from Toyama via Kamidaki. The distances are: Toyama to Kamidaki, 3ri20chō by jinrikisya; thence on foot to Ashikura, 3ri8chō,- making 161/2m. altogether.

The way up to the mountain is arduous in parts, nor is there any shelter, expect two or three wretched huts, to be got during the whole distance of 20 m. from Ashikura to the Muro-dō, 21/2m. from the summit. The Muro-dō itself is but a somewhat better hut, which is opened for the accommodation of pilgrims from the 20th July to the 10th September. No bedding is procurable, and little food except rice can be depended upon.

[In a valley situated about 6 chō to the 1. of the Muro-dō are the remarkable solfataras of Ōjigoku (Big Hell). The whole valley seems alive with pools of boiling mud and sulphur.]

From the Muro-dō hut to the highest summit, whose name of the Go-honsha comes from the picturesque temple with which it is crowned, is 1 hr. climb, partly over snow. At the end, a truly superb panorama unfolds itself before the spectators gaze. The number of mountains to be distinguished is extraordinarily great. To the extreme 1. looking eastward, are seen Myōkō-san, Myōgi-san, and Yoneyama in Echigo, Nantai-zan near Nikkō, and Togakushi-san and Asama-yama in Shinshū. Towards the S. rises the range of Yatsu-ga-take, with the isolated peak of Tateshina-yama, beyond which are seen Fuji and the high peaks of Shirane and Koma-ga-take in Kōshū. Further S. again are Koma-ga-take and Ontake in Shinshū; Yari-ga-teke, Norikura, and Kasa-deke, with closer proximity Yaku-shi-dake,- all in Hida. To the S.W. is Haku-san on the borders of Kaga. Below to the W. lie the plains of Kaga and Etchū, the latter watered by the rivers Jinzū and Jōgwanji, while to the N. the view is bounded by the Sea of Japan.

The travellers who succeeds in reaching Ryūzan-jita will find the climb from there up Tateyama far preferable to that from Ashikura; for though the first part of the ascent is very steep, the whole expedition can be comfortably accomplished in one day, if the start be made at daybreak, and thus the night need not be spent in the crowded and uncomfortable Murodō, with its host of pilgrims and fleas. A little more than 1hr. climb up the cliffs by the pilgrim's path just opposite the baths lands us on the edge of a wide plateau called Mida-ga-hara, the view from near the top of the ridge being exceptionally fine. The track is then fairly level, though generally wet and slippery for some distance, and ultimately falls in the path leading from Ashikura to the summit.

〈翻訳〉

立山とは、越中国東端に聳える高山の総称であり、劔岳の険しい峰と共に日本最大の山脈の北端を形成する。主峰（御本社）の標高は約9,500フィート（※約2,900m）である。主要な登山道は、富山から上滝經由で到達が可能な芦峯集落（神官宅に宿泊可）から山の西側を登る。距離は次の通り：富山から上滝まで人力車で3里20町（※約14km）、そこから芦峯まで徒歩で3里8町（※約12.5km）、合計16.5マイル（※約26.5km）。

登山道は所々険しく、芦峯から室堂までの20マイル（※約32km）、頂上までの2.5マイル（※約4km）の全行程において、粗末な小屋が2、3軒ある以外、避難場所はない。室堂自体は少しましな小屋に過ぎず、7月20日から9月10日まで巡礼者の宿泊用に開放される。寝具は入手不可能で、米以外の食料はほとんど期待できない。

[室堂から約6町（※約654m）北の谷間には、大地獄の特異な噴気孔群がある。谷全体が沸騰する泥と硫黄の池で生きているように見える。]

室堂小屋から最高峰である御本社（頂上に立つ絵のように美しい寺院に由来する名称）までは、一部雪上を含む1時間の登攀である。頂上では、まさに壮観なパノラマが観る者の眼前に広がる。識別できる山々の数は並外れて多い。東を極限に見渡せば、越後の妙高山・妙義山・米山、日光近郊の男体山、信州の戸隠山・浅間山が望める。南には八ヶ岳連峰が聳え、孤峰の蓼科山を配し、その向こうには富士山と甲州の白根山・駒ヶ岳の高峰が望まれる。さらには信州の駒ヶ岳・御嶽山、飛騨の槍ヶ岳・乗鞍岳・笠岳、そしてより近い位置にある薬師岳が連なる。南西には加賀国境の白山が聳える。西に下れば加賀・越中の平野が広がり、後者は神通川と常願寺川に潤されている。北は日本海に視界が遮られる。

立山下までたどり着いた旅人は、そこから立山へ登る方が芦峯からの登りよりはるかに好ましいと気づくだろう。登り始めは非常に急峻だが、夜明けに出発すれば一日で快適に登頂できる。こうすれば、巡礼者とノミで溢れかえる狭く不快な室堂で夜を明かす必要はない。立山温泉の真向かいに位置する巡礼路を、崖を登って1時間少々進むと、広大な台地「弥陀ヶ原」の縁に到達する。尾根の頂上付近からの眺望は格別に素晴らしい。その後は概ね平坦な道となるが、しばらくの間は湿って滑りやすく、最終的に芦峯から山頂へ続く道と合流する。

2. 各版における記述の変化について

①2版から3版について

編集者がアーネスト・サトウとA・G・S・ホースからバジル・ホール・チェンバレンとウィリアム・ベンジャミン・メーソンに変更した影響が見られる。2版までの『日本旅行案内』に記載されていた学術的な内容が、チェンバレンによって『日本事物誌』に転載され全体のページ数が大幅に削減されたため、立山の項目でも佐伯有頼や材木坂の伝説が省略され、地獄谷の詳細な説明も外された。

②3版から4版について

先述したように4版の序文では情報提供者としてウェストンの名前が登場する。ウェストンは1888年4月に英国国教会伝道協会の宣教師として来日した。神戸や大阪で、新任宣教師として日本語の学習や、日本の地理、生活や習慣、仏教とキリスト教の現況などを学んだ後、10月に熊本へ赴任した。その後、眼病の治療のために横浜へ通うことが増え、1890年の1月頃に宣教師を辞任している。チェンバレンとウェストンがどのように接点を持ったのかは定かではないが、宣教師を辞任したウェストンに、チェンバレンは日本

の山々を探検し、その標高や動植物、登路などを外国人に紹介するよう勧めていたとされる⁽⁷⁾。4版の英文抜粋及び翻訳で二重下線をひいた部分（4版での追加箇所）がウェストンから情報提供があった部分と考えられる⁽⁸⁾。ウェストンの著書から1893年の立山での行程を確認し、追加部分の記述との関係についてみていきたい⁽⁹⁾。

【1893年のウェストン行程】

- 8月3日（木） 出発地不明－〈汽車〉－横川
- 4日（金） 横川－〈汽車〉－長野（善光寺、長野測候所）－新橋－矢の尻峠－新町
- 5日（土） 新町－日名－左右－大町
- 6日（日） 安息日
- 7日（月） 大町－野口－大出－箆川谷
- 8日（火） 扇沢雪溪－針ノ木峠－針ノ木谷－黒部川－平
- 9日（水） 平－ヌクイ谷－ヌクイ谷峠－ザラ峠－湯川－立山温泉
- 10日（木） 休養
- 11日（金） 立山温泉－松尾峠－弥陀ヶ原－姥石－室堂－雄山－室堂－地獄谷－松尾峠－立山温泉
- 12日（土） 立山温泉－原－小見－上滝－〈荷車・人力車〉－富山
- 13日（日） 安息日 14日以降は笹津方面へ向かい安房峠を通り松本へ

11日（金）が立山でのメインの行程であり、この時の情報が『日本旅行案内』（4版）に反映されている可能性が高い。全部で4つある追加箇所と1893年の行程を照らし合わせてみる。

【4版での追加箇所】

- (i) 芦峯集落について、「神官宅」での宿泊が可能であること。
- (ii) 上滝から富山までの移動方法と距離が具体的に記されていること。
- (iii) 雄山山頂からの眺望で、御嶽山が追加されていること。
- (iv) 立山温泉から雄山山頂へのアクセスを推奨していること。

(i) 芦峯の神官宅について

2版では“*There are no inns, but good accommodation can be had at the house of Saiki Masanori.*”と佐伯正範の家で宿をとることができることと記述されていたが、3版では芦峯集落について触れるのみで宿については書かれていなかった。2版までの編集者であるサトウとホースは1878年の7月26日と27日に芦峯の雄山神社の神主であった佐伯正範（等覚坊）の自宅に宿泊しており、サトウの日記や『日本旅行案内』には雄山神社の様子や佐伯正範と会話した際の内容が記述されている⁽¹⁰⁾。4版では“*Ashikura (accommodation at the Shintō priest's house)*”と具体的な人物名こそ書いてはいないが神社の神官の家という、2版で書かれていた佐伯正範のことを指すと考えられる記述が見られる。しかし、チェンバレンとメーソンはもちろん、ウェストンも1893年には芦峯寺を訪れていない。この部分に関しては、ウェストンからの情報提供ではなく、編集者の2人が宿泊情報をより具体的にするために2版の記述を復活させたと考えられる。

(ii) 上滝－富山間の移動方法と距離について

1893年のウェストンは上滝－富山間を移動しており、距離が具体的に記載されている。上滝では人力車を雇えるだろうと聞いていたが、村中を捜し廻っても1台しかなく、それも修繕が必要な状態だった。結局、荷車（四輪の手車的一种）に荷物を縛りつけ、その荷物の天辺に乗り上滝を出発した。珍しい移動方法に最

初は気分も高揚していたが、乗り心地と速度に納得がいなかったようで、出発して30分後に出会った人力車に乗り換えて富山へと向かっている⁽¹¹⁾。

(iii) 雄山山頂からの眺望について

3版までは1879年のアトキンソンとディクソンの登山情報を参考に頂上からの眺望について執筆されており、ここに初めて御嶽山が追加された⁽¹²⁾。しかし、ウェストンは *Mountaineering and exploration in the Japanese Alps* の中で、雄山から御嶽山が見えたということは書いておらず、眺望ではなく山頂での巡礼登山者や神官による儀式の様子について詳しく記述している⁽¹³⁾。ウェストンが英国地理学協会の理事に宛てた書簡や⁽¹⁴⁾、英国山岳会年次総会での、ウェストンの日本における活動の紹介でも1893年の雄山山頂上からの眺望については触れられていない⁽¹⁵⁾。チェンバレンとメーソンが御嶽山の情報をウェストンから得て追加したのかは判然としない。

(iv) 立山温泉から雄山山頂へのアクセスを推奨について

ウェストンは1893年の8月11日の早朝に立山温泉を出発し、雄山登頂後、15時ごろに再び立山温泉に戻って宿泊している。立山温泉について下記の感想を記している。

私は温泉風呂の豪華な湯の中に気持ちよく浸っていた。こうしたコスモポリタンな日本の「風呂」で一番変な光景の一つは風呂を浴びている人が真面目くさっていることだった。どんなにその気持ちよい暖かさがこわばった手足を柔らかくしようとも、お互いのあいだの礼儀は少しも崩れはしない。ある外国人が、山の探検をした後に、ある温泉風呂にはいったら、同じ浴室にいた黄色の皮膚の人から、面と向って、ねんごろに挨拶をされて、ずいぶん驚いたことを私は聞いている。その人というのは日本人の友人と分かったが、彼は温泉にはいりその山の遊山地に妻子を連れて来たのだった。そして自分の外国人の友人に天然の温泉のなかで、妻子を一人一人紹介し始めたのである。この外国人は、もちろんいささかまごついてはいたけれども、この紹介は終始非常に奥ゆかしく行われたので、これに異議を申し立てることはできなかった⁽¹⁶⁾。

温泉とそこでの体験に好意的な印象を抱いていたことがわかる。これまで英国人登山者たちは雄山登山の前日に室堂に宿泊しており、日記や紀要でその宿泊環境を酷評していた⁽¹⁷⁾。室堂に宿泊せずに雄山へ登頂したウェストンの行程は外国人旅行者にとって非常に大きな情報で、4版から追加されたと考えられる。

おわりに

実際に立山を訪れ執筆・編集したサトウとホースによる初版・2版と比較すると3版は“TATEYAMA”の記述については物足りなさを感じざるを得ない。全体の大幅なページ数削減の影響とはいえ、佐伯有頼や雄山神社、材木坂の伝説などが削除されてしまっていることは残念である。4版もウェストンの情報提供の影響で多少の文章の追加はあるが、2版で削除された部分は復活していない。しかし、ウェストン自身は2版以降削除された内容に関心を持っていたと考えられる。ウェストンが自身の日本滞在中の登山記録をまとめた *Mountaineering and exploration in the Japanese Alps* では、材木坂の伝説や佐伯有頼などの立山の歴史や言い伝えに関してふんだんに記述している。材木坂については、「昔々、地の神をまつる社が建てられる時に、たくさんの木が倒され、この地点に準備されてあった。不注意にもそこまで迷って来た一人の女が、横たえてあった材木の上を踏み越えた。女が踏み越えるのは神聖を穢すことなので、材木はたちまち石に変えられた。」と書いている⁽¹⁸⁾。佐伯有頼については、最初に立山登山をやり遂げた人物であることや、芦峠には有頼を記念して墓が建てられていることを記している。さらには、有頼の妻が女人堂の結界を越えて頂

上を目指したところ、「姥石」に変えられ、その石が今でも残っていることなど、ウェストンが2版でサトウやホースが記述していた内容に着目して山中を巡っていたことがわかる⁽¹⁹⁾。また、書中では「マレ」(『日本旅行案内』のこと)を参照することを読者に促す箇所があり、ウェストン自身が『日本旅行案内』を持って旅をし、その情報を確認しながら立山を巡っていたと考えられる⁽²⁰⁾。

本稿では、ウェストンからチェンバレン、メーソンにどのように情報提供が行われたのかを示す記録や書簡の検討が不十分で、各著書からの推察という範疇を越えていないのが現状である。判断保留、未解明の部分については今後の課題といたし、このような点については識者のご教授をぜひ頂きたいと考えている。今回扱えなかった5版以降の検討を含めて鋭意研鑽を積んでいきたい。

[註]

- (1) 日本政府観光局、訪日外客数(2025年11月推計値)。
https://www.jnto.go.jp/statistics/data/_files/20251217_1615-1.pdf
- (2) 川村宏、三井嘉雄、安江安宣編「W・ウェストン年譜」(『山岳』第82年140号~第85年143号、日本山岳会、1987年)を参考にした。
- (3) 初版と2版は *HANDBOOK FOR TRAVELLERS IN CENTRAL & NORTHERN JAPAN* のタイトルで邦題は『中部・北部日本旅行案内』という。本稿では便宜上初版から9版までを『日本旅行案内』と記載している。
- (4) 令和7年度後期特別企画展「英国から立山へー『日本旅行案内』にみる立山ー」展示解説書(富山県[立山博物館]、2025年)の40頁から41頁を参照のこと。
- (5) この御社は雄山をさす。標高を9,500フィート(約2,900m)という数字は(実際は雄山の標高は3,003m)、地震学者ジョン・ミルンの論文“*EBIDENCES OF THE GLACIAL PERIOD IN JAPAN*”を参考にしている。
- (6) 2版の邦訳については、庄田元男『異人たちの日本アルプス』(日本山書の会、1990年)と『明治日本旅行案内〈下巻〉ルート編Ⅱ』(平凡社、1996年)を参考にした。
- (7) 註2、前掲書45頁から50頁。
- (8) 3版刊行の1891年から4版刊行の1894年の間で、編集者のチェンバレンとメーソンが立山を訪れた記録はなく、序文でウェストンの協力を明示していることから3版から追加された部分はウェストンからの情報提供である可能性が高い。
- (9) 註2に加えて、Weston, Walter (1896) *Mountaineering and exploration in the Japanese Alps*. London: J. Murray, p142-p165および、岡村精一訳『日本アルプスー探検と登山ー』(平凡社ライブラリー、1995年)の163頁から184頁を参照した。
- (10) 庄田元男『日本旅行日記1』(平凡社、1992年)90頁から94頁。
- (11) Weston, Walter (1896) *Mountaineering and exploration in the Japanese Alps*. London: J. Murray, p151-p162
- (12) 註4、前掲書25頁。
- (13) 註11、前掲書145頁から146頁。
- (14) “*The Monthly Record*”, *The Geographical Journal*, Vol. 3, No. 1 (Jan, 1894), pp. 53-64, <https://www.jstor.org/stable/1773607>
- (15) “*Proceedings*”, *The Alpine Journal*, Vol. 17, No. 123 (1894-1895), London: Longmans, Green and Co
- (16) 岡村精一訳『日本アルプスー探検と登山ー』(平凡社ライブラリー、1995年)168頁。
- (17) 註4、前掲書23頁、27頁。
- (18) 註16、前掲書165頁から166頁。
- (19) 註16、前掲書164頁から165頁。
- (20) 註16、前掲書167頁。

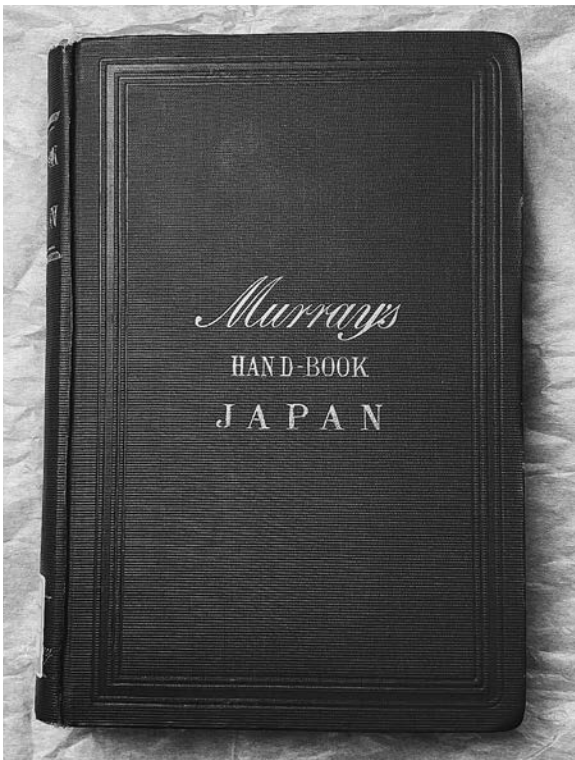


写真1 『日本旅行案内』(3版)の表紙
(国際日本文化研究センター蔵)

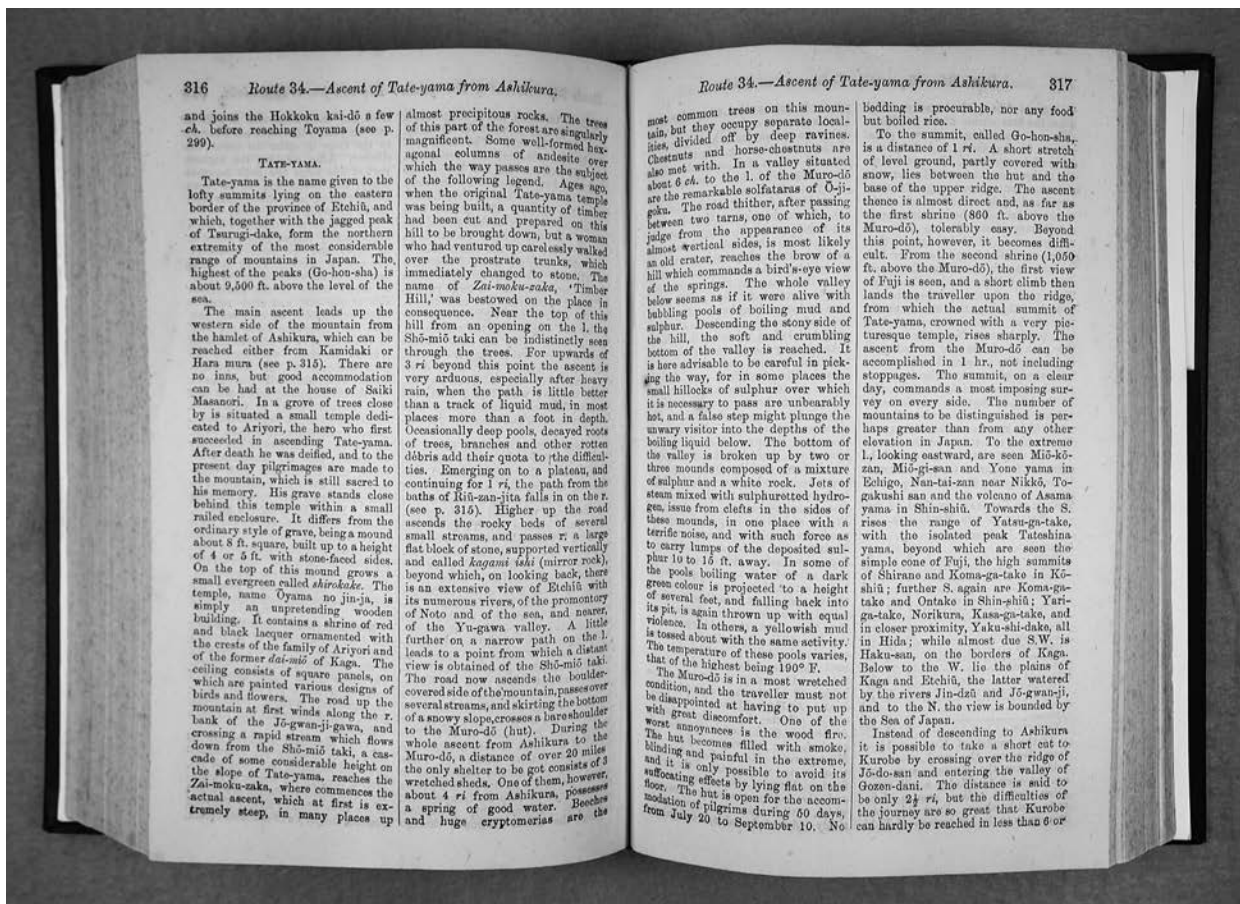


写真2 『日本旅行案内』(2版)の“TATEYAMA”を扱ったページ (国際日本文化研究センター蔵)

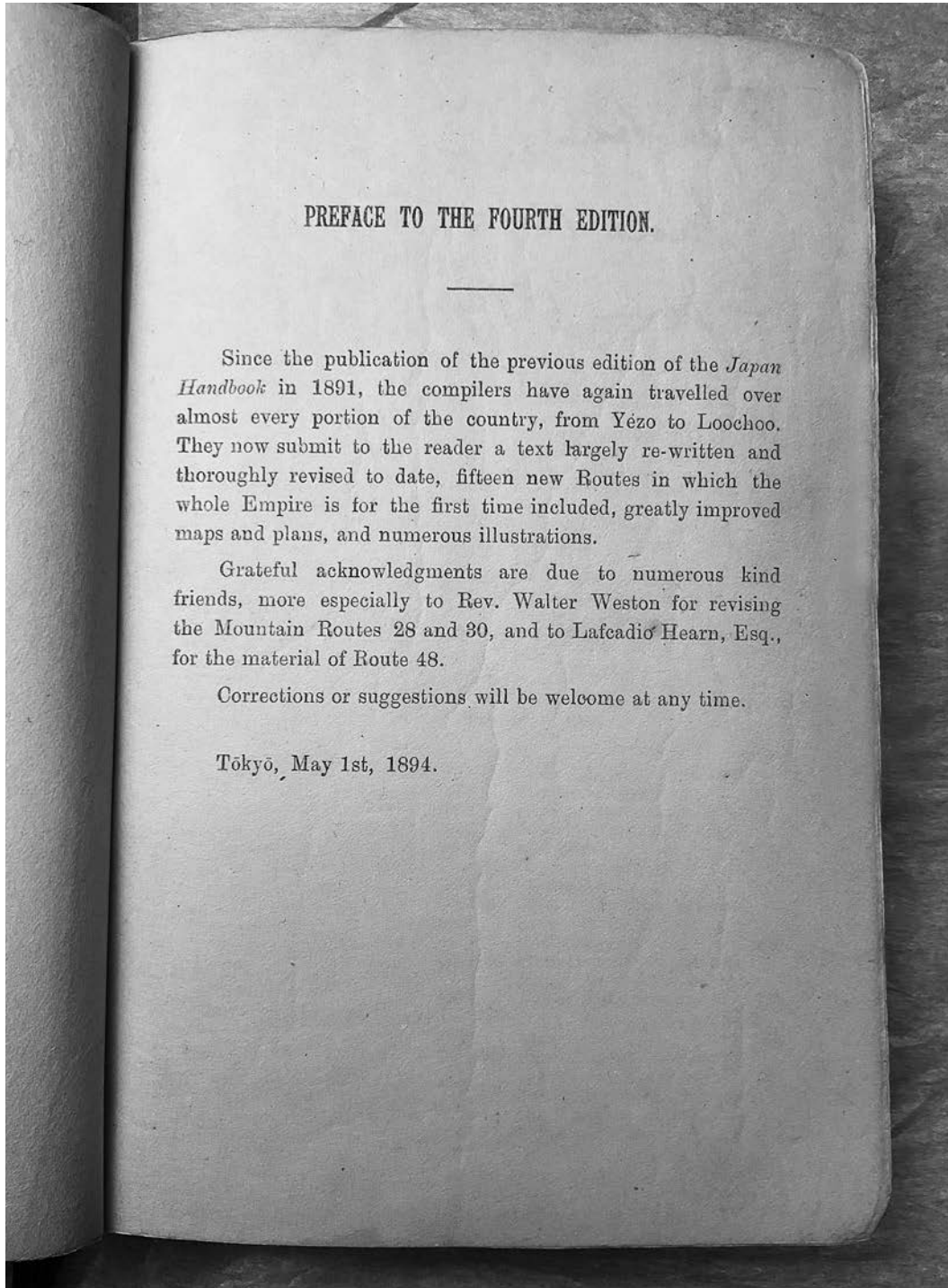


写真3 『日本旅行案内』(4版)の序文 (国際日本文化研究センター蔵)

〔資料紹介〕 芦峯寺一相坊の『印鑑帳』について — 芦峯寺宝泉坊旧蔵の資料群から —

細木ひとみ

はじめに

令和6年（2024）6月、芦峯寺宿坊家の一つ、旧宝泉坊のご当主より「岩峯寺の古い家を処分するので、家の中にあつたものを見に来ませんか」という連絡をいただいた。そこで、資料の寄贈希望の旨を伺い、6月26日に岩峯寺集落の家から運びこまれた事務所の一角で一つ一つ確認し、墨書があるものを中心に御膳等31点を7月5日に受け取ってきた（写真1）。その際に、木箱の1つに3冊の帳面が入っていることを確認しており、その後は順次、受け取ってきた資料のクリーニングや整理作業を進めてきた⁽¹⁾。

そこで、本稿では寄贈手続きのために進めてきた資料整理で確認した芦峯寺宝泉坊の旧蔵資料群と、その中から表紙に「江州高島郡村々／印鑑帳」、裏表紙に「宿院／一相坊」とある芦峯寺一相坊の『印鑑帳』（写真2・3）を紹介したいと思う。

1. 宝泉坊資料について

芦峯寺宝泉坊は、江戸時代中期までに江戸で檀那場を形成し、廻檀配札活動を行っていた。江戸時代後期には商人や職人、下級武士、遊郭の関係者だけでなく、諸大名や江戸城の関係者などにも布教活動していたことが宝泉坊文書から窺える⁽²⁾。

芦峯寺の蔵の中にあつた古文書や御膳の他、三河国（現・愛知県）の西尾藩主であつた松平乗全が描いて寄贈した「立山曼荼羅」宝泉坊本なども所有する宿坊家であつた。そのうち、御膳や版木、写真など233点は令和元年（2019）に当館に寄贈され、その一部は令和2年（2020）3月に国の重要有形民俗文化財に指定されている「立山信仰用具」へ追加されている⁽³⁾。

本稿で紹介する資料は、「はじめに」でも紹介したように、令和6年7月に受け取ってきた、宝泉坊の岩峯寺にあつた家に残されていた資料群である。受け入れた資料31点⁽⁴⁾については以下に記す（／は改行をあらわし、推測できる文字は□を入れてカとし、判読できない文字は■で記した。また、蓋があるものは蓋込みの高さを記した）。

（1）木箱

蓋の表面に「丙 寛政八年／越中立山／御嬬尊 御寶前／辰 五月吉日」（寛政8年＝1796年）と墨書された、長さ34.0cm・横25.2cm・高さ8.0cmの木箱（①）である（写真4）。中には、和綴じ本の帳面が3冊（①-1、①-2、①-3）あり。

（2）漆塗黒椀

蓋の表面と側面に「菊二蝶模様／漆塗黒椀十人前／寶泉坊」と墨書された、中に仕切りがある木箱（長さ29.0cm・幅14.8cm・高さ21.0cm）に黒塗りの椀と蓋のセットが7人前と椀のみが1人前入っている。

（3）錦井

直径25.4cm・高さ10.2cmの錦井が、長さ28.1cm・幅28.2cm・高さ16.5cmの木箱に2個。蓋の表面に「錦

デノ井／寶泉坊／泰音代」、裏面に「慶應三卯十一月十五日／撰吉日四十路の賀を祝／其砌求之／芦峯寺寶泉坊／現住／泰音誌」とあり、さらに木箱の側面にも「慶應三卯年十一月十五日求之／芦峯寺／寶泉坊／泰音代」とあることから、慶応3年（1867）11月15日に当時寶泉坊の当主であった泰音が四十路を祝って購入したものとわかる。

（4）番茶椀

蓋の表面に「蓋付蔦模様／番茶椀拾人前／寶泉坊」と墨書されている木箱（長さ33.2cm・幅27.2cm・高さ13.0cm）に、急須1つ（持ち手の一部は破損）と蓋付の番茶椀が6個入っている。

（5）茶碗

蓋の裏面に「明治四十五年六月／五良入／茶碗／佐伯義隆」と墨書されている木箱（長さ16.2cm・幅15.9cm・高さ12.5cm）に茶碗が1個入っている。茶碗を包む綿入りの巾着袋と袱紗もあり。茶道具の1つとして、明治45年（1912）6月に佐伯義隆が抹茶茶碗を購入したとみられる。

（6）御重

木箱の蓋の表面に「定文付／黒塗二重／臺附二重」と墨書されている。中には、蓋付で中央に大きく「丸に違い鷹の羽」の金色の紋がある2段の御重（長さ21.9cm・幅22.7cm・高さ5.3cm、中は朱塗）2セットと、左隅に「丸に違い鷹の羽」の金色の紋がある臺（長さ27.4cm・幅27.4cm・高さ3.2cm）が1つ入っている。

（7）看板

長さ70.0cm・幅23.5cm・厚さ2.0cmで、上部に掛けるための穴がある。「起死／回生 暴瀉病氣絶霍乱痢疾其他諸症二大効アリ／寶丹／官許本家賣鬻所 東京池之端守田治兵衛」と陰刻されており、暴瀉病（コレラ）と気絶、霍乱（胃腸炎や日射病など夏に起こる病氣）、痢疾（下痢を伴う病氣）などによく効くという「寶丹」の看板である。

（8）鉄造地藏菩薩立像

総高16.3cm・台座幅5.5cm・奥行3.4cmの鉄造の仏像である。岩峯寺の雄山神社前立社壇所蔵の鉄造地藏菩薩立像（玉殿の岩屋から出土）と形状が酷似していることから地藏菩薩立像とみられる。台座裏には穴が開いているので、何かに立てて安置していたことも考えられる。

（9）神棚

高さ20.0cm・幅10.5cm・奥行4.0cmの神棚で、扉右下の金具と祭壇の一部が破損。中に「猿田彦大神／二見輿玉神社／宇迦御魂神」と書かれた御札が入っている。裏に「明治二十八年三月／伊勢ノ五十鈴ノ川上二鎮座／大宮初國々社参ノ節／琴平神社ニテ拜受 佐伯佐内／孫女八重」と墨書があることから、明治28年（1895）に琴平神社へ参拝の際に拝受したものとわかる。

（10）神棚

高さ19.8cm・幅10.4cm・奥行4.0cmの神棚で、扉の一部が破損。裏に「明治四十三年十月四日出発／全十一月一日着 佐伯永丸六十二才／妻ナタ五十九才」（明治43年＝1910年）と墨書がある。

（11）鏡

直径21.5cmの鏡が木製の台に設置されている（台から外せないため、柄のはまっている部分は確認でき

ない)。総高32.8cm・台座幅19.7cm。

(12) 佐伯有頼像

岩座に立ち、右手の人差し指を前方に突き出し、左手に鷹をのせていたとみられる佐伯有頼像（総高17.8cm・像高15.4cm・岩座幅11.2cm）。鷹は紛失。像は軽く、全体を黒く加工している。

(13) 笏

上部6.8cm・下部4.8cm・長さ34.7cmの笏。

(14) 笏

上部6.5cm・下部4.0cm・長さ39.3cmの笏。

(15) 金剛鈴

高さ17.5cm、直径7.7cmの五鈷鈴。

(16) 写真

紙の台紙（縦27.1cm・横21.1cm）に貼られた、縦15.2cm・横10.9cmの写真。台紙に吉原日進館／備後三原」とマークがあり、裏に「大正十一年四月十二日／於廣嶋県糸崎町／松寿寺戒場撮影／于時齡八十一吉祥山主」と墨書されている。

(17) 漆塗黒椀

蓋の表面と側面に「菊二蝶模様／漆塗黒椀十人前／寶泉坊」と墨書された、中に仕切りがある木箱（長さ28.8cm・幅14.8cm・高さ21.0cm）に黒塗りの椀と蓋のセットが10人前入っている。先に紹介した（2）と同じもの。

(18) 御重

上部に持ち運び取手が付いた、高さ63.4cm・幅25.8cm・奥行24.7cmの黒塗りの木箱に5点の御重が入っている。御重は、蓋ともに内側が朱塗り、外側が黒塗りのものが2点（長さ22.6cm・幅21.2cm・高さ8.5cm）、内側外側ともに黒塗りで蓋が朱塗りのものが1点（長さ22.5cm・幅20.9cm・高さ8.0cm）、内側外側と蓋も黒塗りのものが1点（長さ22.5cm・幅20.9cm・高さ8.0cm）、内側外側は黒塗りで蓋なしのものが1点（長さ22.5cm・幅21.0cm・蓋なし高さ7.2cm）である。箱の一番上には引き出しが付いており、中に朱塗りの蓋（長さ19.7cm・幅17.9cm）が1枚入っている。

(19) 朱塗御膳（節供用）

長さ28.8cm・幅26.5cm・高さ18.8cmの木箱に入っている1人前の御膳で、節供の際に使用された。

(20) 朱塗御膳（節供用）

長さ25.0cm・幅24.4cm・高さ17.8cmの木箱に入っている1人前の御膳で、節供の際に使用された。

(21) 焼物皿

長さ25.4cm・幅25.4cm・高さ28.5cmの木箱に、直径19.2cmの焼物皿が入っている。蓋の表面に「焼物皿／二十人前／寶泉坊」と墨書されているが、19枚しかない。

(22) 朱塗膳

長さ38.5cm・幅38.8cm・高さ21.0cmの木箱に、長さ36.2cm・幅36.2cm・高さ3.5cmの朱塗りの平膳が5人前入っている。蓋の表面には「大正貳年度／朱塗膳五人前」、蓋の裏面には「金沢市殿□(町カ)十四番地／佐伯義隆殿」「乞」「□(珠カ)洲郡飯田町／志鷹邦義」と墨書がある。

(23) 御膳

長さ49.5cm・幅49.5cm・高さ31.0cmの木箱に、飯椀や平椀、汁椀、高坏、湯筒(水差し)、立山権現の紋入りの朱塗りの角瓶子などが入っている。蓋の表面に「舊／豊後杵築城主松平市正／圓照院 源親良卿／奥方 繁子／御膳箱／越中立山アシクラ／佐伯佐内代」、蓋の裏面に「越中國富山梅澤町圓隆寺内／芦倉屋源五郎殿迄／全 佐伯永丸様行／至急 東京駿河町九番地／明治十二年／六月五日 若林久八方三□(棧で隠れている)／佐伯佐内」と見え消しのような状態で「伊勢町／富田屋彦四郎殿預ケ／明治九年十一月九日／石河縣越中第六大區五小□(區カ)／立山芦峯寺村六拾六番地／主 佐伯佐内」とある。また、木箱の内側の底に「東京向鳶須崎村取次 林俊久／初瀬屋／松平市正様ヨリ／親良公奥 繁姫様御膳／佐伯佐内代／明治十二年八月」と墨書がある。これらの墨書から、豊後国杵築城主の松平市正源親良卿の奥方である繁子の方(圓照院)から贈られたものとの説明書きもある。

(24) 御膳

長さ45.8cm・幅46.0cm・高さ25.0cmの木箱(蓋なし)に脚付きの御膳が1客入っている。朱塗りに金縁で、脚部分は黒塗りである。

(25) 御膳

長さ37.2cm・幅37.3cm・高さ106.8cmの木箱に脚付きの御膳(黒塗り)が3客入っている。
※(26)と同じもの。

(26) 御膳

長さ37.0cm・幅37.5cm・高さ107.0cmの木箱に脚付きの御膳(黒塗り)が3客入っている。
※(25)と同じもの。

(27) 御膳

長さ38.3cm・幅35.6cm・高さ94.6cmの木箱(破損)に脚付きの御膳(黒塗り)が5客入っている。膳の裏面中央に朱で「正」とあり。

(28) 扁額

「寶泉坊」と刻まれた、縦34.0cm・横95.9cm・奥行2.3cmのもの。裏面に「■住／泰音」と墨書がある。

(29) 欄間飾り

真ん中に立山権現の紋が刻まれたもの。欄間の飾り部分と考えられる。

(30) 書額

「忒省」と書かれた、縦39.0・横64.3cm・奥行1.9cmの額。部屋に掛けていたようで、上部裏に釘あり。裏面に「立山芦峯寺／安政六未三月 寶泉教坊／泰音(花押)／奉頂戴之／松平和泉守源乘全公御書」と墨書されている。また、額縁が破損のため外れるが、上部の内側に「安政六年未年六月出来 松平和

泉守源乘全公御書 立山芦峯寺宝泉坊六十二世」、右の内側に「泰音 御目見御直奉頂戴之」と墨書がある。これらの墨書から、安政6年（1859）6月に完成した書額で、「立山曼荼羅」宝泉坊本も描いた三河国西尾藩の第4第藩主・松平乗全が書いたものを宝泉坊当主の泰音が直接戴いたとみられる。

（31）書額

縦46.0cm・横158.1cm・奥行1.7cmの額。文字と絵の部分に大きく破れなどあり。部屋に掛けていたようで、上部裏に紐などが付いている。山岡鉄舟筆。

これら31点の資料群は芦峯寺宝泉坊旧蔵の資料として当館へ寄贈される予定で、今後展示などでも活用していくつもりである。

そして、（1）の木箱に和綴じ本の帳面が3冊入っており、そのうちの1冊が後述する芦峯寺一相坊の『印鑑帳』（①-1）である。ちなみに、2冊目は表紙に「越中／立山 常燈明□（請カ）取」、裏表紙に「講中」と記された『越中立山常燈明請取帳』（①-2、写真5・6）⁽⁵⁾であり、3冊目は表紙などなく、1丁めの右上に『鏡奉加帳』と記されている奉加帳（①-3、写真7）⁽⁶⁾である。

2. 芦峯寺一相坊の『印鑑帳』

それでは次に、縦27.4cm・横19.5cm・厚さ1.8cmの『印鑑帳』について紹介したいと思う。

『印鑑帳』とは印章の所有者と押印された印影を照合するために印章を登録した帳面で、表紙の「江州高島郡村々／印鑑帳」と裏表紙の「宿院／一相坊」から、芦峯寺一相坊が所有した、江州高島郡（現：滋賀県高島市）の村々の庄屋などの印章が登録されたものとわかる。

全137丁のうち、33.5丁は墨ありで、残りの103.5丁は墨なしである。そして、33.5丁の5丁に「覚」が記されているので以下に記す（一二点については、原資料には漢数字で記されているものの、本稿では横書きで見にくいので、アラビア数字にして記した。また、虫損で不明な文字は□で記した。句読点は筆者加筆。写真8～14）。

夫越中之國立山之藍觴与申者
人皇三十九代
天智天皇之御宇江州志賀郡志賀京
四條□郡主佐伯有若左衛門尉越中守二
被_レ叙_レ嫡男同苗有頼君大寶元年依_二
宿植徳本_一躋_二攀_レ立岳_一不思議之蒙_二佛勅_一
□□□薩埵之、仍_二化度_一剃髮染衣而
号_二慈興_一。則一千餘ケ日之間於_二玉殿窟_一
鍊磨修行無_二懈倦_一累功充滿而峯なる
九品浄土之妙躰を始め、谷之一百三十六
地獄湧出之為_レ躰、其分水鳥樹林に
国迄演_二法音_一有_レ姿全く十界真相之
無_レ陽事親りに得_レ視、是一切衆生
勸善懲惡之最第一なりと觀し踏開
給_レ御山なり。亦麓に立給_レ御媪尊方
奉_レ□ハ去地開關之時左右之御手ニ五穀と

麻之種子^{たね}を執持し、此土に降臨し給ふ
 天尊也。是一切衆生に始て衣食ニ与へ給ふ。
 是□（取カ）物能生之為母ゆへに号^{うぼと}嫗^と。仍而此地に
 受^う生もの衣食之備ハるも是皆御嫗尊之
 恵給ふ所なり云々。中畧。然處慶雲之
 初年慈興上人参内而立山開峯之始末
 并御嫗尊之奇瑞奏聞有りしに
 和も四十二代
 文武天皇御叡感不^{がらん}淺而七堂伽藍を
 建立し七千防（坊）四十九院悉く依^て
 御勅願^に、御草創有^レ之。干^レ時日本國中五穀
 宝□（熟カ）之御祈之。
 御綸印被^レ為^レ下置^一而已来朝暮祈念、干今
 無^二怠事^一、況此山之靈瑞奇特ハ四方に
 鳴渡りて諸国より有信之単、年々参詣
 夥敷、其中ニハ放逸無^レ懺之族有^レ之。蒙^二り
 頓罰^一怪妖之事多く欺^ケ敷次第罵、達^レし
 上聞に^一、国々郡邑之宿坊を定め参詣之砌者
 寺院に為^レ宿妄犯造悪を懺悔為^レ、絞
 清浄別火乃熟飯を進め御峯聴^二
 禪定^一之後、更に障導有^レ之事なし。
 然間、戦國之乱に候ハ者、七千坊も残少に
 滅却し歔歔悲泣無限次第、漸々治国而
 けり。依^二て
 加賀大守御願に^一、諸堂伽藍御再建有^レ之、
 祈念供養全く相續候。爰に有^二り一字^一
 號^二一相坊^一と。江州高島郡之宿坊なり。
 往昔より法續連綿たり。近頃無^レ據仍^二て
 頽患^一に、他出之違無^レ之、不^レ測配札之場所も
 及^二中施^一に、多罪之廻り深く海涵之御慈恵
 奉^レ仰^レ如^二先規^一、高島郡村々宿坊之義
 今般再興之御取究奉^二頼候^一。然ハ於^二て
 御宝前に^一、郡村及ひ御銘々家内安全子孫
 長久之祈念奉^二り修行^一度、其内触^レ縁^一にて
 立山御参詣之砌ハ御舍宿と被^レ定、万端
 御案内も仕度、左候ハ入我家人之因縁を
 結^レひ互相に安堵之思ひに住し永世
 繁昌之基を引起す無事を希而已。

嘉永七甲寅三月 越中立山
 一相坊（朱印）
 現住龍旭

江州高島郡之内
村々
御銘々中

末尾に「嘉永七甲寅三月 越中立山／一相坊（朱印）／現住龍旭」とあるので、この『印鑑帳』は嘉永7年（1854）3月に一相坊の当主である龍旭によって記されたものとわかる。

最初に、天智天皇の時、江州志賀郡志賀京四條の郡主であった佐伯有若左衛門尉を越中守に任命し、大宝元年（701）嫡男・有頼は立山へ躋攀したことによって仏より勅命を与えられ、剃髪して「慈興」と称したことが記されている。しかし、通常、縁起内で語られるはずの、「有頼が熊と鷹に導かれ玉殿窟まで行き、そこで熊が阿弥陀如来の化身で鷹が不動明王の化身であったことを知り、胸に矢が刺さって血が流した阿弥陀如来が立山を開くよう命じられ、「慈興」と名乗って立山を開いた」という話ではない。

例えば、文化14年（1817）に寺社奉行所へあげた控えである『立山縁起』（権教坊本、芦峯寺一山会蔵、富山県指定文化財）の「立峯宮和光大権現縁起」⁽⁷⁾には、

抑、大宝元年辛丑二月十六日、志賀京四條郡主。越中守佐伯有若之朝臣、始序符、同二年九月十三日、嫡男有頼、新川郡入布西之院、檢田之時、父之鷹申請、数日檢田之間、彼鷹俄指南遙山翫、初舞麓掩翹、後遊峯通声、鷹峯是也。然間、聞鈴呼呼彼、餌置待鷹、鷹待峯是也。弥翔峯、飛谷、更不還來時、事之由令達申之時、父勘気云云。我鷹不持來者、全不可向顔云云。而有頼大驚、尚入深山、朝志鷹、払霧、夕敷衣、卧雪、志鷹峯是也。

爰値熊而放矢了。件熊乍矢立登高山、熊雄嶽是也。則追鷹影、并趨熊跡而、尚到高山、小山嶽是也。遙向岩窟四十九之巖在之、或分仙銅之霞求之、仙人窟是也。石塔在凌龍山雲尋之、龍王嶽是也。龍神多之而、鷹滄天垂翹、納五鈿劔嶽、劔御山是也。熊青岩流血、入万仞之宝窟、玉殿窟是也。

見此窟、我射所之矢、金色之弥陀如来御胸誤。于時、抛弓矢、合掌、切鬢髮捨、傾頭、紅淚良久。金容早生身阿弥陀如来、親奉拜、則蒙冥加之教勅。仍之、宿善内薰、新願発外。蓋淨戒持木刃、亦生仏行欲全躰。

麓一之有聖跡、号五智寺。菓勢上人建立之地也。但、雖聞件名、未知彼所。遙尋煙之上、則詣伽門。有上人、号菓勢、清涼山文殊後身之。弟子名慈朝。爰、受戒、法称慈興。是弥陀再誕也。

と記されている。このことから、立山開山縁起では開山者・佐伯有頼が熊と鷹に導かれるという話は欠かせないものであったにもかかわらずである。

そして、『印鑑帳』にはその後、芦峯寺の嬭堂で祀られる嬭尊の縁起が続く。（1）「麓に立ち給う御嬭尊が開關の時に左右の御手に五穀と麻之種子を執持して降臨したこと」、（2）「一切衆生に衣食を与えた、母ゆえに嬭と称したこと」、（3）「生を受けるものが衣食を備えているのも皆、御嬭尊が恵んでくれたから」とあり、これらは芦峯寺で語られる嬭尊の縁起にも同様のことが記されている⁽⁸⁾。

一相坊については「江州高島郡の宿坊である」といい、この関係は往昔から続いてきたとする。しかし、近頃は配札が滞っていたようで、高島郡の村々との関係を再興しようとしていた様子が窺える。高島郡の村々の立山への参詣においても、一相坊を宿とし、立山への案内もしたいと記しているのである。さらに、「覚」の後には28.5丁にわたって以下のように高島郡の村々と庄屋の名前が記され、印が押されている。

- 一 平ヶ寄村
庄屋彦兵衛（黒印）
- 一 構村
庄屋彦右衛門（黒印）
- 一 井ノ口村

- 一 庄屋源左衛門（黒印）
北仰村
- 一 庄屋伊右衛門（黒印）
中ノ町村
- 一 庄屋傳左衛門（黒印）
同郡辻村
- 一 庄屋庄治衛門（黒印）
石田村
- 一 庄屋兵左衛門（黒印）
領家村
- 一 庄屋太郎左衛門（黒印）
同村
- 一 庄屋庄右衛門（黒印）
新保村
- 一 庄屋治郎兵衛（黒印）
弘川村
- 一 庄屋七郎左衛門（黒印）
三谷村
- 一 庄屋藤右衛門（黒印）
伊井村
- 一 庄屋重次郎（黒印）
酒波村
- 一 庄屋五兵衛（黒印）
岸脇村
- 一 庄屋長左衛門（黒印）
下弘部村
- 一 庄屋重助（黒印）
上弘部村
- 一 庄屋清左衛門（黒印）
梅ヶ原村
- 一 庄屋清三郎（黒印）
大床村
- 一 庄屋久七（黒印）
藺生村
- 一 庄屋長左衛門（黒印）
南生見村
- 一 庄屋次郎左衛門（黒印）
代印与兵衛
- 一 北生見村
庄屋
藤兵衛（黒印）
- 一 追分村

- 庄屋
治兵衛（黒印）
- 一 角川村
庄屋孫右衛門（黒印）
- 一 保坂村
庄屋徳左衛門（黒印）
- 一 途中谷村
庄屋安右衛門（黒印）
- 一 椋川村
庄屋四郎左衛門（黒印）
- 一 下古賀村
庄屋利右工門（黒印）
- 一 井ノ口村
庄屋仁兵衛（黒印）
- 一 平井村
庄屋五郎右衛門（黒印）
- 一 今市村
庄屋八左衛門（黒印）
- 一 米井村
庄屋才兵衛（黒印）
- 一 針江邑
庄屋忠右衛門（黒印）
- 一 霜降村
庄屋彦兵衛（黒印）
- 一 五十川村
庄屋藤平（黒印）
- 一 岡村
庄屋利兵衛（黒印）
- 一 日爪村
庄や弥惣兵衛（黒印）
- 一 木津村
庄屋九郎右衛門（黒印）
- 一 大供村
庄屋仙之丈（黒印）
- 一 植村
庄屋孫左衛門（黒印）
- 一 深清水村
庄屋佐兵衛（黒印）
- 一 深清水村
庄屋政右衛門（黒印）
- 一 大沼村
庄屋源右衛工門（黒印）

- 一 中ノ庄村
庄屋武左衛門（黒印）
- 一 新保村
庄屋甚左衛門（黒印）
- 一 沢村
庄屋伊兵衛（黒印）
- 一 知内村
庄屋権兵衛（黒印）
- 一 森村
庄屋弥三兵衛（黒印）
- 一 辻村
庄屋与左衛門（黒印）
- 一 石庭邑
庄屋三郎平（黒印）
- 一 蛭口村
庄屋
庄右衛門（黒印）
- 一 寺久村
庄屋五右衛門（黒印）
- 一 上開田村
庄屋
与吉（黒印）
- 一 下開田村
庄屋
長左衛門（黒印）
- 一 牧野村
庄屋
重右衛門（黒印）
- 一 白谷村
庄屋仁右衛門（黒印）
- 一 下村
庄屋
孫太郎□（黒印）
- 一 山中村
庄屋粟津新蔵（黒印）
- 一 浦村
庄屋
藤兵衛（黒印）
- 一 西濱村
庄屋吉右衛門（黒印）
- 一 辻沢村
庄屋半兵衛（黒印）

- 一 田井村庄屋
 作治郎（黒印）
- 一 森村
 庄屋利右衛門（黒印）
- 一 深溝邑
 庄屋太郎兵衛（黒印）
- 一 ワラその村
 庄屋平九郎（黒印）
- 一 太田村
 庄屋六太夫（黒印）
- 一 北舟木村
 庄屋弥太夫（黒印）
- 一 舟木村
 庄屋作太夫（黒印）
- 一 今在家村
 庄屋半七（黒印）
- 一 横江濱村
 役人甚四郎（黒印）
- 一 藤江村
 庄屋仁左衛門（黒印）
- 一 横江村
 庄屋孫右衛門（黒印）
- 一 川島村
 庄屋弥三郎（黒印）
- 一 島村
 庄屋武兵衛（黒印）
- 一 東万木村
 庄屋藤次郎（黒印）
- 一 西万木村
 庄屋増右衛門（黒印）
- 一 上小川村
 庄屋清治（黒印）
- 一 下小川村
- 一 鴨村
 庄屋孫右衛門（黒印）
- 一 永田村
 青冷寺 庄屋五右衛門（黒印）
- 一 なます川
- 一 打下風村
 庄屋与左衛門（黒印）
- 一 音羽村

- 一 庄屋九右衛門（黒印）
下拝戸村
- 一 庄屋九右衛門（黒印）
上拝戸村
- 一 庄屋九兵衛（黒印）
伊黒村
- 一 庄や彦七（黒印）
鹿ヶ瀬村
- 一 庄屋五兵衛（黒印）
黒谷村
- 一 庄屋文右衛門（黒印）
畑田村
- 一 庄屋文三郎（黒印）
武曾村
- 一 庄屋文三郎（黒印）
野田村
- 一 庄屋利右衛門（黒印）
宮野村
- 一 庄屋惣左衛門（黒印）
横山村
- 一 庄屋
万辻三吾郎（黒印）
上寺村
- 一 庄屋与八（黒印）
佐賀村
- 一 庄屋六右衛門（黒印）
三田村
- 一 庄屋
伊兵衛（黒印）
馬場村
- 一 庄屋清兵衛（黒印）
仁和寺村
- 一 庄屋平兵衛（黒印）
三尾里村
- 一 庄屋甚兵衛（黒印）
沖田村
- 一 庄屋繁次郎（黒印）
南市村
- 一 庄屋長右衛門（黒印）
鍛冶屋村
- 一 庄屋長右衛門（黒印）
下城村

- 一 庄屋助右衛門（黒印）
産所村
- 一 庄屋助治郎（黒印）
庄境村
- 一 庄屋茂右衛門（黒印）
南古賀村
- 一 庄屋平兵衛（黒印）
中野村
- 一 庄屋常八（黒印）
長尾村
- 一 庄屋嘉右衛門（黒印）
三重生村
- 一 庄屋文治郎（黒印）
五番領村
- 一 庄屋新右衛門（黒印）
十八川村
- 一 庄屋伊右衛門（黒印）
安養寺村
新町村
川原市村
- 一 庄屋又左衛門（黒印）
新庄村
- 一 庄屋兵五郎（黒印）
北畑村
- 一 庄屋儀右衛門（黒印）
堀川村
- 一 庄屋久右衛門（黒印）
山形村
- 一 庄屋重兵衛（黒印）
上ノ山多畑村三ヶ村
小荒路村
- 一 庄屋五郎左衛門（黒印）
知原村
國境村
野口村
庄屋儀助（黒印）

高島郡の位置について、『高島郡誌』⁽⁹⁾には「高島郡は滋賀縣に属し、近江國の西北部を占め、地形三角形をなす。其西北邊は福井縣敦賀郡三方郡遠敷郡に接し、西角は京都府丹波國北桑田郡に接し、南邊は京都府愛宕郡及び本縣滋賀郡に接し、東邊は北の一部は本縣伊香郡に接し、其他は琵琶湖に面す」とあり、日本歴史地名大系25『滋賀県の地名』⁽¹⁰⁾で村名を確認すると高島郡のほとんどが一相坊の檀那場であったと考えられる。

3. 芦峯寺一相坊とは

今回の整理で宝泉坊旧蔵の資料群から発見された一相坊の『印鑑帳』ではあるが、なぜ宝泉坊にあったのかはわからず、一相坊についても坊の他史料が残っていないため詳細は未詳である。

そこで、江戸時代に芦峯寺集落では衆徒・社人で一山（いっさん）という組織を構成し、中宮寺の祭事・法儀や管理運営などを執り行っていたことから、芦峯寺一山に残る史料をもとに一相坊について探っていきたいと思う。

まず、年号は記されていないが、芦峯寺伝来の延宝までの古い文書記録を集めた『旧記』⁽¹¹⁾の巻頭には、

先年有来ル坊者

○今(賢)賢坊 ○(賢)賢信坊 ○妙法房 ○安法坊

道實坊 ○満泉坊 ○藏泉坊 ○(マ)枯藏坊
今ハ玉仙

○立藏坊 物藏坊 ○宝藏坊 寶泉坊同名
今ハ一相坊 今ハ教算

永藏坊 宮藏坊 福泉坊同名 寶覚坊
今ハ大仙坊 今ハ宮之坊 今ハ宝傳

密藏坊 長見坊 善道坊同名 浄京房今ハ
今ハ金泉坊 今ハ吉祥 浄(言表カ)□□

慶藏坊 正藏坊 大同房真長 日鏡房(賢カ)□
今ハ教藏 今ハ正栄

大行房 多心房 ○座生坊 月光房同名
今ハ相善 今ハ泉光

三藏房 泉藏坊 大(宗)學坊 池之房
今ハ三学 今ハ實相 今ハ権右衛門

と記されているので、一相坊と名乗る以前は「立藏坊」であったことが窺えるものの、その坊名を他の資料で見つけることが出来ないため詳細がわからない。

延宝8年（1680）に立山芦峯の社領帳として寺社奉行へ提出した記録『越中立山中宮寺芦峯御社領付之帳』⁽¹²⁾には7坊（実相坊、泉藏坊、大仙坊、新泉坊、玉泉坊、日光坊、金泉坊）と13社人が記されているが、「立藏坊」も「一相坊」も記されておらず、さらに宝暦5年（1755）の『宗門御改帳』⁽¹³⁾にもどちらも記されていない。

なお、芦峯寺一山の構成が33坊と5社人に固定されたのは、寛政から享和にかけて起こった『日光坊騒動』からであるといわれている⁽¹⁴⁾。これに関連して、享和元年（1801）当時の芦峯寺衆徒と社人らが連署し、「一山の役職は本坊・末坊、本家・末家の差別ない」ことなどを確認し、衆徒を33坊、社人を5人とする旨を記して寺社奉行所に提出した「芦峯寺衆徒社人連印願書」⁽¹⁵⁾には以下のようにある（下線は加筆）。

乍恐書付を以奉申上候

一芦嶽寺衆徒・社人之儀者、開山慈興上人立山開闢之砌^カ、連綿与相統仕、右上人被相定置候山格式を以、毎月朔望廿八日於大宮講堂、御武運長久等之御祈禱相勤申候。右法勤座列之儀者、長官・座主・院主等集り前官次第列居仕候。且又正五九月ハ朔日^カ一七之間、右長官等参籠仕り、其上每歳四月八日^カ七月十六日迄百日之間、高堂山・金峯山之行法佐伯宮ニ而、衆徒・社人耆人充相勤申候。媪堂ニおゐて執行之儀者、毎朝寅之一天ニ御供奉備、四拾八燈明ヲ照し、年々順番ヲ以修法仕候。右長官・座主・院主与申候ハ、其坊々ニ傳^(差)り申候役所ニ而者無御座、欠人御座候節者、前官次第段々進之申儀ニ而、役坊或ハ本坊・末坊之指別無御座、何も同様之儀ニ候。尤社人之儀茂、本家・末家之指別無御座候。然所折々者、本末等之指別有之候段申出候族も御座候て、彼是懸合仕候儀も御座候ニ付、今般一山之者共示談之上、向後本末之指別等申出間敷時之列ニ随^(例カ)ヒ可申旨一統納得仕候。猶又是迄衆徒之内^カ社人ニ相成、社人^カ衆徒ニ罷成候者茂御座候而、其節ニ一山混雜仕候義も御座候ニ付、是又今般相しらへ、當時罷在衆徒高之通以來三拾三坊与相定、社人も當時在高之通り五人与相改、都合三拾八人ニ相究、向後双方共ニ増減不仕様、相心得可申旨一統納得仕候。仍之一山連名を以奉申上候間、夫々御聞届ニ被成下、以來一山之為縮方、何卒右之趣、押御紙面御渡被爲下候様仕度奉存候。此段幾重ニ茂奉願上候。以上。

立山芦嶽寺衆徒

享和元年辛酉十月

宝傳坊（黒印）
福泉坊（黒印）
正怡坊（黒印）
吉祥坊（黒印）
教蔵坊（黒印）
大仙坊（黒印）
善照坊（黒印）
宝泉坊（黒印）
玉仙坊（黒印）
相榮坊（黒印）
相善坊（黒印）
長覚坊（黒印）
浄光坊（黒印）
一相坊（黒印）
大乘坊（黒印）
教覚坊（黒印）
龍泉坊（黒印）
等覚坊（黒印）
三学坊（黒印）
宝珠坊（黒印）
相眞坊（黒印）
金泉坊（黒印）
教算坊（黒印）
宝龍坊（黒印）
泉光坊（黒印）
宮之坊（黒印）

- 實相坊 (黒印)
- 泉蔵坊 (黒印)
- 善道坊 (黒印)
- 日光坊 (黒印)
- 教順坊 (黒印)
- 眞長坊 (黒印)
- 權教坊 (黒印)

同社人

- 佐伯四郎兵衛 (黒印)
- 同 權右衛門 (黒印)
- 同 平四郎 (黒印)
- 同 武兵衛 (黒印)
- 同 惣吉 (黒印)

寺社

御奉行所

これを見ると、享和元年（1801）以降、「一相坊」が33坊の1軒として記されているのがわかる。そして、これ以降の一山の署名や捺印が必要なものには「一相坊」の名前が見え⁽¹⁶⁾、また享和元年（1801）以降に作られたとみられる「芦峯寺高割山草高并御寄進高絵図」（個人蔵）にも一相坊が記されており、どこに位置していたかは窺える（図1）。

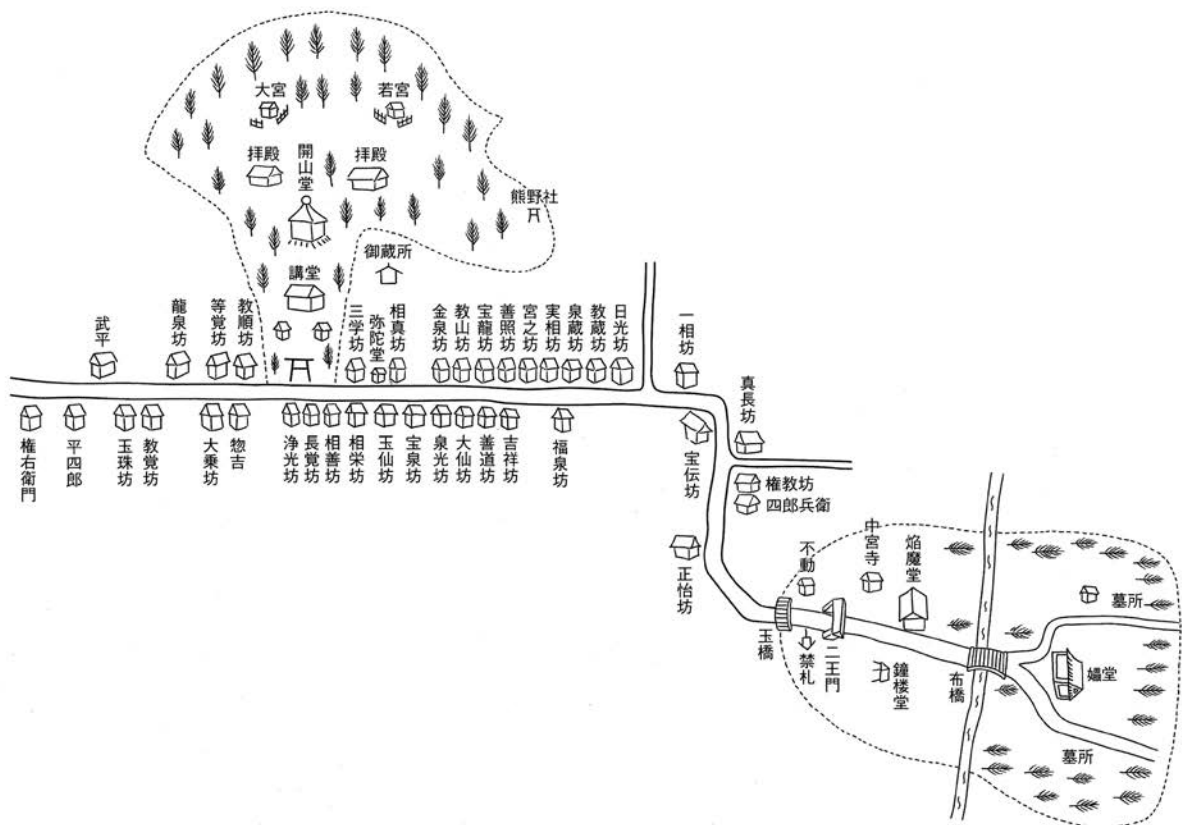


図1 芦峯寺の宿坊（「芦峯寺高割山草高并御寄進高絵図」より作成）

二付改名帳』⁽²²⁾には、

覚

一正（栄）坊事	佐伯要人
一宝伝坊事	佐伯带刀
一福泉坊事	佐伯右膳
一吉祥坊事	佐伯主殿
一善道坊事	佐伯兵部
一大仙坊事	佐伯大膳
一泉光坊事	佐伯司馬
	司宮次改
一宝泉坊事	佐伯大式
	左門改
一玉仙坊事	佐伯多仲
一相栄坊事	佐伯司書
一相善坊事	佐伯金吾
一長覚坊事	佐伯求馬
一浄光坊事	佐伯右門
一大乗坊事	佐伯主税
一教覚坊事	佐伯権太夫
一宝珠坊事	佐伯嘉太夫
一竜泉坊事	佐伯求官
一等覚坊事	佐伯主膳
一教順坊事	佐伯清記
一三学坊事	佐伯兵庫
一相国坊事	佐伯鞆負
一金泉坊事	佐伯右近
一教算坊事	佐伯右内
一宝竜坊事	佐伯大藏
一善照坊事	佐伯左近
一宮之坊事	佐伯主尾
一実相坊事	佐伯大学
一泉藏坊事	佐伯左門
一教藏坊事	佐伯中務
一日光坊事	佐伯首令
<u>一一相坊事</u>	<u>佐伯織部</u>
一真長坊事	佐伯内記
	宮門
一権教坊事	佐伯左膳

一右ハ今般

王政御一新御復古之御趣意二付、復飾神勤被仰渡之旨奉畏リ、依而改名申上候。以上。

明治二年己三月

立山芦峯
社人

とあり、『印鑑帳』より15年後の史料であるため龍旭と同一人物であるかは不明だが、明治2年（1869）の一相坊当主が「佐伯織部」と改名したことは窺える。

おわりに

本稿では、令和6年（2024）7月に受け取ってきた芦峯寺宝泉坊旧蔵の資料31点を紹介した。そして、特に和綴じ本3冊のうちの『印鑑帳』の翻刻と、これを所持していたとみられる芦峯寺一相坊について取り上げた。

『印鑑帳』を所有していた宝泉坊と一相坊の関わりはわからないものの、「丙 寛政八年／越中立山／御嬭尊 御寶前／辰 五月吉日」と墨書された木箱におさめられていたことを考えると、一相坊の当主である龍旭は嬭尊奉祀のための資金稼ぎとして、嘉永7年（1854）に高島郡の村々への配札を再興したとも推測できる。

今後は、今回紹介できなかったが同じ木箱におさめられていた『越中立山常燈明請取帳』と『鏡奉加帳』ともに、宝泉坊文書やその他の坊の文書なども併せて考えていきたいと思う。

〔謝辞〕

資料提供については、佐伯健一氏に大変お世話になりました。ここに記して感謝申し上げます。

〔註〕

- （1）資料のクリーニングは、令和6年度と令和7年度に実施した博物館実習の1コマとして行った。
- （2）宝泉坊資料については、福江充『近世立山信仰の展開—加賀藩芦峯寺衆徒の檀那場形成と配札—』（近世史研究叢書7、岩田書院、2002年）及び福江充『立山信仰と布橋大灌頂法会—加賀藩芦峯寺衆徒の宗教儀礼と立山曼荼羅』（桂書房、2006年）などを参照のこと。
- （3）国指定重要有形民俗文化財「立山信仰用具」や追加指定については、富山県〔立山博物館〕開館30周年記念・前期特別企画展『立山信仰と山麓のくらし—国指定重要有形民俗文化財「立山信仰用具」の世界—』展示解説書（富山県〔立山博物館〕、令和3年7月17日刊）を参照のこと。
- （4）その他に細かなものもあったが、何かの一部であったり、用途がわからなかったりするものなどは含めていない。
- （5）『越中立山常燈明請取帳』は、縦32.0cm、幅23.5cm、厚さ0.6cmの和綴じ本で、表紙の文字はほとんどかすれて消えてしまっている。全体に虫損がみられるものの、墨付きは6丁あり、13丁は白紙である。最初のページには「覚」として、嬭尊について「常燈明料壺ヶ年分／□百銅百文宛／寛保三年癸亥正月吉日 越中立山宝泉坊」と見える。つまり、この請取帳は、宝泉坊が寛保3年（1743）に嬭尊の1年分の燈明料として受け取ったものとわかる。6丁のうち、残りの5丁には寄付者の名前が記されている。
- （6）『鏡奉加帳』は、縦31.0cm、幅22.5cm、厚さ2.8cmの和綴じ本で、表紙や裏表紙はない。先祖供養の奉加帳である。
- （7）芦峯寺一山会文書、富山県指定文化財。『越中立山古記録』第三卷所収（廣瀬誠編、立山開発鉄道株式会社、平成3年10月28日刊）、2～3頁。
- （8）芦峯寺日光坊に伝わる、安永8年（1779）の「芦峯嬭堂大縁起」（個人蔵、『立山大縁起』三巻のうち）の冒頭に、

□（葦）嬭嬭堂大縁起
夫嬭者、天地未開先空々寂々
佛祖神明無名衆生未露無名
[]、以爰過去久遠昔、然燈
毘婆尸佛奉申已到好成國対

転輪聖王地水火風四縁合成立
 [] 方天地日月星
 □三光天神七代始号國常立
 命是一切諸佛衆生之母為万法
 [] 大天王示現三皇
 □帝始伊弉諾・伊弉冉命須弥
 成二柱現國土化生万物三界遊
 [] 我朝飛来、豊芦
 原邊現媼之形左御手納五穀、右
 御手執持麻種子刀利雲分来、八
 識鏡面照光法界、現大圓鏡智果
 □田地植五穀麻弘法界一切衆生
 人民躰裏、以大悲神力為天降彼
 土給也

とあり、欠損部分も多いが、媼尊を「一切諸仏衆生の母」とし、豊芦原辺りに左の手には五穀を納め、右の手には麻の種を執持し、媼の形で現れたとする。その他、文化14年（1817）の『立山縁起』（権教坊本、芦峯寺一山会蔵、富山県指定文化財）や、成立年代はわからないものの、芦峯寺善道坊に伝わった「葦嶺中宮寺媼堂大縁起」（富山県[立山博物館]蔵、『立山大縁起』三巻のうち、国指定重要有形民俗文化財）などの内容もほぼ同様である。平成29年前期特別企画展『うば尊を祀る』展示解説書（富山県[立山博物館]、平成29年7月15日刊）など参照。

- (9) 『高島郡誌』（滋賀県高島郡教育会、昭和2年7月5日刊）、1頁。
- (10) 日本歴史地名大系25『滋賀県の地名』（平凡社、2001年7月1日刊）、1054～1126頁。
- (11) 註（7）に同じ、28頁。
- (12) 註（7）に同じ、50～51頁。
- (13) 註（7）に同じ、52～59頁。坊は、宝仙坊、吉祥坊、教蔵坊、大仙坊、善照坊、玉仙坊、利照坊、三学坊、新泉坊、相真坊、金泉坊、教算坊、千光坊、宮之坊、実相坊、教順坊、千蔵坊、善道坊、日光坊、真長坊、権教坊の21坊が記されている。
- (14) 佐伯幸長『立山信仰の源流と変遷』（立山神道本院、昭和48年9月15日刊、172～173頁）には、「芦峯寺一山家は有頼公の血脈を伝えるものであるから男系の男子で相続され、万一、男の子がいなくて養子は許されず、門前家に降る。その代り男の子であれば、一定の修業と一定の家屋敷資財を用意すれば一家創立が許されて一山となることができるというのが、往古以来の制であったといわれる。ところが寛政年間に日光坊が女の子ばかりで断絶せねばならなくなったので、当時、「六坊」と称した泉蔵坊、大仙坊、日光坊、実相坊、金泉坊、竜仙坊の六名が連署して『日光坊は特別由緒の家柄であるから、格別に養子相続を許されたい』と寺社奉行ならびに一山一統へ申し出たのである。ところが他の衆徒社人は『古来の厳制を破る』といって反対し、村内が騒然となった。これを芦峯の言葉で日光坊騒動というのである。（中略）結局、寺社奉行の仲裁により『日光坊の養子相続を許す。その代り何れの家も養子が許される。従って衆徒社人の数を一定し増減しないことに定める。一山家は一切平同権とする』と合意したと記されている。これにより、享和元年（1801）以降、33坊5社人となっている。
- (15) 芦峯寺一山会文書、富山県指定文化財。『越中立山古文書』（木倉豊信編、立山開発鉄道株式会社、昭和37年12月30日刊）、55～57頁。
- (16) 例えば、文化3年（1806）に寺社奉行へ提出した『立山芦峯寺由来帳』（廣瀬誠編『越中立山古記録』第三卷所収、立山開発鉄道株式会社、平成3年10月28日刊、65～69頁）や文政元年（1818）の『納経一卷等記録』（廣瀬誠編『越中立山古記録』第一卷、立山開発鉄道株式会社、平成元年9月20日刊、101～103頁）、文政12年（1829）に寺号寺領御改めにつき寺社奉行所へ提出した文書の控えである『寺号寺領御改二付上之扣』（廣瀬誠編『越中立山古記録』第三卷所収、立山開発鉄道株式会社、平成3年10月28日刊、75～76頁）などである。
- (17) 『立山曼荼羅の里 史跡を訪ねる』（佐伯喜代男編集・福江充監修、立山風土記の丘[立山町教育委員会]・立山曼荼羅を偲ぶ集い、2001年7月刊、非売品）。
- (18) 芦峯寺一山会文書、富山県指定文化財。廣瀬誠編『越中立山古記録』第一卷所収（立山開発鉄道株式会社、平成元年9月20日刊）、123～124頁。
- (19) 記されていない宿坊は、一相坊の他に正怡坊・浄光坊・大乘坊・龍泉坊・宝珠坊・教順坊の6坊である。

- (20) 註(18)に同じ、202～212頁。
- (21) 高瀬保編『越中立山古記録』第二卷所収(立山開発鉄道株式会社、平成2年4月26日刊)、63～81頁。同史料には、天保12年(1841)11月15日に「一相坊孫 龍旭子 将之助」、天保15年(1844)11月15日に「一相坊孫 龍旭子 栄吉」、嘉永4年(1851)11月15日に「一相坊孫 龍旭子 安治郎」、安政4年(1857)12月13日入帳として「一相坊孫 龍旭子 数馬」、元治元年(1864)11月15日に「一相坊孫 龍旭子 お沢」、慶応元年(1865)11月15日に「一相坊孫 龍旭子 於久」とある。佐伯幸長氏の『立山信仰の源流と変遷』(立山神道本院、昭和48年9月15日刊、270～273頁)によると、一山組織の格式について記した『当山古格官位昇進之事』から、
- 一、霜月十五日は諸官の定日にて旧例に依り衆徒社人、一老の坊舎に集会致し、其日の古実は目代指選致し、先づ初めて入官の児は早朝神酒錫に昆布等差添え、座階入帳を相願う。尤も願主の多少は示談仕り膳部等を相調い申すべし。巳の刻に相成候て一老正面に着座、侍者聴許、其の外高官の衆僧左右に列座し諸僧懇懃の礼謝の上、姓氏神を勧請致し神酒を献じ夫々種々祝の式等の事。
- 終って席を相改め、開山伝来の座階帳に其の年入官の児の名相記し、右当日座階帳の順々を以って、児の登官等を始め、講堂の別当ども、官に准じ、中老役より諸堂定日の御祈禱、火の番掃除番に至るまで油断これ無き様、嚴重に申し渡し候。
- とあり、これについて「先づ一山家で男の子が生れると其の年の十一月十五日に長官一老の坊で入官式が行われる。一人一人母がその子を長官に渡し、長官は抱いて『いい子だなー』と返す。そして座階帳という戸籍と席次を兼ねたような帳簿に記入され法楽祝宴があって初めて一山人となる。」と述べていることから、各年に龍旭の子供が生まれ一山に入官したとみられる。
- (22) 註(7)に同じ、155～156頁。明治元年(1868)の神仏判然令の影響で、芦峯寺衆徒も還俗して神職となり復職名を列記し報告した改名帳である。



写真1 芦峯寺宝泉坊旧蔵資料群(令和6年6月)

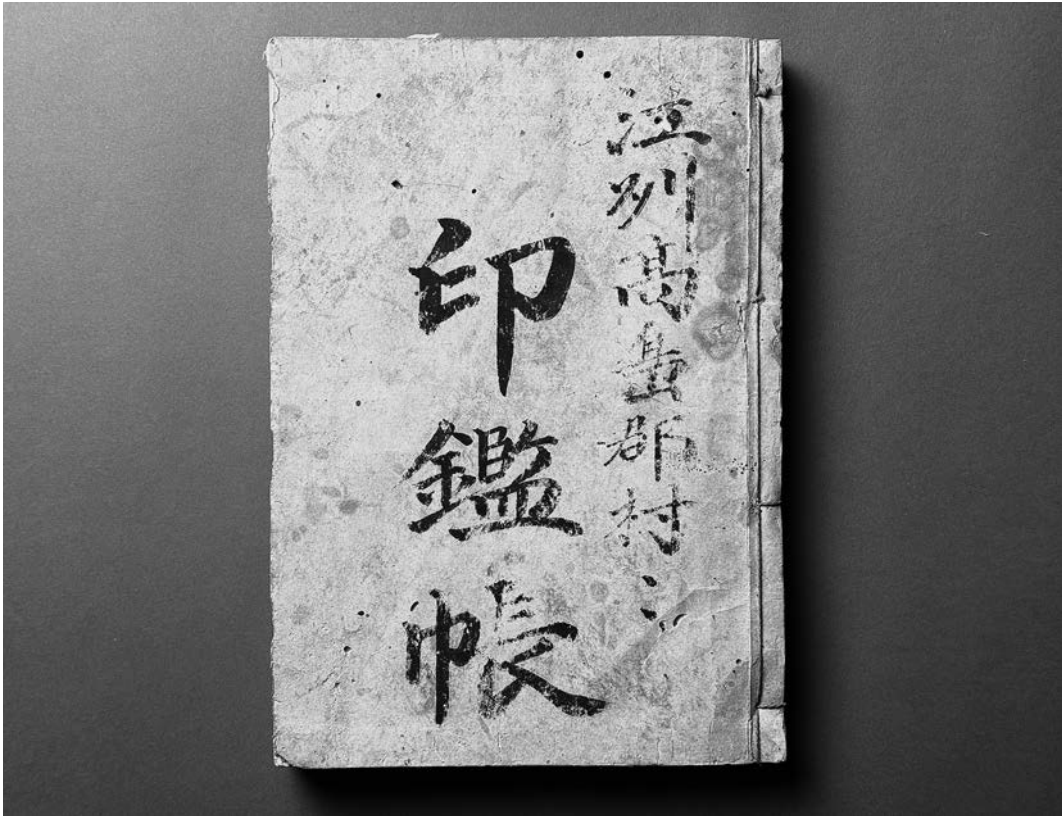


写真2 『印鑑帳』表紙

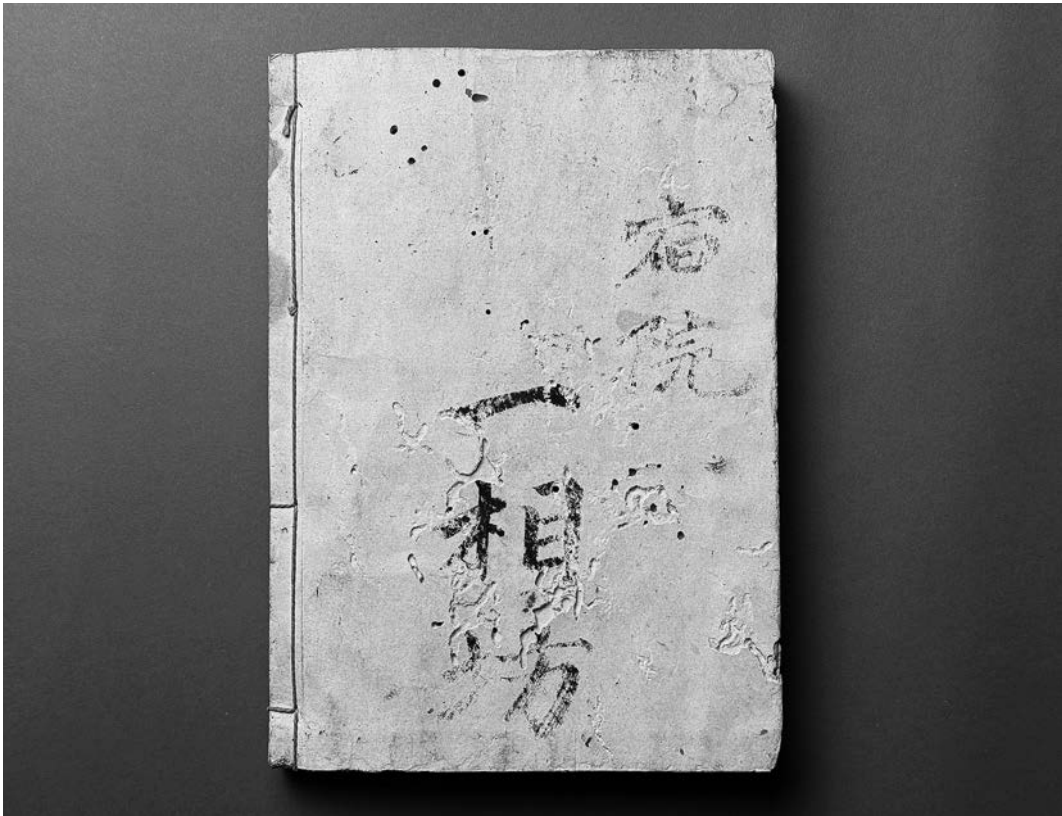


写真3 『印鑑帳』裏表紙



写真4 『印鑑帳』がおさまられていた木箱

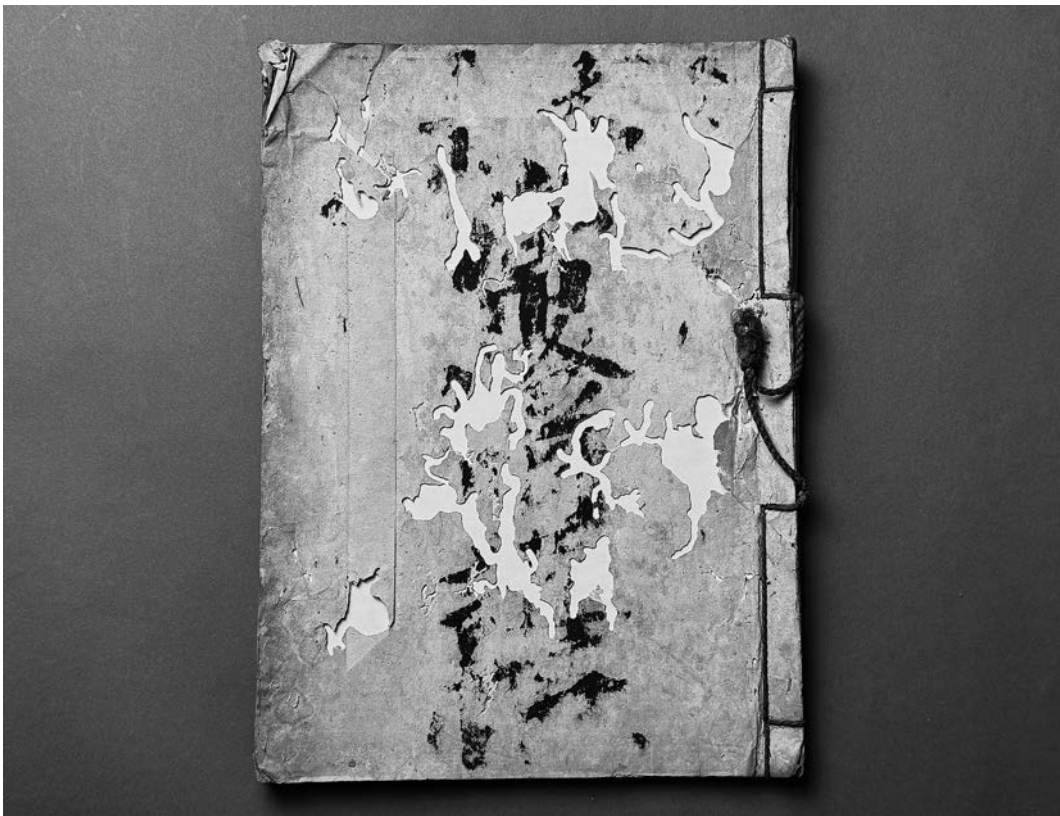


写真5 『越中立山常燈明請取帳』表紙



写真6 『越中立山常燈明請取帳』裏表紙

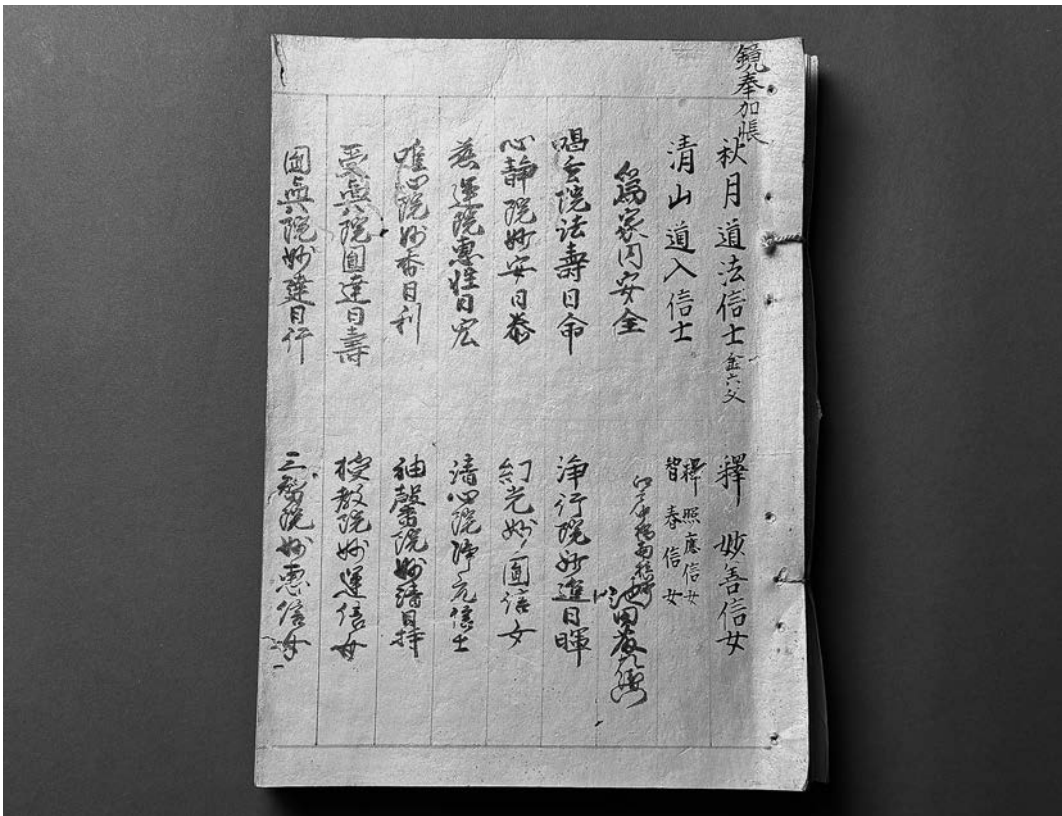


写真7 『鏡奉加帳』

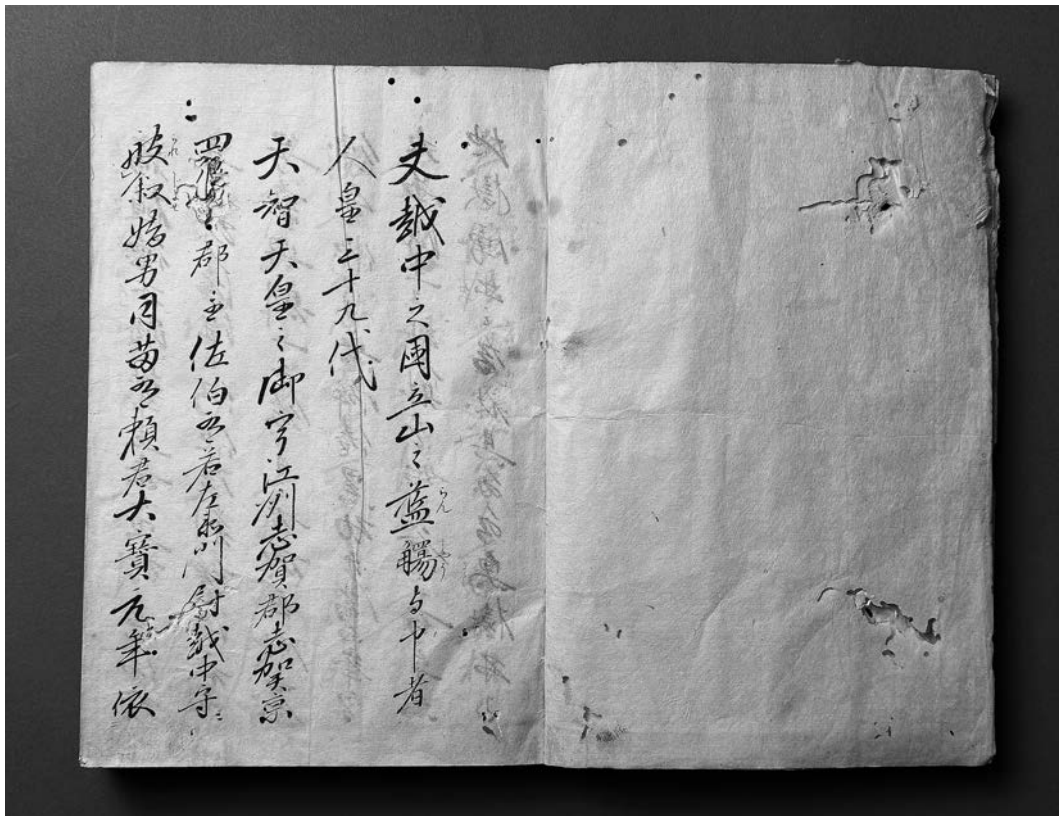


写真8 『印鑑帳』①

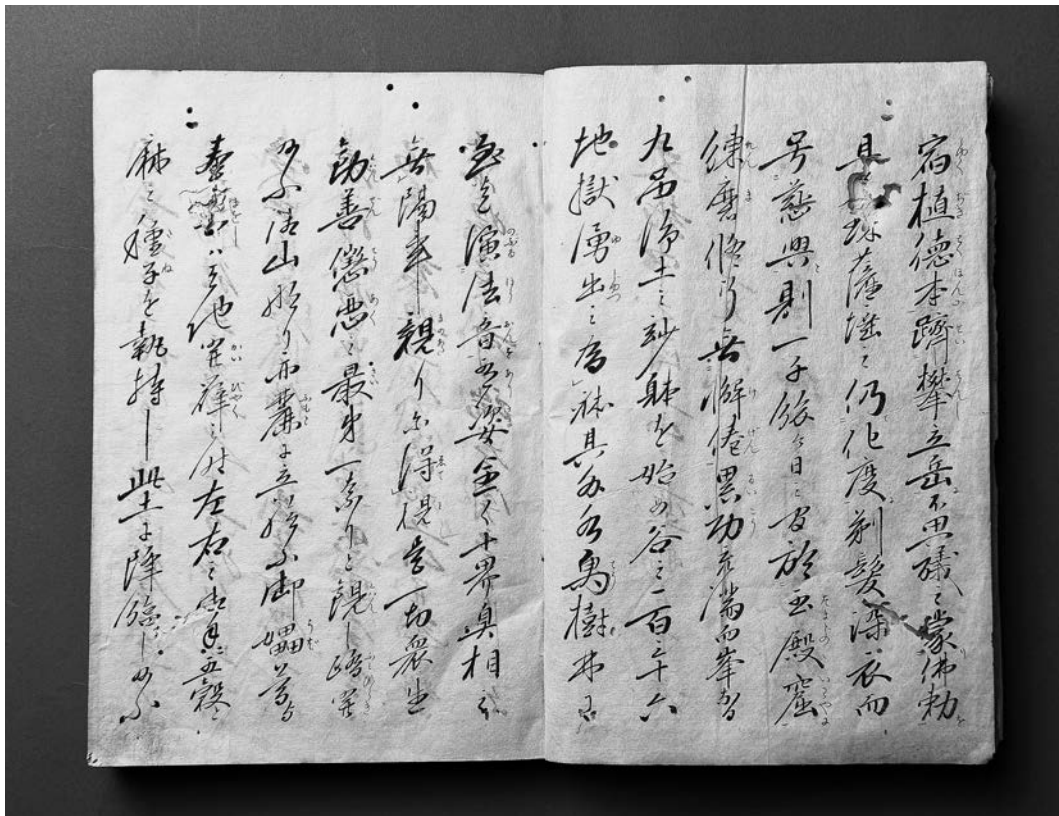


写真9 『印鑑帳』②

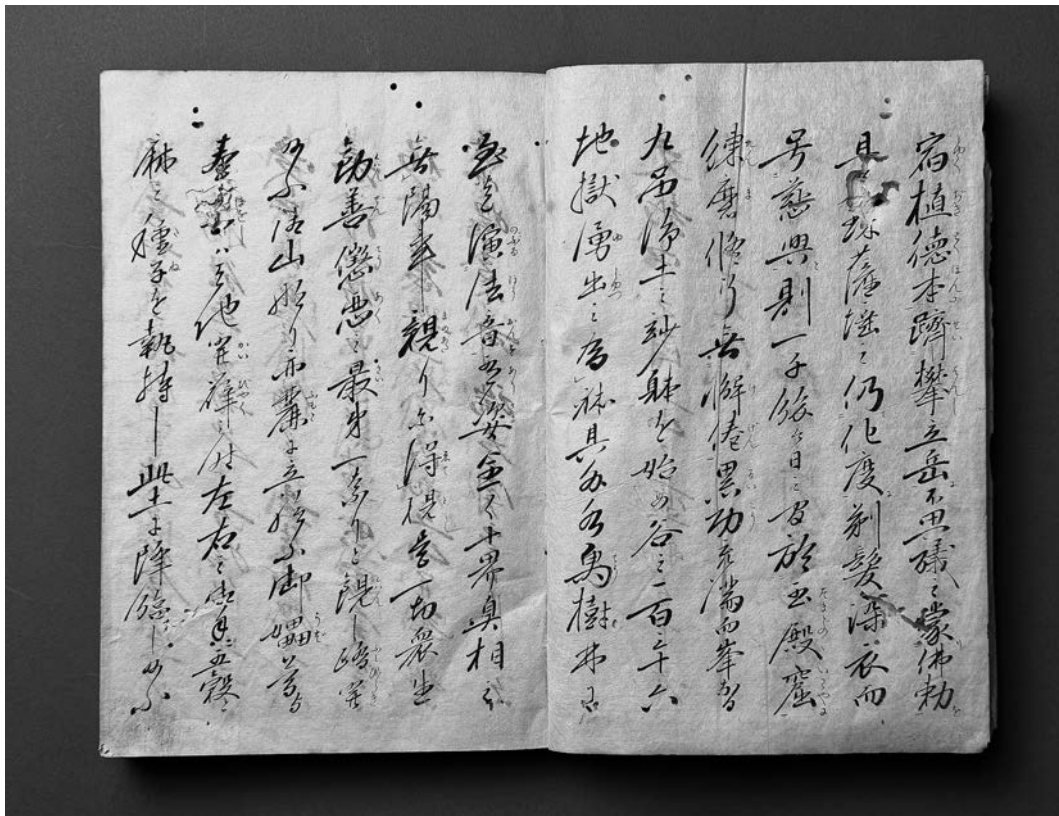


写真10 『印鑑帳』③

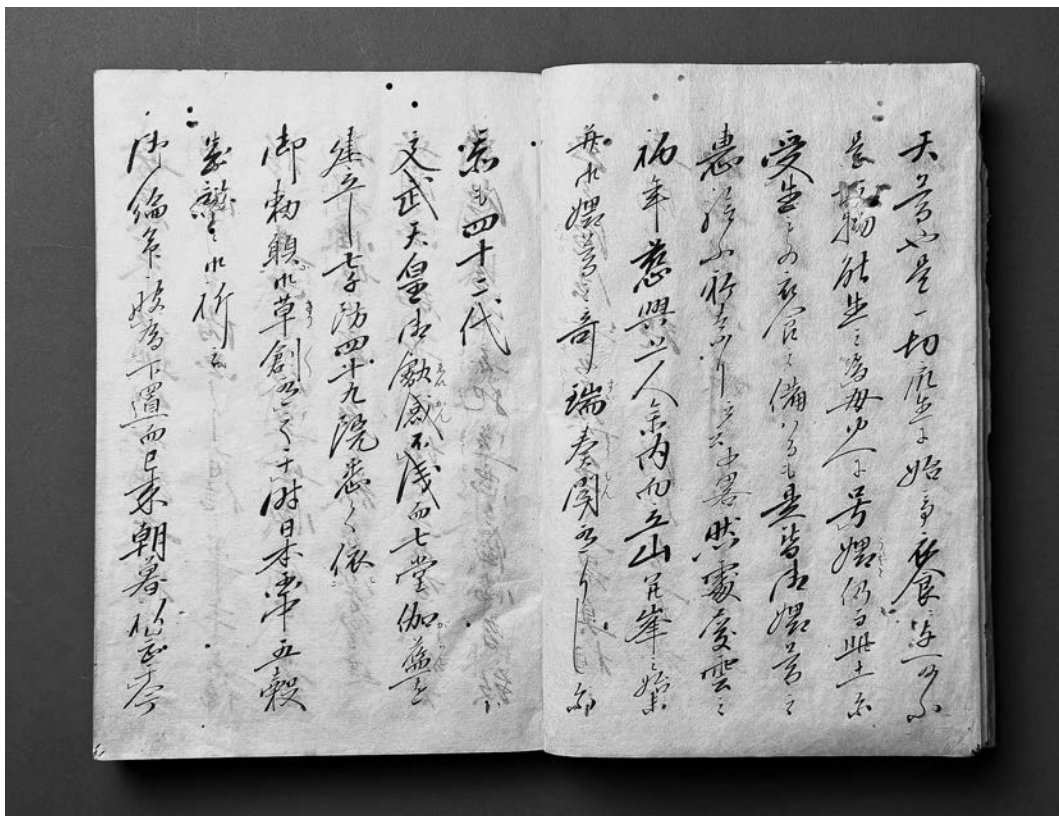


写真11 『印鑑帳』④

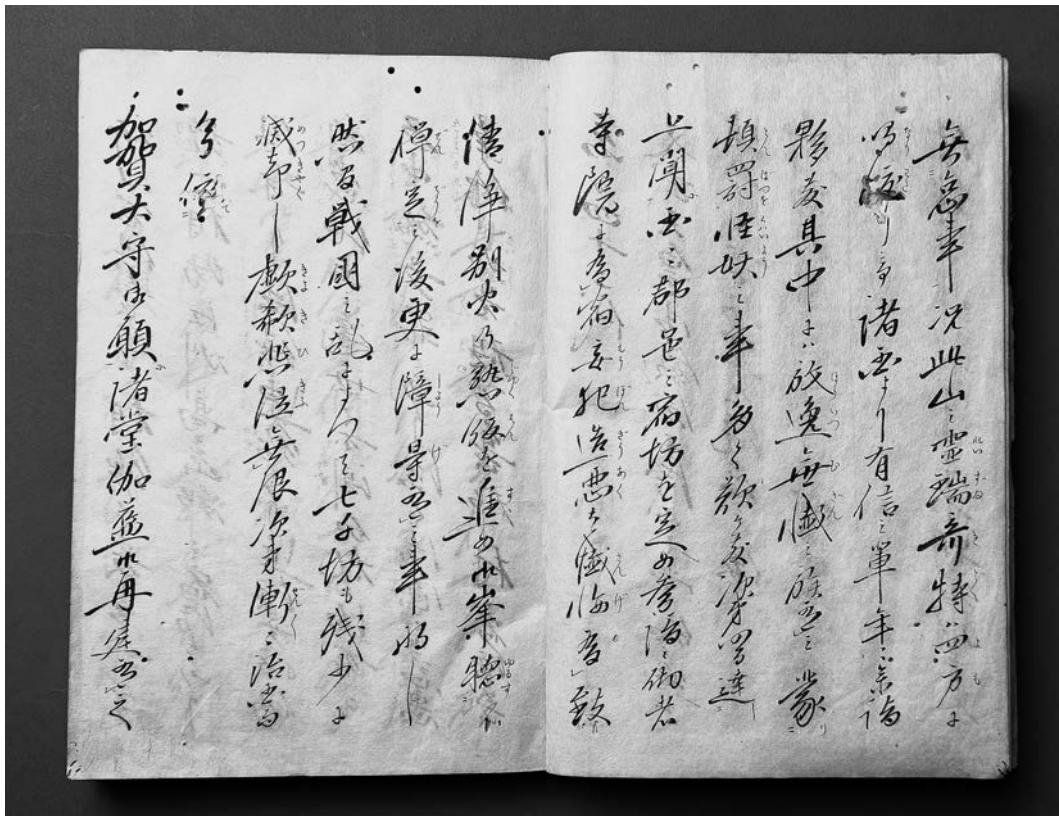


写真12 『印鑑帳』⑤

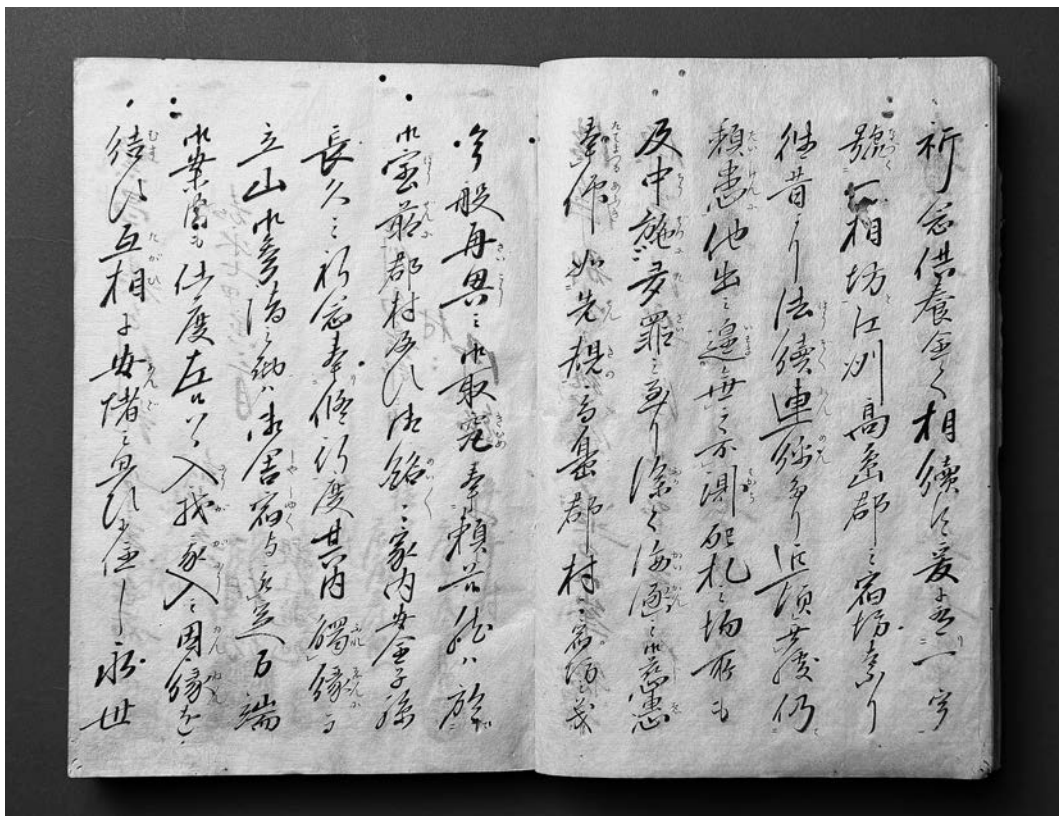


写真13 『印鑑帳』⑥

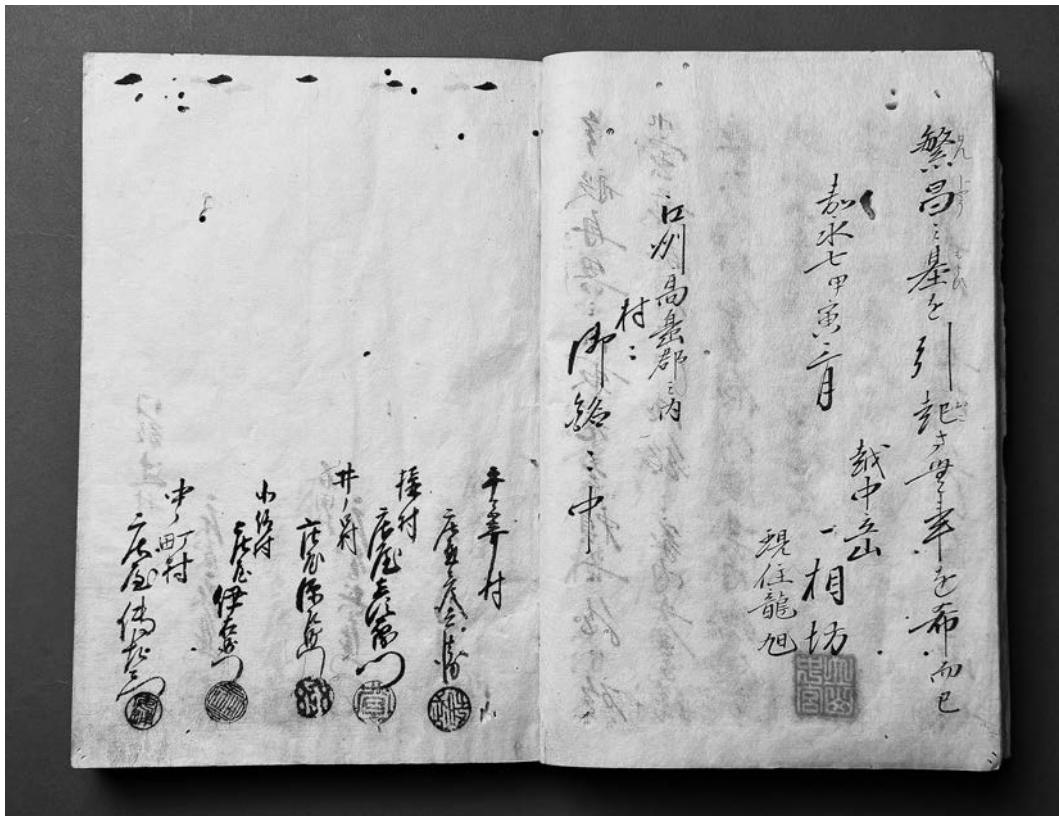


写真14 『印鑑帳』⑦

編集後記

このたび、富山県〔立山博物館〕の『研究紀要』第32号を発行いたしました。本号に掲載した論文等は、令和7年4月から令和8年3月までの研究成果を基にまとめたものです。

多くの皆様にご高覧いただき、広く活用していただければ幸いです。

富山県〔立山博物館〕研究紀要 第32号

編集・発行 富山県〔立山博物館〕
〒930-1406 富山県中新川郡立山町芦峯寺93-1
TEL:076-481-1216 FAX:076-481-1144

印刷 藪下紙工印刷(株)
〒935-0024 富山県氷見市窪1971-6
TEL:0766-91-3338 FAX:0766-91-0517

発行日 2026年3月31日

